
神の道化師

きんかい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の道化師

【Nコード】

N9142P

【作者名】

きんかい

【あらすじ】

ありきたりな世界。

私達にとっては異質な魔法や魔物、神がいる世界。

それでもその世界に住む者達にとってはありきたりな世界。

そこには私達世界のように、差別があり、戦争があり、理不尽でどうしようもないことがある。

そこには私達のように姿形が同じでも違ってても、悲しみがあり、愛があり、様々な感情がある。

そんな世界に生まれた後の魔王と勇者。

彼らはこの世界にどんな音を響かせるのだろうか・・・。

第1話 歓喜の音（前書き）

初めての作品です。

プロフィールにも書きましたがこれは変だ、というものはどんどんご指摘してください。

パクリのように思われるのがあるかもしれませんが、その所は黙認してください・・・。（汗）なんとかオリジナルに仕上げたいと思います。

まだまだ未熟ですがどうか温かい目で見守ってください。

第1話 歓喜の音

ありきたりな世界。

この世界の名前はオルニア。

その中の一つの星。

その星の星読みや学者は最近この大地と海は丸く、球体になっているのが分かった。

そして、この星に名前をつけた。

ミレイティア（象徴）。

ここでは海と陸が4：6に分かれていて、6つの巨大な大陸と4つの海洋とに分類される。

そこには人がいて、魔物がいて、魔法もあり、神もいる。だが、そこに住む人にとってはありきたりな世界。普通に悲しみがあり、怒りがあり、差別があり、全てがある。

そんな中、ここに新たな二つの命が芽生えた。

地図を広げば西に位置するアムラ大陸。

北と南に大地が突き出ていて中央は膨らんでいる。

まるで、蛇が大きな獲物を丸呑みしたような形をしている。

大陸の広さは第三位。

しかし、この大陸に特徴などはなく、ただただ平和な毎日が送られている。

無論魔物の襲撃などもあるが他の大陸に比べて少なく、その分兵力は数も質も最も低い。

アムラ大陸には三つの国があるが、牧歌的な生活を送っており、それぞれの王や貴族は超の付くほど仲がよく、実質上、アムラ大陸自体が一つの国のように見られている。

その分競争という概念があまりなく、商業や技術力なども最も低い。

そのせいか、他の大陸の人々からは田舎大陸と揶揄されたりもする。そんな大陸の南端の村、サメス村。ドが付く程の田舎である。そこで農作をしている大家族の末子、ランディが今家の中から飛び出してきた。

「おじいちゃん、はやくはやく!!」
続いて、農業を営んでいるにはいささかひよろひよろした老人が出てきた。

「はいはい、ディー今いくよ。」
そうしてディー、ランディは祖父の手をつかんで先程とは少し遅く、それでもいつもより速く駆け出した。

ランディ視点

まったくもう、おじいちゃんったらおそい。
きょうはだいじなひなのに!

「急いで勇者様を見に行こうね、ディー」
そうなのだ。きょうはものがたりでなんどもみたゆうしゅさまがくるのだ。

みんながいうには、この・・・たいりく?、からでるゆうしゅは・・・
・ああ・・・700?、500?まあいいや、とにかくすっごくいいめずらしいらしい。

いいな、ぼくもなりたいな。エーナにはばかにされたけどかまうもんか。

ぜったいになつてやる!!

・・・あ!みえた!!

「見てごらん、ディー。すごいね。」

すごいすごい！ほんとにすごい！！

あれはば・しゃ、かな？それにキラキラひかるよるい。おおきなけん。

かっこいい！！

「おじいちゃん、かたぐるまして！！」

「はいはい」

スツ

うわあ……。

「おじいちゃん、すごいね！ぼく、ぜったいゆうしゃになる！！」

「そうかい、それはいいことだよ。がんばりね。」

「うん！！」

「じゃあ、おじいちゃんと約束しよう。」

「やくそく？」

「ああ、約束。」

「うん、いいよ！！」

「じゃあ、言うよ。ディー、本当に勇者になりたいんだったらね。

いいことをしてみんなから好かれたり、憧れられたりする必要があるんだ。だからね、ディー。約束してくれね。たとえどんなことしてもいい。でも、皆が嫌がること、迷惑がかかることは絶対にしちやあいけない。分かったね？ディー。」

「うん、みんながいやがること、めいわくになることはするなっ
てことでしょ？うん！約束する！！」

「ああ、ディー。約束だ。」

「うん、約束。」

後に、本当に勇者になる子の真の意味での誕生であった。

第1話 歓喜の音（後書き）

いかがでしょうか。

興味を持ってもらえたら幸いです。

できればご感想等を頂けたらなあ、と思っています。

前書きにも書きましたが不備があればドンドン言ってください。
なるべく皆が楽しめるように内容に仕上げたいと思います。

第2話 憎しみの音（前書き）

第二話です。

ぜひ楽しんでください。

第2話 憎しみの音

北に位置する一番広い大陸、ケルニス大陸。

形は横に長い長方形の形状をしていて、極に近いせいか北は凍てつく様に寒く、南は比較的温暖、中央はこれまた横に長く延びているグレル山脈が連なっていて季節によっては北側より寒くなる。

こうした大陸で遥かに異彩を放つのはこの大陸を占める国である。なんとこの広さで二つの国しかない。

西側に人間の国のダンザン国、東に魔族、及び闇に生きるもの（俗に言う「闇夜の眷属」）の国のゼフェス国とに、ちょうどケルニス大陸を縦に分けるように、グレル山脈をも削り流れる大きな川、ベル二川を境に合間見えている。互いに国力は高く、兵力も充実していて、拮抗状態を保っている。

どちらの国も世襲制で、ダンザン国ではヴィンセント家が、ゼフェス国ではベイザス家が王として君臨している。二つの国は長年拮抗しあったせい、ここ百年戦らしい戦をしたわけではなくお互い無視の方向を暗黙の了解として決めていたが……今宵、その均衡が崩れた……。

ダンテ視点

ワアアア……ガッ グワシャン！！ ゴオオ！
オオオオ！！！！

ああ、燃えている……。

「陛下！、陛下！！、無理です！！正門が突破されました！！」

……ワアアア ゴスッ

父上が窓の外を見ている……………どうして？どうしてそんな顔をしているの？……………」

「陛下！かくなるうえは我々バラモン守護団が食い止めます。どうかご退避をッ！！」

バラモンおじさん……………」

「……………」

「陛下！！どうか……………バラモン……………」

「……………お前は、ダンテを連れて残党を引き連れ南に逃れる……………父上？」

「な、どういう「命令だ、バラモン……………行け……………」

「そ、それは……………ッなりませぬ！！そ「行け！！！！」」

「二度は言わぬ……………。この後の最後の戦闘もある。私をあまり疲れさせるな……………」

「陛下……………！！」

おじさん？

「さあ、ダンテ様、こちらへ。一緒に参りましょうッ！！」

「父上は？」

「ダンテ！」

「……………はい、父上……………」

どうして僕をそんな顔でみるのですか？

「ダンテ……………息子よ……………。すまない、私はお前に……………」

お前と一緒にもうこれ以上世界を見れない……………これからは、バラモンを……………師として……………全てを教わるのだ……………」

「

「父上……………」

「すまな……………い。ほん……………とくに……………ムウ……………ウ……………」

お前を……………ッ一人にして！！」

嫌だ……………。嫌だ……………」

バタン！！

「バラモン！！陛下はどうすると！？もうすでに敵は城内に入った
！」　ゴオオオオオ！！

「おお、カザン！手を貸せ！ダンテ様を死守して外に出る！！」
ワー！　ワー！　進めー！！

「ぬああにい！！貴様……！！ツ……そうか……。」
ガラガラ……　ズドオン！！

「そういうことだカザン。早く行け。」　ドム！！　シュガア
ン！　キツ……

「……へ……グラネル・ベン・ベイザス陛下！……御身
に安らかな月の横影が降りますように。」

「ああ……急げ。」

「ハッ！！」

手が引かれる……。嫌だ……。嫌だ……。

「父上！父上ー！！！！」

隠し通路に連れて行かれる。なんで……。どうして……。こんな
……。

シュラン……

剣を抜く父の姿が見える……。ツ……。！！

「お……。父さああああん！！」

ドガアアン！！！！　ドカドカ！！

「ここにいたか！「魔王」グラネル！！我が名はライゼム！ゼルム
教のSSランク勇者である！！災いの象徴を　打ち砕きに来た！！
！」

「イシュレニア教SSランク勇者カルナ、参る！！！！」

「真然宗の阿言。総本山『海皇山』より命を受けこの地に安寧を戻しに参った。」

「クツ、カザン行くぞ!!」

「己ツ!!」

あれが……勇者……。

「フン。最高ランクの勇者が三人か……。誇るべきか、不幸に思うべきか……。」

……まあいい。ゼフェス国十二代目国王、グラネル・ベン・ベイザス。……来い!!!!!!」

ギュアン!!　ズガン!　ガアアアアア!　アアアア　アア

・
・
・

ダダダダダダ!!

タタタタタタ!!

「先程の勇者共に気づかれただろうか？」

「どうだかな。陛下が注意を逸らしていたが……。あの僧には気付かれていたろうな……。」

「クツ、不覚!」

「どのみち王子がいないことは遅かれ早かれ知られるのだ。考えてもせないだろう。」

「いや、俺が言ってるのは王子自身についてだ……。あんな光景を見ては……。」

……。カザンおじさんがなにか言っている……。

「むう、確かに。急いで退避すべきであった……。」

バラモンおじさん……。
……僕は……。

「……………おお、見えてきたぞ！」
「うむー！」

暗い所から少し明るい所にでた感じがする……………まさか……………
……………ああ……………月と星か……………。

「カザン將軍、バラモン將軍！ダンテ様までッ、ご無事でー！」
「おお、ブブマ！無事だったかー！」
あ、ブブマさん……………。

「は、なんとか王宮兵三十名で脱出を……………その様子では……………
陛下……………は……………。」

「すまん……………守ることさえ……………できなかつた……………。」
「いえ、バラモン將軍。陛下がお決めになったことでしょうか？ならば我々は……………それに従うのみです。」

「だがー！、ッ……………くそっー！」
「……………いくら集められそうだ……………。」

「兵はおそらく5千程度、食料は……………どう見積もってもそれくらい
の人数に分けられません……………。」

「……………皮肉だな……………。あまり助からなければいいと思ってしま
つたッ……………。」

「カザン。」
「俺が、俺がどんな思いで……………、どんな思いで育て上げた奴らだ
というに……………。」

「もう言つな！カザンー！……………辛くなるだけだ……………。」

ムクッ

「あ、殿下！？」

「王子ー！ー！」

「気が付かれたかー！ー！」

・・・・・・・・・・。

「バラモンおじさん、都が、見たい・・・。」

「な、なりませぬ!!ここは「見たいんだ・・・。」

「・・・見たいんだよ・・・バラモンおじさん・・・。」

「・・・八。」

「・・・。」

「では我々もお供に。」

・・・・・・・・

メラメラ!

ガラン!!カラン

ドオン!!!!!!

燃えてる・・・。

「・・・燃えてるね・・・。」

「・・・八。」

皆・・・みんな・・・全部・・・燃えてる・・・。

「魔王グラネルを討ち取ったぞおおおおお!!!!!!」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

!!!!!!

後ろの皆が息を呑むのが分かる。あ、泣いてる奴もいる。

・・・なんでだろ。泣けないや・・・。

・・・。

ああ、そうかやっぱりお父さん死んじゃったんだなあ。

これで僕は・・・一人・・・いや・・・。

フツと後ろを向く。

「・・・?王子?」

バラモンおじさん、カザンおじさん、ブブラ、・・・名前は知らないけど生き延びたものたち・・・。

まだ、こんなにいる。

そして……僕が……やらなきゃ……。

僕が……束ねなきゃ……!!

そのためには……。

「バラモンお……。バラモン。」

「ハ……ッ？」

やっぱり驚いてる。

「カザン。」

「ッ、ハッ！」

「ブブラ。」

「ハイ!!」

さあ、言おう。

「ぼ……私は、誰だ？」

「王子？」

「殿下？」

「もう一度聞く。私は、誰だ。」

「ッ、ッ、我がゼフェス国の王子！ダンテ・デイス・ベイザスであ

ります!!」「」

違う。

「違う。」

「「は？」」「」

違うんだよ……。

「……私の名はダンテ・デイス・ベイザス。ゼフェス国第十三

代目国王だ!!」

……ザワザワ……

……

「王……ッ、ハッ、失礼しました！陛下!!」

「……申し訳ございませんでした……陛下……!!」

「ハ、ハイッ！」

「ハ、ハイッ！」

そうだ、僕、いや、私は国王。

この国を守らねば……ならない……。

そして……いづれは……あの勇者共を……！この手で……！

「皆の者！よく聞け！今宵、我が父、先代国王は……死んだ！」

……

「だが、この国は滅びない……！……どんなことがあっても滅びない……！」

だから皆、この光景を、痛みを忘れるなっ……！あの火の熱を、敵の雄叫びを脳に刻め……！」

そして、またこの国を、大地を我が手に取り戻そう……！」

憎き勇者共に、我が国の民を害虫の様に殺戮し、あらゆるものを焼き尽くした者共に、同じ地獄を見せてやる……うではないか……！」

オオオオオオオオオオ！

「この場には、三十程しかいない！食料も絶望的だ！それでも……それでも私に、この国に尽くすか……！」

オオオオオオオオオオ！

「約束しよう！私は必ず全てを取り戻し……！全てを叶える……！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！

そうだ、ここからだ。ここから始まる……いや、始める……。そのためには……。

「陛下……。」

「バラモン、カザン。」

「ハッ」

「明日から、私に修行をさせる。これでもかと思う程きつくだ。魔法も剣術も、いや、お前達の知る全てを私に叩き込め!! そうしなければ、奴らを、勇者を、父を越えられない……。」

「……ハッ!!」

「ブブラ。お前は私に勉学を。あらゆる、全ての知識を。政治から言語、……全てを教える。」

「……仰せのままに陛下。」

やるとも、やってやるとも。お父さん、父上。そして……顔すらも見れなかった母上……。

見ていてください。必ずや……全てを……。

ワーーーーー!! ワーーーーー!! 魔

王を倒したぞおお!! ワアアアア!!

……そして……見ている。己を光と称する者共よ……。

その光を……塗りつぶしてやる……。

見ている……。

後に、魔王の中の魔王、全ての王の中の王と呼ばれる者の真の意味での誕生であった。

第2話 憎しみの音（後書き）

次から大筋に入っていきます。

といても始まりの部分ですが・・・。

感想、お待ちしております。

第3話 出会った音（前書き）

第三話です。

いろいろ変な二つ名が出てきますが、それは後の話で説明していきますので期待しててください。

それ程すごいものかどうかは人それぞれですが・・・。

第3話 出会った音

小さな田舎で小さな子供が勇者を夢見て十二年。
大きな国が滅んで小さな魔王が生まれてから十二年。

……経った……。

教会都市シャイア。地図で見ると真ん中に見れて、四方を流れる海流により楕円の形をした大陸、クセア大陸の中央に位置している都市である。

その名のとおり、教会集団が寄り集まってできた都市で、聖なる加護も有事の際には半端じゃない程降り注ぐ。

また、最高ランクの勇者や傭兵が常にそれぞれ五人以上守っている。なのでこの世で一番安全な場所とも言われている。

西には「主の涙」と言われるセミネ湖が、東には世界で2番目に広い大陸といわれるクセア大陸を丸々治める国、エグサンドル皇国の皇都ミネアが置かれている。なので、自然に商業も発達し、新鮮な情報もたくさん集まってくる場所にもなっていて、冒険家や旅人が必ず立ち寄る場所である。

ゆえに、シャイアは難攻不落の都市とも名付けられている。魔物などは絶対に近づかない聖域。

今、そこで二つの音が出会おうとしていた。

????視点

ふむ。難攻不落とはよく言ったものだ。これは落とすのはいくらなんでも不可能だな……。

ツカツカ……
教会の権力が集中しているから落とせば莫大な被害を出せると思っ
たが……。

ざわざわ……ザワザワ……
さすがは光の教団の中心。「腐っても」強固だな……。
まず、高い外壁……もう都市レベルではないな、なんだあれは……
高過ぎる。

仮に入れたとしても勇者がわんさか、兵もどっさりいるときた。
おまけに我々にとってはありがたくもない聖なる加護まで……
無理だな……。

これではダルケス城を狙った方が「陛下……」……。
……はあ、まったく。

「なんだ、ジエイド。」
「その、そろそろ戻りませんか。……危ないし……。」

こいつは……。
「ならば一人で帰れ。」

「そ、そんな。バラモン將軍とカザン將軍に……殺される……！」
はああああ。

「分かった。もう少し見てからな。」
「そんな殺生な！」

「分かったから大声を出すな。ここをどこだと思っている。」
「だから陛下に「ジエダだ」、ジエダに帰ろうといってるんじゃない
いですか。」

「情報はあればあるほどいい。」
「いや、それはそうですね……。何も御自分で行かなくても……」

「自分の目で確かめるからこそより確かな価値が出てくるのだ。そ
れに……。」

「それに……、なんですか？」

「このシャイアに潜り込めるような奴はそんなにいないだろう。・・・俺の陣営では、の話だが。」

「ムッ、失礼ですね。かなり難しいんですよ、魔力を抑えながら変身するの。」

「だから手の空いている我々が来たのではないか。」

「そりゃあ、將軍様方や導師様方は忙しいですけど。私が言ってるのはなんであなた様が直々に来るかな んですよ。」

「変か。「この私」が来るのが」

「にやつきながら言わないでくださいよ。不気味ですね……。」

「そりゃあそうでしょ。ユゼフェス国第十三代目国王であり、再帰の魔王とよばれているダンテ・デイ ス・ベイザス、本人が敵の懐も懐、シャイアにいるんですよ。絶対変ですね。」

「そうだろう。」

「そう……え？」

「そうだろうから今ここに来たのだ。後になるにつれ警備は強化されるだろうしな。正直、教団の高位クラスの者を騙せるとはこれっぽっちも思わないのでな。」

「そりゃあそうでしょう。それこそ大魔道師アヴィツラぐらいしかできないようなもんですよ。」

「そうだな。」

「それはそうだ。そこまでいくともう私は世界の大半を手中にしているだろう。」

「はああ、まあそれはともかくいい加減疲れましたよ。強行軍で来ましたからね。」

「と、傍らの隠密機動部隊隊長の「背中のように見える箇所」からパキポキと音が鳴る。」

「……貴様それでも隊長か。肩書きはそうでも將軍クラスの地位だぞ。」

「バラモン將軍とかと比較しないでくださいよ……。僕の体の

構造はそんな化け物っぽくないんです から……。」

「バラモンは人型だぞ。」

「いや、ですから構造ですって。僕はそんな体を鍛えていないんです。強いて言えば腕と足、ぐらい？」

聞いてどうする……。」

「まあ、僕の隊の重点はどんな角度、位置からでも敵を瞬時に気付かれずに綺麗に殺すことですから。筋 トレや 体力作りはそんなにせず、柔軟性と敏捷性を主に訓練していますから。」

ま、そうだろうな。

「分かつている。ついでに言えばお前を抜擢したのは私だぞ。単なる冗談だ。」

「ええ、ですから乗っかってあげたんですよ。」

こいつ……。」

「帰ったら貴様の報告書がどうなるか覚えている……。」

「え？え……。」

とはいえ、さすがに疲れたな。酒屋にでも入るか。

「よし、では手近な酒屋に…… ドガーーン!!」

なんだ？

「ぐはっ、畜生!」「がっ!」「……っ!」

あれは……酒屋か、別段特色はないが……。」

「まったく、てんでだめね。」

!!あれは……。」

「そんな動きじゃ、Dランクに届くかどうかよ。しがない傭兵さん。」

「くそっ、なんで「虹彩のエリーナ」がこんなところに……。」

『虹彩のエリーナ』……確かSSランクの勇者。

「残念。運が悪かったわね。ここんと国際情勢が芳しくないのは知っているでしょ？だから、こうして目に付きにくいようなところで談義してたわけ。もちろん、あなた達のような人とは違ってね。」

「な・・・につ？」

これはこれは・・・

「うわあ・・・」

ジエイドめ、臆したな・・・。まあ分からんでもないがな・・・。

「そこまでにしといたら？リーナ。」

光迅のリーガル・・・

「そうだ、あまりそんなことを乙女がするものじゃない。ま、乙女には限らないが。」

空隙のアシウトム・・・

「まあ、わからなくはないけどね。」

豪固のサルシエ・・・

「でも、汝人を打つなかれ、ですよ。」

聖なる聞き手へホーリーエイガーゥレナ

・・・これは・・・すごいなどではない。圧巻だな。

どれも次代を担う者と言われながら当代でも活躍しているSSランクの勇者と傭兵たち。

こうしてみると恐ろしいな・・・。

「・・・む・・・無理ツス、あれ・・・無理・・・。」

「誰も貴様に戦えなどといっておらん。表情をやわらかくしろ。」

「は・・・ふあい・・・。」

・・・もしもの時はこいつは置いていくかな・・・。

「ち・・・ちくしよー、・・・くっ、申し訳・・・「ごいませんでした!」!」

口々に他の者も謝罪の言葉を言う。

「ま、これに懲りたら酒に酔って騒動起こしたりしちゃダメよ。」

「・・・申し訳、ごいません。」

・・・トボトボと去っていった。まあ反発せんだけかもしれませんが・・・

「入るぞ、ジエイド。」

「は・・・い・・・。って・・・え？ちょ・・・ちょー！ー！！?」

「？」

カランカラン

「いらつしゃーい」

ふむ、奴らに近い場所に座るか。

ゴト

「ラク酒をもらおう。」

「はい。そちらは？」

「………フルフル」

「すまんな、体調が優れんだ。それだけでいい。」

「かしこまりました。」

城に戻つたら精神力も鍛えさせねばならんな。

「………だから………」

む、話し始めたか。

「目下の問題はゼフェス国だな。」

「そうだな。あそこは一回俺らの先輩にボコボコにされたからな。」

「また復活しちゃったんだよね。」

「そうね。絶対仕掛けてくるわよ。気をつけなくちゃ。」

「そうですね。人々は私達が守らねばなりません。」

フ……「人々」を……か……。

「どんな悪辣で、卑劣な行為をされても耐えるように呼びかけなき

やね。」

悪辣で卑劣、ときたか……。

（ひどいこといいますね。あいつら。）

戻ったか。

（とりあえずお帰りと言っておこつか。）

（あ、はい、ただいまです。……じゃなくて、ずいぶん自分勝手

な連中ですね。僕達の国はその悪辣で 卑劣な 行為をされたのに・

……。）

(宣戦布告なしの奇襲のことか。)

(それもありますし、首都や主な都市に滅殺の魔方陣を秘密裏に敷いてたじゃないですか。)

(……戦だ。詮無い事だ。)

(でも……………)

「では、沿岸部中心の警備を主に動くということでも良いですね。」

「ああ。」

「妥当だな。」

「オツケ。」

「ええ。」

ふむ、奴らの一団は北側へ行くつもりか……………。

「それじゃ、行こうか。」

「うん、……………あ、ちょっと先に厩舎に行つて。あたし用があるから。」

「そうか。早く来いよ。」

「うん。」

出て行く姿を見るのも圧巻だな……………隙がない。

む？エリーナは別に用があるのではなかったか？なぜまだいる……………。

こつちに……………気付かれたか!?

(ちよちよ、やばいですよ。)

(静かにしろ。動揺するな。)

(もしもの場合はどうするんですか？)

(ちゃんと考えてある。)

(……ホントですか？)

お前を囷にするという作戦がな……………。

……………ッ、来るか!?

……………過ぎた？

後ろに誰か……………!!???

そこには一人の男がいた。

到底勇者、いや傭兵とも思えない風貌。髪はボサボサ、髭はとりあえず剃ってみたとかいえない程整えられていない。来ている服はボロボロ、ほとんど埃などにまみれて灰色だ。武器らしきものは・・・木刀？

馬鹿な？このご時世に？普通なまくらでもナイフでも持っているベキだが・・・。

だが、エリーナはそいつに話しかけた。

「・・・久しぶりね。」

「・・・おう。」

「・・・今はなにしてるの？」

「この店のピアノ弾き。」

「そう・・・。」

「そ。」

「・・・両親、がっかりしてたわよ。」

「・・・ですよね。」

「それでいいわけ？」

「・・・いいんじゃないの？」

「ッ、あんた!!！」

ガッ

「あんたの親がどれだけあんたのことを思ってたか、いや、思ってくれているか。会ってみて最初の言葉が息子は元気が、よ！罵倒も一切しないで!!！」

「そいつは・・・ありがてえなあ。」

まったく意に介していないな。

「・・・どうして、辞めたの？あんたの夢だったじゃない。」

「どうしてって、・・・なんとなくだよ。」

「なんとなくて、貧しい大家族が一体になって作ってくれたチャン

入を、希望を捨てたわけ？」

「……………ああ。」

「……………最低ね。」

「……………。」

「昔のあなたは、絶対そんなことはしないわよ。」

「……………いいや。俺は変わってねえよ。」

「なんですって…………。」

「変わったのは……………、アンタだ。」

「！なんですって！！私は、私の夢を叶えた！あなたは？あなたは叶えても自分で捨てたじゃない！！」

「……………お前、満足してるか。」

「は？」

「今の仕事に……………満足してるか、って聞いてんだよ。」

「ええ。大変満足よ！！」

「そうか…………。」

「ええ。」

「……………やっぱ、お前……………、変わったよ…………。」

「！！……………。」

カッカッカッ

帰るのか…………。

「お前は……………変わった……………リーナ!?」ズダッ！バシン！

ドガアン！！ カランカラン

む、酒樽が……………もつたいない。

「二度と……………その名前で呼ばないで…………。」

「……………ああ。」

今度こそ帰るか。

「じゃあな……………」虹彩のエリーナ」。

……………無視か。

(・・・それじゃ帰りましょ、ジエダ。)
.....)

(あ、あれ？どうしました?)

(少し、あの男と話がしたい。)

(ヴェー!?)

(少し待つか先に帰れ。)

(だから、・・・トホホ・・・なんで突然・・・。)

(興味、と不思議だからだな。)

(へ。)

(思い出せジエイド。私達がここに座ったとき、後ろに誰かいたか。)

(いや)よく見てなかったから。)

(見た、見てないはいい。問題は何かいる気配があったか、だ。)

(・・・!?!?)

(そうだ、何も感じなかった。少なくとも私は、な。)

(・・・僕もです。気を張ってなくても後ろに蚊が何匹いるか僕

は分かるんですよ。なのに・・・。)

(・・・次だ。先程奴は勇者に思い切り殴られた。)

(はい・・・。)

目が本気になってきたな・・・。いいぞ。

(あきらかにあのエリーナとやらは気が昂ぶっていた。おそろくさ
つきの一撃、加減していたとしても先程の傭兵達に対する何倍、何
十倍もの一撃を加えただろう。実際、「鉄」で溶接された上物の酒
樽を壊し、地面もめり込んでいる。なのに奴は「普通」に起き上が
り、「普通」に別れの言葉を放った。今も見たところ目だった

外傷はない。というより傷一つない。内側をやられていたとして
ももつと反応があるはずだ。だが、一切ない。あまりにも、・・・
「普通」だ。)

(・・・。。。。。。)

(分かっただろう。どうだお前も話しに行くか?)
(・・・そうさせてもらいます。)
そして私達は席を立った。

「初めまして、だな。」・・・。

「ん、おう?初めまして。なんか用かい?」

「いや、さっきの件でちょっと・・・。」

「ああ。あんま話したくはねえんだが・・・。」

「では、名前だけでも。」

「アイツのか?アイツは・・・。」

「いや、あなたのを。」

「俺の?んゝいいけど、まず人に自己紹介を求めるときは自分から
が礼儀じゃないかい?」

ほう、粹なことを言ってくれる。

「ああ、すまないな。私は、「いや、冗談。俺から言うわ。」

「俺の名前はランディ・ケルト、生まれはアムラ大陸のド田舎の港
でサメス村出身。農家の末子だ。仕事は・・・この店のピアニス
トをしている。」

・・・警戒心がないのか。まあいい、ますます都合だ。

「そうか、では私も詳しく紹介せねばなるまい。」

「んあ。別にいいぜ。」

「いや、礼儀なのでな。紹介が遅れた。私はゼフェス国第十三代目
国王、ダンテ・デイス・ベイザスだ。そうだな、仕事は・・・魔王、
ということになっている。」

ジエイドが横で目を見開いてる。まあ、そうだろうな。

だが、なんだ、これは。自然と笑みが止まらない。

そして奴はこう言った。

「へえ。そいつはすごい。」

私と同じく、おもしろい、といった目をしながら・・・。

二つの音が出会った。音は重なり、響き、波紋を残す。
彼らがどんな音を出してきたか、見てみることにしよう……。。

第3話 出会った音（後書き）

いきなりですが時間が飛びましたね。

この物語はいろいろ時間軸が変わっていくと思います。

できるだけ話が繋がるように、おもしろくなるように工夫しますので楽しんでください。

第4話 叶えた音 ランディ編（前書き）

今回は少し時間が戻ります。

なお、前の話を現在進行として考えていきますので、今回は過去と
いうことになります。

第4話 叶えた音 ランディ編

十二年前……「田舎」の国の田舎の村で、小さな子が夢を持っていた。

その海辺の岬でのこと。

「ぼくは、ユウシヤになる！！なりたい！！」

小さな男の子が叫んだ。

ボサボサの黒い髪に黒い目、肌は肌色に少々褐色がかつたような色着ている服はや靴はどちらかというと安物の部類に入るありふれたものである。

「バカね。あんたみたいな奴がなれるわけないわ。」
と、傍らの小さな女の子。

先がカールされている少し長めの金髪に、緑色の目。服や靴はいかにも高価に見えるもので、女の子の美貌とあいまってか輝いて見える。どこぞのお姫様のようだ。しかし、その態度から性格はキツそうに見える。

「ム、なんでだよリーナ。」

リーナ、と呼ばれた女の子は答える。

「だって、アンタって武術の才能もなければ、頭もそんなに良くない。もう五歳なのに片言言葉をまだ使っじゃない。それに、アンタの家って貧しいし、地位もないし。ないないづくし。家族だって多いんでしょ。なれるわけないわよ。……もしかして勇者なめてる？」

「な、なめてなんかいるものか！ただ……その……」

「……ま、その点私は品行よし性格よし、器量よし。武術も才能があるし、もう学校の5学年まで勉強したわ。血筋だって問題ないし。お金もある。ほんと、勇者ってのは私のような子がなれるのよ！」

「……そのじてんでだめだとおもう……せいかくもそんな

に……。」

「なんですって!！」

「だって、リーナは「キゾク」なんですよ。そりゃあぼくとはぜんぜんちがうけど……せいかくはね。」　バシツ「あいた!！」

「……なん・ん・で・す・つ・て?」

「……なんにもないです……グスツ……。」

「フン!！」

「う……こうなったらしょうぶだ!ぼくはゆうしゃになってみせる!!--そうならあやまれよ!!--」

「無理無理、できないできない。」

「あやまれよ!!--」

「はいはい、分かりました。」

「よし、いったな!!--やくそくだぞ!!--」

「はい。」

「エリーナー!!--」

丘の方から誰かを呼ぶ声がある。

「あ、お母さんだ。じゃあね。ダメダメ。」

「なにそれ!?!なにそのへんなまえ?!」

バイバイと手を振りながら少女は駆けていく。

「くそ、いまにみてるよ……。そうときまればあしたからとつくんだ。べんきょうもがんばるぞ!!--」

……音はより強く奏で始めた。

〈十一年後〉

「まさかこんな日が来るとはねえ。」

「ああ、まっただ。」

「世も末ってこつたな。」

「酷いな……兄貴……。」

ある農家の団欒風景。

「……じゃ、行って来るよ。」

「ああ、がんばって行って来い。ランディ。．．．いや、勇者様。」

「うん!」

「がんばりや。」「がんばってね。」「ファイト。」

口々に兄弟らしき人達が言う。

「うん!」

「ランディ。」

「．．．じいちゃん．．．。」

髭を蓄えた細身の老人が話す。

「．．．よー、やったの!。ホントに．．．よーやった。」

「．．．うん。」

「ランディ、．．．約束は、忘れるでないぞ。」

「ああ。必ず守るよ。．．．必ず、「みんな」を守る!」

「くさいねえ。」

「まったくだ。」

「親父、お袋．．．。」

いかにも農家らしき夫婦が言う。

「さ、早くいきなさい。船が出ちまうよ。」

「おら、とつといけ。この、金食い虫め。」

「．．．お父さん、お母さん、おじいちゃん、兄さん、姉さん．．．」

．．．今まで俺のわがままに付き合ってくれて．．．本当に、ッあ

りがとうございました!」

床にゴンと音がする程額をつけ、土下座する。

「．．．湿っぼいのは嫌いだ。だから、ランディ．．．。」

その場の家族が一齐に肺に息をためる。

「ククククククってらっしゃい!」

「クククッ、おう!」

そしてランディ、勇者は駆け出した。

ランディ視点

む、あのカール金髪は……。

「遅い！何してるのよ！」

ああ……雰囲気がぶち壊した……。

「まったく、初日から遅刻とかシャレになんないから。」

ほっとけよ……。

「なに、その目は？」

「別に……。」

「あのねえ、分かってる？私達は象徴なのよ。正義の象徴！まったく……何考えてんだか……。」

「うるせえなあ。それより、お前、約束忘れてないだろうな？」

「約束？」

「土・下・座。」

「別に、私はアンタのことまだ認めていないから。」

「はあ？んだよそれ！」

「さ、いくわよ。」

な……な……。

「おい！ちよつと待てよ！！！」

あんのヤローーーーー！！！！

ザザアア……ザザアアア……

この国から海で外に出るのは初めてだな……。いや、陸でもあったっけか？

ま、船には慣れてるからいいんだけど……。

……しっかし、暇だなあ。これで一週間もかかるのかよ。

めんどくせえなあ。　　ビシッ、バシッ　　ん？

船室から出てみる。……上……甲板か？

少々高価そうな木でできた階段を昇る。

ギイ……

……？リーナ？

「ハーツ！」

「オオオオオオオツ！！！」

ガガン！！

何やってんだ？手近の船員に聞いてみる。

「おい、あれ何やってんだ？」

「は？ああ、失礼しました勇者様。ええ・・・あれ、ですか？」

「ああ。」

「他の勇者様方が力比べをしたいと。」

「やれやれ。早速か・・・。」

「ズアツ！！！」

「ウツ！」

カランカラン

あゝあ。双刀で槍に挑むからだよ・・・。

エリーナは相手の懐に潜ろうとしたが槍のリーチでできず、その分相手はその隙をつけるって寸法だ。

「むっむっむっ。」

「いや、素晴らしかった。まさか双刀であそこまで持ちこたえろとは。」

「むっ。」

「俺の名はアシウトム・ヘブラス。ゼペス都市出身、あ、ダンザン国のな。王宮騎士団ヘブラス家の者だ。」

へえ。ダンザン国・・・。」

「ダンザンって、あの・・・。」

「ああ、魔族の国と戦っている。故に、俺は勇者になった。・・・闇を抹殺するためにな。」

・・・穏やかじゃないね・・・。

「そう。あたしはエリーナ・クオンティ。セルネ国の貴族の出よ。」
「貴族か・・・。意外だな。だが、いい心がけだ。」

「そう？ありがとう。．．あ。デイー。」

「む？デイー？」

スタスタ．．．

「よう、負けたな？」

「う、うるさいわね！そつちはなんなのよ！」

「いや、なんなのよって言われてもなんもしてないんだが．．．。」

「ムーーーーー！！！」

こええな、おい。

「エリーナの友達か？」

「ん？まあ腐れ縁だね。」

「ふむ．．．どうだ？やるか？」

俺に武器を付きつけてきやがった。

「いや、俺はあんま気が乗らないんでね。」

「ふむ。そうか。」

「ダメよ。こいつ弱いから。」

「やってみたことねえじゃねえか。」

「それより、こーんな根暗はほつといて、他の人の観ましょ。アシ

ユトム。」

無視かよ．．．。

「．．．いいの。」

「ええ。」

「ああ、お構いなく。」

「じゃ、いこいこ。」

タッタッタツツ．．．

やれやれ、うるさいのがいなくなったよ。

それはそうと．．．アシユトム．．．か。

あの、「わざと隙を与える」やりかた．．．。そしてそれを気取らせない動き．．．。

．．．．SSランクにまでは辿り着くだろうな．．．。

．．．．ツ、やべ、トイレ！くそ、牡蠣があたったか．．．ブツブ

ツ・・・ タッタッタ・・・。

・・・・・・。

この年は、腕の立つ勇者が歴代最大に多く出現した年と言われている。

そして、その勇者たちを全員乗せて一気に教会都市シャイアまで導く巨大な船、「ガレオム」。

その船にいる全ての勇者、船員が一回戦のエリーナ対アシウトムの試合を見ていたが、ランディの様に後に彼の二つ名の由来ともなる戦法を、それも「一目見ただけ」で見抜いた人間はいなかった。

また、ランディがそれを見抜いたことすらも、アシウトム本人はおるか誰も知らなかった・・・。

第4話 叶えた音 ランディ編（後書き）

先に言っておきますが、主人公格「人」？を最強にしようとは思っていません。

確かにランディは強いですが、中盤からはそれなりの奴等が出てきます。

まあ序盤では敵さんやらはやられ役ですが。

第5話 迷う音 ランディ編(前書き)

いろいろと書きましたが、単純に勇者が魔王を倒す話にするつもり
はありませんのでご期待ください(笑)

第5話 迷う音 ランディ編

教会都市シャイア

ランディ視点

ふう。あくだるい。すごい強行軍じゃん。

なんだよ。湖に着いたと思ったら馬ですぐにシャイアへって鬼か。一週間も船の上にいたんだぜ。つたく、息抜きぐらいさせろよ。

「ついに着いたのね。・・・教会都市、シャイア・・・」
隣は熱血野郎だし。

「すごいわね。本当に何もかも澄んだ感じがするわ。・・・さすが聖なる領域ね・・・」

「・・・ああ」

なんだ・・・ん・・・若干、いや・・・かなり「澄みすぎてる」気がする。

「ふわあ・・・」

「・・・おい、そろそろ行くこつぜ。確か集合場所は北のジエンナ教神殿だったな」

「ええ。現在最大の教会勢力ね」

あくまでも「光」の・・・だがな。

「わーってるよ」

そうして俺たちは歩みを進めていった。

「着いたわね」

「ああ」

しっかしホント教会が多いな。東のヤタ大陸の神社や寺もあったし。さすが・・・。

白いパプア石の石段を上る。

そして、広間・・・

ザワザワ……！ザワ……！

……多っ！！

「すごい数ね……。これみんな勇者なの？」

「……じゃねえの？」

何人だ……。百……。に届くかもな……。

「ん。奥から誰か出てきたぞ。」

「おお！！」

そいつが出てきたとき、場が変わった。

ザワザワ……。ピタッ

……。すげえ「気」だな……。

茶色の髪に、蓄えられた濃い茶色の髭。目つきは鋭く、その下をの肉体は鎧を着ているというのに頑強に見える。その鎧は魔法石を丁寧に「編み込んだ」一品。大抵の剣ではかすり傷を負わせることさえ不可能だな。

せめて、聖剣ランク……。か。特別な術式もかかっているように見えるが……。くそっ、分からん。

「諸君！！ようこそ、正義の階段へ。私の名はアグドル。僭越ながら全ての勇者の長ということになっている。る。」

！！あれが「座殺せつころのアグドル」！今現在世界最強の勇者か……。

ザワザワ……

「す……。すごい……。」

リーナ、気に当てられたな……。

「……。」

品定めをするように見てきたな……。

「……。フッフッフ。今年は素晴らしいな。数も数だが質も違う。私の気に当てられてもビクともせん輩がこんなにいるとはな。

いや、重畳重畳。」

こつちから見た限り・・・ざつと十三人ぐらいか。

「いや、諸君すまない。今のはそう、お試した。SSランクの勇者が出す気を出してみた。よく耐えられたな。もちろん今震えた者達はSSランクになれないことではない。だが、今ビクともせんかつた者達よ。誇つていいぞ。お前達はすでにSランクに匹敵する素質、もしくは実力を持っている。いや、素晴らしい。それと他の者達もいつもはこれで三分の一が気絶するのだ。だがお主らは程度の差こそあれ耐え切つた。見事だ!!」

・・・それをなんなくこなすあなたはなんなんだ・・・。

「さて、余興はここまで。これから諸君らに訓示を示す。まず、今の世界情勢については知っているな?十数年前に我々教会連合の一团が滅ぼしたゼフェス国が五年程前に復活した。ケルニス大陸は日々緊張の嵐が続いている。また、それに伴い、各地に魔物や賊が数多く出没するようになった。諸君らには是非とも奮闘してもらいたい!!・・・この地に正義を!愛を!平和を取り戻そうではないか!!」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

.....

「うう、やばい。気が昂ぶってきた!!」

はあ。

「今日は以上だ。明日からは個人で鍛錬をせよ!日々精進することを忘れるな!以上!!」

「ハッハッ!!」「ハッハッ!!」

颯爽と出て行きやがった。

「そうと決まればまずはパーティー探しね。やっぱり不安だし。あ!あれリーガル・マクシミリオンじゃない!!キヤアー!!!!か
つこいい!!」

と、リーナの視線の先には……

「リーガル様、私達とパーティーを組みませんか!？」

「いや、我々と……」

「いいや、こちらに!!!」

「すまない、少し考えさせてもらおうよ」

そこには、二枚目の好青年がいた。

薄茶色の髪に青の眼。服は騎士に相応しいようなかたびらと防具を合わせたもの。剣も相当の上物だ。

あれが、エグザンドル皇国「王子」、リーガル・マクシミリオン。噂ですでにSSランクの実力を持つと言われている。

「イヤ〜ン、あたしも行ってくる〜」

と、軽快にリーナは駆けていった。……シエルパおじさん（エリーナの父）、胃に穴が空くかも……。

……ん？

「よう」

大柄な体に褐色の肌。むき出しの腕は筋骨隆々。髪は黒で瞳も黒の見事な体格をした男が歩み寄ってきた。

「おう。アシユトム」

「久方ぶりだな」

ああ、そういやああん時以来あんま会ってなかったからな。

「ああ。だな」

「お前はパーティーは組まないのか？」

「ああ、ゆつくり考えるよ」

「そうか。もし良ければ俺と組まんか?どうも俺は口ベタでな……」

「うれしいねえ。ま、考えとくよ」

「うむ。ではな。……そういえば、お前はなんの加護を受けるつもりだ？」

加護……神々の加護の事か……。

勇者というものは別段義務付けられているわけじゃないが、大体が

神々の加護を受ける。

一人につき一神の加護。

例えば、炎の神アズーラの加護受ければ己の特性に合わせて火系の加護が得られる。

火の魔法、炎の剣、複雑な火の陣などだ。

もちろん神により同じ火でも特徴も能力も違う。

威力は本人しだいのようなが……。

「あゝ、それもぼちぼち考えるわ」

「そうか。まああせっても仕様がなからな。一度選択したら変えられんのだし」

そう。神の加護のチャンスは一回だけ。慎重じゃなきゃな。

「せいじゃな」

「うむ。ではな」

そうして、俺は神殿を後にした。

カツカツカツ……

ふむ今年の勇者達は悪くない。いや、良すぎるぐらいだ。将来が楽しみな者もたくさんいたしな。

「おはようございます！アグドル様！」

「ご苦労」

ふむ。……しかし、妙だな。なんだこの……違和感は……。

まるで、なにかが少しズレているような……。

むう。なにがひっかかる……。先ほどの光景を思い出してみる。

ズラリと並んだ勇者達を見渡す。……問題は、ない……。

いや……。

「金色の髪をして、緑色の目をした少女」の付近で違和感があったことに気付く。

なんだ。この何かを見ているはずなのに見ていない気分は……。

まで・・・見ているはずなのに見ていない・・・？

バカな！そんなことが・・・いや、その少女の横・・・そうだ！
そこだ！

だが・・・ここが・・・？

・・・ツ、人が・・・いた気はする・・・。だが、見えていな
いだと！？

この、私が！？どういう・・・まさか・・・。

気付かれないように極端に気配を消し、建物の影や空間に調和した
のでは・・・。バカな！！

そんなことはありえない。いや、不可能だ。

他の者ならともかくこの私を前にして。流して見たとはいえ、この
私の・・・。

それに、仮にそういうことができたとしてもそんなことをする必要
はない。

なぜだ。なぜあんなことをした。

まで！私に気付かれなかったということは、少なくとも気配を消す
能力では私に勝っている！！だと！？

いかん！もうそんなことがあったと確信してしまっているようでは
ないか！

落ち着け！落ち着け！

・・・仮に・・・仮にできたとして、いや、できるとして、なぜ
そんなことをした。

あんなものある意味力試しは力試しだが、人に気付かれなければ意
味がない。

私に気付かせるようにしたのか？だが、それはありえん！

気配は分かるか分からないか、今回の私のように違和感を覚えるの
は奇跡に近い！

そんな行き当たりばったりなこと・・・力試し・・・？

・・・そんな・・・そんな・・・まさか、「私を試した」？な
ぜ！？

若しくは自分の実力が知りたかった・・・今どれぐらいのことができるのか・・・。

この二つが考えられる。

だがどれも疑問ばかりだ。なぜ私を試す！？なぜあんなタイミングで自分の実力を確認する！？

いや、重要なのはそれではない。

私に気付かせなかったこと。もちろん普通に見れば分かるだろうが私の目から逃れられるとは・・・。

・・・ツクク、クククク。おもしろいではないか。

逆にそのような人材が来たことに感謝だ。これで魔物も減る。フハハハハハ。

だが、彼は気付かなかった。否、気付かない振りをしていた。己の背を伝う冷や汗を・・・。

一カ月後

「よし、皆集合したな。新米勇者達よ！」

・・・さすがに緊張するな。

「これより我等は南方に位置する。魔物の森を攻撃する。一匹たりとも逃がすな！！」

オオオオオオオオオオオ！！

「行くぞおおおおお！！」

そう、今日は実戦。南のありふれた森にいる魔物共を掃討していく。みんな気が昂ぶるのも仕方がないってこった。

あの顎のはさみで切るのか。

手前の甲殻動物系のモンスターが牙を突き出す。

シュツ！

よっと。

俺はそれを限界までしゃがんで避けつつ、その反動を利用して一気に前に出る。こいつ隙が結構あるな。

ザン！

硬い甲殻に覆われているのでその接合部分から自分の刀を挿入し、一気に胴を断つ。

ドザ・ズン

うし。やっぱり刀の方が俺にとっては使い易いな。軽いし。そうして俺はヤタ大陸が起源の刀を見る。

シャン！

昆虫系のモンスターが俺を挟もうとしてきた。

甘い！

ズバツ！

ドサ

俺が忘れてるとでも思ったのか？余裕だからちよつと息抜きしてただけだよ。

ま、普通のモンスターよりは数段上だったが……。
さて。進むか。

ザザザザザ……

しばらく森を走っていると……
ん？

ある一団が目についた。

……あれは……モンスター！！
無意識に手が刀の柄に伸びる。

……？

なんだ？比較的小さい気がするが……。

まさか・・・幼成体か・・・？

もっと近づいてみると辺りをうかがっているように見えた。

だが所詮は幼生体。訓練された動きに叶うわけがない。

一瞬で背後を捉えた。

そして・・・刀を・・・む・・・。

震えている？・・・。

一匹が俺に気付いた。それに反応して次々と俺に気付いていく。

?!、くるか！

・・・かかってこない？なんで・・・！

・・・よく見れば目の前にいる奴等は・・・震えていた・・・。

・・・つち、こんなのを殺したって何にもならねえ。

「・・・行けよ。」

当然向こうに言葉が通じるはずもなく、ただ皆ガタガタと震えているだけだ。

「・・・オラ！！行けつつつてんだよ！」

ダン！

足を踏み威嚇する。

キュイ！ ギユヌム！ チヤチャ〜！！

ガサガ

サガサ！

やっと逃げたか・・・。

・・・逃がして・・・良かったのか・・・な？

俺は・・・勇者だろ・・・ま、いつか。

自問自答する暇はないので直ぐに思考を切り替え進んでいく。

おお・・・これは・・・。

既にモンスターの本陣とも言うべき巣は制圧されていた。

あちらこちらで魔法によるらしい火の手が上がり、所々にモンスター

の死骸が視界に映る。

今は残党狩りか・・・。

巢穴にそのまま残っているモンスターもいるのでそれを駆逐してい

るのだ。

・・・そんなじゃ俺も一働きしますか。
そうして俺は手近な巣穴に潜り込んだ。

ピタ ピタ ピタ

巣穴は湿っていて歩く度に水音がする。

うん・・・くせえな・・・それ程じゃあねえが・・・気になる
な・・・。

モンスターの匂いがこもっている。ひどくはないがな。

と、そんな考えを巡らしているうちに・・・

シャワシャワ

！奥の方から異音がした。

直ぐに駆ける。ピチヨッ

そして目にしたものは・・・

ブウウウウウ！ ブウウウウウウウウ！

一匹のモンスターだった。

ブウウウウウウウ！！

特に親の方は警戒心を露にしている。というより、敵意に近い。

・・・当然か。

ブウウウウウウウ！！

・・・やるか・・・。

刀の柄に手を伸ばす。

そしていざ抜こう、とした時に・・・

なんだ・・・後ろに・・・何かいる？

見れば、モンスターの陰にもう一匹いた。

目の前のモンスターを一回り程小さくしたもので、大体大きさは人間の
子供ぐらいか。

ブウウウウウウ・・・

・・・子供か・・・？

ブウウウウウウ！！！！ ブウウウウウウウウ！！！！

見れば、俺が気付いたことに反応してか更に威嚇をしてくる。
プウウウウウウウ！ プウウウウウウウウウウウ！

……柄から手を離す。

……チクシヨ、……できねえ……こんなの……殺、いや斬れるか……！！

……何もなかった、と報告しておくか……。

「……安心しろ、何もしねえよ」

そう言っただけ俺は背を向ける。

チラ、と見るともう威嚇をしていない。呆けているようだな。

ま、当然か……うし、ととと報告をズビュン・バアアアアアアアアアン！！

なんだ！？なにかが飛んでった！？

いや、それより……この方角は……！

急いで後ろを振り向く。

そこには……

プウウウウウ！ プウウウウウウウウウウ！！

子供のモンスターが親を気遣ってなめていた。焼肉をを通り越して

『炭』のようになった親を……。

……これはズビュン……バアアアアアアアアン！！

今度は子供が炭になった。

……見えた……光系の魔法。それも高度だ。

「危なかったな。大丈夫か？」

普通の奴はこの声を聞くと舞い上がったりするんだろうが残念ながら俺はそういう性格でもないし今のこの状況ではむしろ悪感情の芽生えていた。

「……リーガルか」

「ああ。それにしても危ないじゃないかモンスターに背中を見せるなんて……」

「……ああ」

「……よし、もうここにはいないな戻ろう」

「・・・おい、なんで殺した・・・」

「え？」

「なんで殺したかって聞いてんだよ・・・」

「殺したって・・・今のモンスターの何かかい？」

「・・・」

「・・・君、大丈夫か？モンスターは僕達人間に、ひいては動植物や神々に害する悪しき存在だ。倒すのは当然だろう？」

「・・・」

「君は疲れているんだ。初めての戦闘で慣れないのは分かるよ。確かに何かの命を奪うのは辛い。でも・・・僕達は勇者なんだ。この世界をより良きものにするためにこの身を神に、世界に、人に捧げなきゃあ。そうだろう？」

「・・・ああ・・・そうだな・・・。悪い、俺がどうかしてたよ」

「いや、気にしなくていいよ。初陣はそうにもなるさ」

そうして俺達は巢穴から出て行った。

リーガルがしゃべっている間も出て行くときも、

・・・その間俺は何も考えられないでいた。

ようやく戦闘が終わったらしい。

今回の戦を指揮していた隊長が簡易式の壇に立つ。

「皆！今日はよくやってくれた！初戦にしては素晴らしいでござろ！！歴代最高かもしれん！！」

オオオオオオオ！

その言葉に俺以外の勇者達が歓声を上げる。

「さあ！今日はこのまま解散する！家族の下へ行くのもよし！宴をするのもよし！！だが！次があるということを忘れるな！！では、解散！！！！」

ガヤガヤとしゃべりながら散っていく。

そんな中からエリーナが近づいてきた。

「ヤッホー！調子はどう？」

「ああ」

「何よ〜ノリが悪いわね〜。ねえ、聞いて聞いて！私今日十五体も倒したのよ！すごいと思わない!？」

「・・・ああ」

「ム、何よ〜。あ、分かった！どうせあなたの事だから一体も倒せてなかったんでしょ！も〜、しょうがないな〜。」

「・・・」

「ザッザッザッザ・・・」

「おお。ここにいたか」

「あつ、アシユトム！」

「ああ。これから近くの村で宴があるらしい。行くか？」

「もちろん行く行く〜!!」

「そうか。お前はどうか？」

「・・・悪いが、もう少しここにいてから行く。」

「む、そうか。」

「ほらほら。こんな奴ほつといて行きましょ！」

「む？あ、ああ。」

そう言つて立ち去つていった。

「・・・ちくしょー、なんでだ・・・なんで、こんな・・・悲しいんだよ・・・」

あいつらはモンスターだろ！敵だ！敵なんだ！！

それなのに・・・ッ！なんで・・・！

なんでだ！さっきの奴は自分の子供をいや、自分のじゃなくてもいい！とにかく子供を守ろうとしていた！！その守られていた奴もだ！親のような奴にならあつたら氣遣つていた！なんでだよ！！なんでモンスターに！・・・感情があるのか！？いや！あるかもしれねえ！生き物だしな！でも・・・やめるよ・・・あんな・・・あんな人間らしい仕草を見ると・・・くそっ！！

最初に出会った奴等だつて……もしかして……その後ろの幼
成体を逃がそうと……!

どうして! さつきから! 何もかもが変に見える!!

なんでだ! あそこに丸まって死んでいる奴は、自分の子を庇う様に
しているように見えるのは!!

なんでだ! あそこに群れて死んでいる奴等は! まるでその奥の奴等
を守ってるようじゃねえか!!

……ちくしょう! ちくしょう!!

なんでだよ……。なんで……。こんなに……。哀しいんだ……。

そうやって俺はしばらく涙を流し続けていた。

……。馬鹿みたいに……。

??? 視点

ふむ。これであらかた片付けは終わったな。それにしても今年は大
良かった。まさかこんなに簡単にいくとは……。

どれ。もう勇者達は帰った……。む? 一人残っているな? 空を見上
げている……。感極まっているのだろう。さて、私もこれで「ダバ
ス隊長!!」

やれやれ……。なんだ……。

「どうした!」

「それが……。とにかくこちらへ……。」

「ふむ……。」

そうして私は部下についていった。

……。なんだ……。これは。

「最初見た時、自分も目を疑いましたが……。これは……。」
今私が目になっているもの、それは……。魔物の死骸だ。

我々が突入した森の入り口から西側に位置するところにあるものだ。

問題はその死骸にある。

これは・・・『甲殻動物系』と『昆虫系』の魔物。

「これは・・・やはりこいつらがいたか。」

本来極めて弱小な魔物の群れでない限り、必ず一匹程普通の魔物より強い奴がいる。

今私の目の前にはそういう奴が『二体』横たわっていた。

「今年はやり易いと思つたら・・・こんな状態だったからか・・・」

「

その強いという奴は大体が勇者のランクでBランク程の強さをもつ。決して弱い部類ではない。初戦でこいつ等を仕留めたのはかなりのポイントだ。

「二体ともBランクか・・・。」

そして、次の問題点は傷口。

どちらも胴を斬られているが・・・これがおかしい。

普通鋭利な武器に慣れたものでも自然と傷口に粗い面ができてしまうものだ。必要以上に若干力加減にブレが出るためだ。故に、切り口はその斬った相手の技量を想定できる。これは・・・綺麗過ぎる・・・。

ここまで綺麗に斬るには余程武器に慣れる、もしくは修練していないければ不可能だ。それ程鮮やか過ぎる切り口。熟練した者でもそんなことには気を使わない。気を使うのは超一流の者達だ。彼らはその力加減を鍛錬し、どんな角度、形からでも最小限の力で斬れることをよしとする。そうでなければ、最高位の魔物は倒せんからな。だが、この傷口はその『達人』の特技だ。誰だ・・・誰がこんな真似を・・・。それも甲殻の隙間から。

「・・・リーガルが仕留めたのか？」

彼なら多少幼い頃から実戦経験がある。・・・だがこんな傷口は・・・。

「いえ、リーガルはここを通っていません。ずっと真正面からの進

行でしたので。」

「ふむ。」

では一体誰だ……。

こんな芸当……さらけだせば一発でより上のランクに行けるはずだというのに。

「いかがいたしますか……。」

「……一応上には連絡をしておけ。」

「ハ。」

部下が走り去っていくのを見届ける。

……一体誰だ……何故隠れている……。

その答えに答える者は近くにいたが、彼がその答えを聞くことはなかった……。

第5話 迷う音 ランディ編（後書き）

次回は大きな転機の一つです。
楽しみにしていってください。

第6話 染まらぬ音 ランディ編(前書き)

今回は自分の日ごろの鬱憤?というものを込めて書いた気がします。
気って・・・(笑)

まあ、ほとんどガチガチのシリアスパートです。
お楽しみください。

第6話 染まらぬ音 ランディ編

初の大規模な戦闘があつてから早一ヶ月。他の勇者は直ぐにいつもの修行の日明け暮れ、浮かれた気持ちを直していた。

しかし、俺は未だに気持ちを直しきれていない。・・・それも浮かれた気持ちではなく、なんだかしらない憂鬱な気持ちでだ・・・。もう既に他の勇者達は神殿の加護を得たにも関わらず、俺はしていない。

要するに俺は特殊な技も力も身に付けず、「ただの人間」だ・・・。そのせいか、周りからは変な風に見られる。

いいさ。そう見たければ見ればいい。実際最近の俺は変だ。意味もなくボクッとしている時が多い。危険だ。

どうにかなつてくれるといいんだが・・・。そんな時に召集がかかった・・・。

ジェンナ教神殿

・・・ザワザワ・・・

ああ、だるい・・・。

周りの勇者達が任務の為に目を輝かせて話し合っているのに反して、俺は濁りきつた目で鈍く重くなった頭をしていた。

カツ、カツ、カツ。

前回と同様セバナ教第二兵团団長ダバスさんが指揮官に入ったらしい。

セバナ教とは、ジェンナ教と比べると格も大きさも小さいが、優秀な神に仕える兵を輩出してきた教団である。

セベナとは南の大陸、サボザ大陸を流れる比較的小さな川の神である。

光の神のジェンナと比べるべきでもないと思われるが、セベナ川は世界一水が澄んでいて、その分セベナ神の力はそれに比例し、現世ではほぼ完全に神の力を与えられることができる。

一般に、神は天界に住んでいて、そこから地上を見下ろし、人々に力を与えていると言われている。それぞれの守る持ち場は決まっているわけではないが、力の特性から水に関連したり、火に関連したりするということで分かれているらしい。神々にも一応位はあるようで、どうやら力の基準で決められているようだ。たとえば、セベス神は川の神だが、あくまでも「セベス川の神」である。「川の神」フレーネとはかなり差があるようだ。もちろんその「川の神」も「海の神」トルタンには頭が上がらず、水に関連する全ての象徴の水の神「アクエリアス」が頂点に君臨している。あくまでも水に関連する神においてなので、他の万物の基礎の神とはどうなっているかわからないが、基本的に、神々は仲良くしているらしいが、「闇」側の神々とは反目しあっている仲だ。だから俺達にも力を与えて闇を滅するのを助けてくれるんだが・・・。ちよつと不満な所は力を与えてくれること以外神々は人をあまり助けてくれない。例えば火事の事故なんて毎年たくさん出ている。そこんところどうなっているか物申したいが、俺では神の話を直接聞くことすらまだできないらしい。もちろん、力を与えてくれるとき以外は・・・。と、まあ、これが現在の神のことだ。ま、この方達がいなければ火も水もなんもないらしいから、いてくれるだけで感謝はするべきだな。だが、噂では強力な力を持っているという神々も、天界と現世で、しかも力を永久に与えるにはちよつと勝手が違うらしい。神々が直接力を使用するにおいてはなにも問題はないようだが、人に与えるときは人の組織が邪魔をしようまく力が浸透しない、と言われている。ま、当然つちやあ当然だな。じゃなきゃあ皆神だし。それで、力を完全に与えられるようにするにはその神に関係する全ての事象

を綺麗にし、聖なる状態に限りなく近い状態が好まれるようだ。だから、「水の神」に力を与えられても世界中の水が綺麗なわけじゃないので、それ程ずば抜けた強さを持つわけではなく、逆に「セベス川の神」はセベス川が綺麗なので、存分に力を与えられる。と、いうわけだ。ま、この神の力も自分がそれを与えられるくらいに成長していなければならないんだが・・・さすがに全員につてわけはいかない。それじゃあ皆が皆神の力を持っていることになっちまう。ま、要するに自分の潜在力、その時点での力が自分が与えられたい神の力に相応しいならばその力が与えられ、ダメならもつと位の低い神の力をもらうことになる。しかし、例え低位の神の力でも自分の力を高めることによって上位の神の力をもった勇者以上に強くなるので、低位の神が低いからと嘆く人はいない。むしろ、奮起する人が多い。

もちろん、勇者つてもものは試験を受け、受かったらOKなので、なにも神の力をもらおうとしなくてもいい。

ま、そんな奴は好奇の視線で見られるが。さらに言えば世の中でただ一人、歴史上に類を見ないという称号まで付いてくる。そう。今の俺のように・・・。

おっと、考えがそれちまった。つまり、セベナ教は信奉者も少なく、低位も低い神を崇める教団だがその力が存分に与えられた勇者がたくさんいるので「光」の教団連合では結構地位が高い。

「・・・それで、皆は前よりたくましくなつたと見える」

ん、もう前口上は終わったか。

「・・・これから、本題に入る。実はここから数キロ東の方にあるコボラ山でダダマ教の者共が集まっている。これは偉大なる神々の慈愛により長年放っておいたが、つい先日偵察部隊が見てきたところ、どうやらマーグ族と共にいるようだ。これは由々しき事態である！神の恩寵によりダダマ教であるうと見逃しておいたが、そこに魔族を連れ込むとは！！」

ザワザワ・・・！！

会場がざわめく。

ダダマ教とは「闇」側の教団で、「闇」側の土の神、ダダマを信奉している、俗に言う邪教だ。

マーグ族は胴体と顔は人間のようだが、頭に雄牛の角が生えており、下半身は蛇の尻尾になっている魔族だ。

「そして、早朝、神命が下された！コボラ山に住むダダマ教、及び魔族を掃討せよとのことだ！！」

オオオオオオオオ・・・！！

「さあ、皆の者出陣だ！恐れることはない！敵は邪教に堕ちた罪深き人と魔族、この前の戦闘よりは違ってかなり強いだろう。だが！我々には神々が付いている！すべての者に光あれ！！」

ワアアアアアアアアアアア！！！！

周りの空気がブレる。

士気は完全に高まった。

「さあ、行くぞ！各自出発し、コボル山より北に二キロ離れたところで集合だ！・・・散れ！」

ダダッダダッダダダダダダ！！

一斉に神殿から出て行く勇者達。

ポン

と、突然肩が叩かれる。

「よっ」

「・・・おう、エリーナ」

久々に見たな・・・。

「あんたどうするの？」

「なにが」

「今回の戦闘にでるのかって聞いているのよ」

「当たり前だろ。」

「は〜？！あんた神の加護もまだもらってないんでしょ？！！
それなのに出るの！！？」

「……ああ」

「はああ……何言ってるのよ……。大体、なんでもらわな
いわけ？」

「……気が乗らないからだ」

「なっ、あんた！死ぬわよ！」

「前もうまくいったんだ。大丈夫だろ」

「なぐにがうまくいった、よ！『二匹』しか倒せなかったっていつ
たじゃない。」

「……うまくいったんだよ」

「ダメよ！アンタは危ない！おとなしくここで待ってなさい！！」

「心配してくれてるのか？」

「な……違うわよ！！ただ……あんなに願ってた夢がここで終
わったらあんた……」

「やれやれ、このお嬢様は……」

「いいんだよ。もう叶ったんだし。それに死ぬ気なんてねえし」

「でも……！」

「ま、でもしなんかあったら助けしてくれよ。リーナ」

「……はああ。分かったわよ。後ろにいなさいよ」

「はいはい」

「あたしのこの剣と力で守ってやるわ。じゃなきゃ家門の恥だしね」

「あんがとさん。そういえば、お前はなんの加護にしたんだ？」

「あたしはこれ」

ポワ

光の玉が現れる。

「……光の神ジエンナか」

「あつたりいいいい！！何、どうして分かったの？」

「いや、お前なら高位の神でも受けられるかな、と思ってさ」

「ふふくん、そうでしょそうでしょ。やっぱあたしってさいついつ
！！」

性格はちよつと難があるな……。

「そういえば、アシウトムは土の神タモスの加護を受けたわよ。意外。槍だから風か水だと思ったのに」

「・・・土か・・・なかなかいい選択だ。」

「そっか。・・・ほんじゃ、行きますか」

「うん！」

そうして俺達も神殿を出た。

コボル山

「よし、皆集まったな」

準備は万端、と。

「それではこれから進行する。おそらく相手は我々の同行を見ている。どこからなにくるか、罠にも注意しながら進行せよ。基本的に自由に行動しろ。ここでは作戦ではなく、己のセンスが試されると心得よ」

さすが、いいこと言う。

「では、出発！！」

そうして俺達は山に入ってしまった。

・・・おかしい。周りの奴らもそろそろ気付き始めている。

もう大分奥に来たのに何も無い。

・・・この先にでかい罠でもあるのか？

そうして歩を進めると・・・

！

開けた所に出た。

家もあるし、井戸もある。つい先程まで生活していた痕跡も残っている。

・・・どこに隠れた。

さらに奥に進むと祭壇らしきものがあつた。

ガサガサ・・・

横の茂みが揺れた

ツ！ チヤキ！チキ！

周りの奴らが武器を構える。

そしてそこから出てきたのは……

「む、お前達か」

ダラス隊長達だった。

「ふむ。集まってきたな」

その言葉に後ろを振り向けばほとんどの勇者達がいた。

「むっ、ここから山頂までは近い。もう逃げ隠れする所はないんだが……」

俺達は万が一ことを考え、敵が逃げないように、また、背後をつかれられないように山を包囲しながら進んできた。

自由とはいえ戦闘、有利に進めたほうがいい。だから相談してこうやってきたんだが……。

これもテストのうちだったのかな？自由といっても、皆と協力しなければならぬって……。

「むっ」

ま、考え方のテストはあるかもしれんけど、今回の戦闘は本当らしいな。

と、誰かが走ってくる音が聞こえた。

タツタツタツタ……

「ダバス隊長！」

「なんだ！」

「向こうに洞窟が！」

「なんだと！」

そうして、ダバス隊長と共に他の奴らも走り出す。

そうか洞窟か。

最後の抵抗にはもってこいの場所だな。

近隣の住民は普段この山に登ってこないで地図がなく、必然的に俺達は地理が分からない。

つまり、洞窟内はもうどうなってるか分からない、という状況だ。その点相手は地理を知っているだろうし、今から入る俺達よりは目も慣れているだろう。

・・・ちと難しいかな。

そうしたことを考えていると真っ黒な闇を湛えた洞窟が見えてきた。

「・・・ここか」

「はい」

「・・・よし、まずは第一、第二班と分かれ進め。俺と補佐三人はここで待機しておく」

もしものときのためか。

「では、行け」

そんなこんなで俺は第二班になり、エリーナと一緒に洞窟に足を踏んだ。

「・・・暗いわね」

（静かにしろ。響くだろ）

（わわ、ごめん！）

小声で話しながら歩く。

ポタ・・・ポタ・・・

水滴の音しかしない。

そうして、十分ほど進んだところ・・・

ヒュッ！ トスッ！

「！！気を付ける！矢だ！」

俺は隠れる所を探しながら叫んだ。と、同時に・・・

ザッ ザッ ザッ ザザッ

敵か！多い！

「くっ、第一班はどうなったの!？」

「落ちてエリーナ！分断されただけだと思う。新米とはいえ勇者だ、群れた所は狙わない！」

「じゃあ、なんでこっちは！」

そつだ、問題はそこだ。おそらく第一班も急襲されているだろう。だが、少しずつ仕留めればいいものをなんでこんなタイミングで・

・まずい・。もしこれが狙いなら・。・。
「お前ら！できるだけ集まれ！分断されるぞ！」

ガコ・

やばい、やつぱりか！？

俺はエリーナの背中を押す。

ドン！！

「ちよつ！ディー！？」

この地形、おそらく上から壁上のものが落ちてきて道を分断するタイプと下に落として分断する、あるいは殺すタイプの罠二つが仕掛けられている可能性がある！そして、俺が立っているところは・

ガゴン！

落ちるタイプ・

「ディー！！！」

エリーナが上から落ちてくる壁に視界を奪われながらも俺を見ようとする。

馬鹿野郎、後ろに気を付けるよ。

ん、女だから野郎じゃないな・。・。馬鹿め？

そんなバカなことを考えながら俺はバカみたいに落ちていった。

「。・。・。どうすつかね？」

落ちたところは地底湖だった。すぐ横に大地もあつたし怪我もしなかった。

「ま、一応感謝だな」

どんな神が住んでいるか分からないがとりあえず、目の前の湖にお辞儀して感謝の意を表す。

水面がそれに呼応したかのように震えたが、たぶん水中の生き物だ

ろう。

そうして、俺はその場を後にした。

ザッザッザッザ・・・

長いな、上までの道のりは果てしなく感じる。

一応上には登っている気はするのだが・・・。

それにこの暗さ。湖に近い方では光る苔で辺りを見回せたが今はほとんど見えない。

こんな時に敵に遭遇したら・・・

スッ

・・・空気が・・・動いた・・・。

キン！

俺は前から切り裂いてきた剣を刀で受け止める。

「よっ」

そして相手の剣を弾いた。

「ッ！！」

相手はどうやら驚いたらしい。

シユルッ

この音は・・・なんかを出している、短剣か？

「悪いが、それがでちゃちょっと厄介だ」

俺は空気の流れから相手をとらえ、斬った。

ザシユン！！

どうやら正確に首をとらえたらしい。

よく見えないが、おそらく驚愕に目を開いたまま死んだだろう。

そうして俺は先に進むとするが・・・

ッ
ッ

「！！ちっ！！」

カン！ カン！

前から何かが飛んできた。

これは・・・どうやら触感から矢に布をかぶせているらしい。

そうか殺傷能力より、音を消す方を優先したか。相手の実力が上なら賢いやり方だ。

もし、勇者をそのまま殺そうと思うなら全員が兵ではない邪教の信徒や魔族は難しいだろう。

それくらい実力差はあいている。ま、あくまでも民間レベルの話で、兵クラスがきたらどうか分からんが。

ツ
ツ

考えている間にも敵は攻撃してくる。

!?

とつさに前に転んだ。

後ろを風を切る音が通過した。

バカな！後ろから!?!?.....そうか.....隠し通路か.....予想しておくべきだった。俺達を分断させたときに敵がどうやって現れたか考えておくべきだった。

くそつ、俺つてやつぱどっかぬけてるな！

キン！ ザシユ!!!

よく見えない視界で敵を斬る。

周りの敵が息を呑んだのが分かる。

.....周り？

いつの間にか俺は少し広い所に出ていたらしい。

あちこちに気配がする。

くそつ、最初の奴は俺に気を引かせるためか。

なんで一人だけだったか考えるべきだった。

キン！ キン！

カン！ ザン！ ブウン！

考えながらも敵を斬る。

「はあ、はあ。」

.....ここで、死ぬのか？

おかしい、いつもならこんなくらいで息は弾まない。自分の実力にも絶対とまではいれないが自信はある。

だが、……。これは……。

そう。問題は暗闇。光が荅からしかこない。

それも微弱なので逆にそこ以外は暗闇に見える。

キン！

「はあ、はあ。」

……そうか、緊張のせいか……。

ガアン！ ザシユザシユン！！

「はあ、はああ！！」

いや、これは……。

「はああ！はああ！！」

興奮……。

ガガン！ トン！ キン！

死への恐怖が興奮となつて湧き出てくる。

くそ、落ち着け落ち着け。

スン

ツ！

肌を何かが少し裂いた。血が流れる。

ぼら見る、興奮するからだ。だから落ち着いて……。

「アアアアアアアアアアアアああああアアアああああ
ああアアアアアアアアああああ！！」

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ああああああああああああああああああああ！！！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！

斬る 斬る！ 斬る！！ 斬る！！！！ 斬れええ

ええええええええええ！！！！

殺す！ コロス！！ ああああ！！ 殺せええええ！！！！ ああ

ああああああああああ！！！！

……ヒトリモニガスナ……

・

ニクヲタチ、ホネヲキレ…………

・

…………ケセ…………

・

ピチヨン ピチヨン

「はあ…………はあ…………」

なん…………なんだ…………。クソ。

これが、これが殺しの感情か…………。

これが…………これ…………が…………!!

気が付けば辺りの気配は消えていた。

代わりに…………血となんだか変な臭いがする…………。ああ、こ

れがもしかして臓腑の臭いか？

頭が、意識が朦朧とする。

ヒュッ!

風切り音がする。

カン!

無意識に刀を前に出し、飛来したものを弾いた。

そして、

ダダダッダダッダダダダダダ!!!

ザッシュン!!

一気に間合いを詰め、切り裂いた。

「はあ…………はあ…………」

辺りをまた気配が埋める。

「…………くっ、父上の敵、許さん!!」

「俺も…………こいつに…………親父を殺された…………!!」

周りから声が聞こえる。そしてそれに頷くかのように。

「おう!行くぞ!!」

「待て!貴様ら、勝手は許さん!第八中隊が全滅したのだ!!」

「うるせえ！おじきは黙ってる！」
「ならん！貴様ら！見ていただけと言ったろっ！」
「ウチの・・・ウチのお母さんを・・・」
「よくも兄さんをををををををををををを！！」
「お姉ちゃんが殺されたんだよ！」
「ええい！ならんならん！退け！」
ああ、うるさい。
「はあ・・・はあ・・・」
と、空気が動いた。
「う・・・うわあああああああ！！！！！！！！」
「っ！やめんか！ココおおおおお！！！！」
来る。
足が動く。手が動く。そして振りかぶって・・・
「ああああああん！」タッタッタッタ
渾身の一撃で・・・
「おとうさああああああん！！」タッタッタッタッタッ！
斬・・・
「あああ！！！！　　ザシユン！！」
「・・・・・・・・ココおおおおお！！」
「ココちゃん！」
「ココ！！！！」
ピチヨン　ピチヨン
「はあ、はあ」
ピチヨン　ピチヨン
「顔を・・・・・・・・」
「フヒッ！！」
「ココ！？行きとるのか！！！！？」
「顔を・・・・・・・・見せて・・・・・・・・くれ・・・」
「フ・・・・・・・・フ・・・・。」

俺は斬った。・・・地面を。相手の顔面をギリギリ横切るようにし

て。

「頼む……お前の……顔を……見せて……くれ……」

「ヒ……」

「ココ!? どうした!」

「ココちゃん!」

「……顔を……わたしの顔を見せて……」

「何!? 誰がだ!」

「目の前の……奴が……」

「な……!」

「頼みます……。俺に、こいつの顔を……!」

俺は力なく言う。

ああ、腕が震える。いや、体全体が震えてる。

「そんな!……バカなことを「お願いします!」!」

「見せて……ください……」

「……」

ゴソゴソと動く音がする。

「おじさん!」

「行っちゃだめだよ!」

「そうだよ! 殺される!」

「静かにしろ! どのみちこうしなければココは死ぬかもしれん!

運が良ければ助けられる!」

「でも!」

「それに、わしとココになにかあったらすぐに逃げる! 分かったな

!」

「そんな!」

「おじさん!」

「分かったな!」

「でも「わしに!」!」

「……わしに……もう誰かが死ぬのを見せないでくれ……」

「

「「「「「」」」」」」

「……ということだ。その勇者よ。これから私がそちらに行く。……ココになにかあったらすぐに切り刻んでくれる！」

「ああ」

「よし」

ヒュ ダン！！ ザッザッザッザッ……

近づいてくる音がする。

スッ

「ほれ、火種だ。付ける」

俺はそれを受け取り、目に慣れるように遠くでつけ、そして俺が斬るはずだった奴を見る……。

そこには……

「フエツ……」ビクッ

小さな、黒いマントを羽織った小さな女の子がいた……。

震えるその子を見続ける……。

見て 見て 見て……

「クッ！！」

「！！」

サツと右の初老の男性がココと呼ばれた女の子を抱き上げる。

「……子供か……」

俺は呟く。

「何？」

「その子は……子供か……」

「……そうだ。まだ幼い、子供だ！」

「……うっ……つく……」

「？」

なんだよ……なんだよちくしょう……。

なにやってんだよ、俺……なんで、ガキに剣向けてんだよ……！
そうして辺りを火で照らして見回す。

そこには人間とマーグ族らしきものだった姿があった。

なんで……本気で斬ってんだよ……!!
なんで……!俺は……勇者だろうがあああああああ
!!!!!!

なんで、なんで!!なんで斬ってんだよ!!!

なんで、こんなに殺してんだ!

なんで、こんなに……怯えさせてるんだ……!!

なんで……。

そこで少し高い所にいる一団が目止まる。

そこでは青年と小さな子供しかいない、人間とマーグ族の集団が怯えながら、憎しみの目を向けながら、……目から涙を流していた。

なんで、……ガキを……悲しませてんだ……!!!

俺は……こんなことの為に勇者になっただんじゃ……!!
だめだ、感情が抑えられない!

なんで俺が泣くんだ!おかしいだろ!ダメだろ!!お前は悲しませ
た方なんだぞ!!

なんで……。

「う……くううう……ああああ……ああああああ

あ!!」

「!?!」

「ああああああああああああ!!ああああああああ
あはああああ!!」

「お、おい、貴様、泣いているのか?」

ダメだ。抑えられない。

そうして俺はしばらくみつともなく涙を流し続けた。
しばらくして……

「お兄ちゃん、どうして泣いてるの?」

「ココ、という少女がしゃべった。

「……すまないからだ……」

「……なんじゃと!」

「どっして?」

「……俺の……甘さに……弱さに……そのせいで……お前らの……大切なものを奪ったからだ……」

「……お父さんのこと？」

「……ああ、……たぶん……」

「でも、……ツ、お兄ちゃんが……殺したんでしょ？」

「ああ、だからだ。俺は……この日まで、死ぬほど修行した。勉強もした。皆を幸せにするために……。でも、殺す事は嫌だった……。だから、鍛錬には一層力を入れたんだ……。誰かを……。殺さず……。当て身でも食らわして気絶させようと……。でも……。なんだよ……。これ……。意味……。ねえじゃん！！殺して、殺しまくって……。どうすんだよ！！」

「……おにい……。ちゃん……」

「力は……。力は抑えられたはずだ！それなのに！！なんなんだよ！なんのための修行だったんだ！！死を恐れたばかりに……。！鍛錬の時は死ぬ様なこともなんどもやった！それが……。なんだこのざまは！！戦場の気に……。殺すという狂気にも取り付かれて！俺の覚悟はそれだけだったか！！！！」

「……」

「……お主。」

目の前の男が言う。

「お主は……。魔物や……。魔族のことを……。どう思う……」

「

「……？」

「お主は、人間だけに自分の善たる行いをしようとしているのではないかね？」

「そうだよ！なんだよ、それは！」

「そうよ！不公平よ！」

「俺は魔族だ！そんな考えをする奴は皆殺してやる！！」

いつの間にかさつき涙を流していた子達がおれを取り囲んでいる。

「こ、こら、お前ら！！」

「どうなんだよ！言えよ！！」

「……ああ、『思っていたよ』」

「……へ……？」

「そうだ……なんで気付かなかった……」

この前魔物を倒しにいったとき、もう気付くべき要素は揃っていた！俺が倒したBランク級のモンスター、もとい魔物。

なんであいつらはあんな所にいた。背後から奇襲するためか？いや、違う、よく考える！

そいつらを倒した先……魔物の子供達がいた……そうだ！あいつらは子供達を逃がそうとしていた！！知能の足りない他の魔物に変わってだ。

そして、巣穴であった魔物。子供を必死に守ろうとしていた。

巣を守っていた魔物。愛するものを抱きかかえるように『見えた』

んじゃねえ！そうしていたんだ！！

なんで気付かなかった！なんで気付けなかった！！

……そして、人間の傲慢さになぜ……気付かなかった……

俺達が魔物退治に出かけたのは、その近隣の民から訴えがあったからだ。

山道を進んでいると、魔物が襲ってきた。

そうして俺達は魔物退治に行ったんだ。

このとき！なんで気付かなかった！！

獣が自分の領域を侵されると侵したものを倒そうとする。それと同じだ！ただそれが獣から魔物に格が変わっただけのこと。気を付ければ回避できる『災害』だ。

それを……俺は……いや……俺達は……

「……思っていたんだ……」

「……ふむ。お主はまともな勇者らしいな」

「おじさん?!」

「聞こう！勇者よ！お主は我が家族、友を殺した！弁解はあるか！

「！」

「……ない。」

「では、……私がここで貴様を殺しても問題はないな！」
シウル、と男が短剣を出す。

「……ああ。構わない……。」

「良いのか？貴様の夢ではなかったのか？」

「ああ。だが、俺はその夢を自分で汚した」

「……そうか」

「ああ、いつそのこと殺してくれ。あんなに……じいちゃんと約束したのに……果たせなかった……。だから……もう……」

「

「……ムン!!」

男が短剣を振りかぶる。

俺は目を閉じて、そして……。

チン！

？

「なら、その恥ずかしさを永遠の罪とする。」

男は短剣を納めてそう言った。

「……いい……のか？」

「ああ」

「だが……そこの子供達は……」

「うるせえ！子供じゃねえ！俺はもう成体だ！」

「嘘ばっかり。ゾラ兄まだ成体前じゃん」

「う、うるせえよラダム。お前なんてまだ幼生体卒業したばっかだ
る！」

「そうだけど何か？」

「……ツク！」

と、マীগ族の子供達。

「あはは、バツカね。あんたたち」

「タファ姉ちゃん、ダメだよ。そんなこと言っちゃ」

「そつだぞ。タファ」
「む、なによ。ムルクもブルスもそつ思ってるくせに」
「……」
「む……」
と、人間の子供達。
「……いいのか」
「……正直、俺は許せねえ」
ゾラと呼ばれた子が言った。
「俺だけならいいんだ。でも、弟がいるから……」
「兄ちゃん……」
ラダムと呼ばれた子は涙声になっている。
「……あたしも……無理かな……」
と、タファ。
「ボクも……」
ムルクが言った。
「俺も……」
と、ブルス。
「……だよな」
「……ワタシも、許せないけど、……許す！」
「な」
「ココ!？」
「だって!……お父さんなら……そついったから……」
「ココ……」
「……すまない……。ホントに……すまない。誤って
済む問題じゃないけど……」
「……つたく。なんだよ……。戦う気も起きねえよ」
「……うん」
「……すまない……」
「ホント、おもしろい勇者だね」
「うん」

「ああ」

「……ふっ」

男が安堵のような息を吐く。

「で、どうするの？タンゴおじさん？」

タンゴというのか。

「うむ。とりあえず、地上に繋がる隠し通路に戻って逃げよう。他の

人、者はどうなったかしらんがうまく逃げおおせてるだろう」

「うん。分かった」

「よし、なら タツタツタ・・・」

「タツタツタツタツ！！！！！！」

「な、なに、この音？」

「誰かが、来てる……」

「むっ」

この足音は……。

「味方かな!？」

「いや、違う」

俺が言う。

「どうして？」

「この音、かすかに鈍いような音がする。革の靴に金属を入れている可能性がある。お前等はそんなことしないだろ？」

「え、何で分かるの？」

「分かるからだ。言っただろう。俺は『死ぬほど』修行したって」

「ほへへ」

「じゃ。じゃあどうしよう！もう少し上に隠し通路はあるんだよ！」

「むっ」

「……よし、ここは俺に任せろ」

と、俺は前に出た。

「な、どうするんだ!？」

「相手が俺達の顔を『認識する前』に気絶させる」

「ウエ!??」

「そんなことできんのか!？」

「ああ。そんじゃ、ついてこい」

そうして、俺は改めて皆を見渡す。

マーグ族のゾラは体格が大きく角に大人になりつつある証拠の輪の印がでている。そして、全体が赤みがかったている。

その弟ラムダも同じく赤みがかっていて、こちらは印がなく、マーグ族にしては小柄だ。それでも人間で言う中等生の大きさ程ある。人間族のタファは赤い髪に耳に小さい金色のピアスえおしている。顔形はなかなか綺麗だ。

同じく、ムルクは年齢さながらに小さく、小柄だ。髪は水色で少し目が垂れ下がっていて気弱そうな雰囲気が見える。

ブルスが一番の年長者のようでもう青年の域に達している。こちらも髪は水色だ。キリリとした目から気丈さが伺える。

そして横のタンゴを見る。自分の父より若干若いだろうか。しかし意外と壮観な体つきをしている。髪は黒に近い青だ。

そして、……ココを見る。金髪に金色の目。幼いながらもかなりかわいい。きつといづれはタファのように綺麗になることだろう。その目は先ほど泣いたせいか、少し赤い。

「……ココ。」

ビクッ「……なん……ですか……?」

「俺がこんなことをいってもあれだが、今度は……お前を守る」

「……あり……がとう」
スッ

相手の足音が近づいてきた。

「よし、いないな次 ドスッ

「ん? トン

「パン

ドサッ ドサッ ドサッ

「……す……すげえ……」

俺は一瞬にして勇者三人をのした。

「よし、行くぞ」

タタタタタタタタ……

しばらく走ると……

「よし、ここだ」

突然タンゴが立ち止まる。

「ふうっ、ついた」

「ああ」

そうか。ここが……。

「……とりあえず、礼を言う。ありがとう」

「いや。こちらこそ。そんなこと言わないでくれ。……俺は……

軽蔑されるべきだ」

「……いゝや。お主は間違いを正した。その時点でダダマの舌

はお主を食うのではなく、守るのになっておるよ」

「そうだよ。ありがとう」

「とりあえず……ありがとう……」

「ありがとう……ございました……」

「……こっこそ……ありが……とう……」

「……よし、行くぞ。縁があればダダマの目がまた我々を会わせ

てくれるだろう」

「ああ……じゃあ」

そうして、隠し通路の中に消えていった。

……うし、俺もさっきの奴らを介抱して上に行くか。

そうして、俺も背を向けた。

「あ、ディー！」

「よう、リーナ」

リーナがうれしそうに近づいてきた。

だが、俺は他の事に気をとられていた。それは、洞窟内に横たわる

死体。死体。死体。

「良かった！落ちちゃうんだもん！心配したよ！」

「……ああ」

と、そこにダバス隊長が目に入った。

「……ちよつと行つてくる」

「え？ちよ、ちよつとどこに?!」

ザッザッザ……

俺はダバス隊長に近づく。

「ダバス隊長」

「ん？ああ、君は……」

「少し、お聞きしたいことがあります」

「む？ああ」

「……今回の戦闘。ここまでやる必要はあつたのですか？」

「何？」

「今回の戦闘。あまりにも実力が拮抗していました。もちろんこちらに死者はいませんが、相手の作戦状況から考えると厳しかったですね」

「ああ……そうだが……」

「まるで……そう……これぐらいのレベルと分かっていたみたい」

「……何が言いたい」

「……テストの為に、肥やしていましたか？」

「……!!何が言いたい!!」

「このダダマ教を見逃していたのは神のご慈悲だといいましたよね。……これが慈悲ですか？」

「……彼らは魂が堕ちたのだ、それを救うことが慈悲ではないかね？」

「へえ。まるで殺すことを前提にしていますね」

「ツ！私は！「いえ、いいです」

「もう一つ聞きたいです。……あなたは、勇者とはなんだと思つていますか？」

「……ふん！当たり前前のことを聞くな！！魔を殲滅し、闇を打

ち消し、世界に光を、平和を取り戻すためだ!!」

「……その世界に、人以外の生き物はいますか？」

「いるに決まってるだろう」

「例えば、「魔族」とか。」

「……!! 貴様!!」 チャキ

ダバスが剣を抜く。

周りの奴らが視線を向ける。

「取り消せ! でなければ墮落者として斬る!!」

ザワザワ……

「墮落者」……神に背き悪魔に身を売ったといわれる者。邪教

の信徒がこれに当たる。

普通ならば侮蔑と軽蔑を口にする言葉だ。だが、今の俺にとっては

何の意味もなさない。

「……これがあなた方のやり方……ですか……」

「何を!? さあ、取り消せ! 名も無き勇者よ!!」

「名も無き、か。嬉しいですね」

俺は笑う。

ホントに久しぶりの心の底からの笑みだった。

「なに!!??」

「だって、名があるってことはそれくらい命を消してるってわけじ

やないですか」

「なんだと!!?? 貴様、勇者の称号を剥奪されたいのか!??」

「ええ」

「な」

場の皆が啞然とする。

「やめてやるよ。こんなもの。犬にでも、いや、ゴミ箱にすててや

らあ!!」

そうして、俺は背を向けて歩き出した。

リーゼルが俺に不可解な視線を送ってくる。

アシウトムが驚きの目をしている。

一部侮蔑の目をしているが、大体が驚いてる。
そして、

「リーナ」

「どうして、デイー」

声がかすれている。

「これが・・・俺の決めた道だ」

「でも、ご家族は・・・」

「・・・親父達ならともかく、じいちゃんは・・・分かってくれる」

「・・・デイー・・・」

「じゃ」

そうして歩き始めた。

「待って。・・・待ってよデイー!!」

歩く。

「私、まだあなたに土下座してない!!」

歩く。

「一生軽蔑するわよ!!」

歩く。

「デイー!お願い戻って!!」

止まる。

そのまま俺は言う。

「リーナ!お前は今の仕事に誇りを持てるか!!」

「仕事って・・・誇れるわよ!!」

「・・・そうか・・・」

そうして俺は振り向く。

「俺は・・・持てない・・・」

そうしてまた歩く。

「デイー-----!!」

山を降りる。

ありがとう。コボラ山の神様。俺はここで、やっと自分を見つけられた。

俺は勇者。勇者になる。

だから『みんな』を守る。『みんな』に平和の世界を見せる。『みんな』を幸せにする。

これでやつとだな・・・じいちゃん。

じいちゃんがどういう意味で約束をしたか分からないけど、俺は『みんな』が本当に世界中の全てを指すと信じている。だから、じいちゃん待っていてくれ。俺について何か言われても、信じてくれ。

俺は

『勇者』

になる!!

よし、そうと決まったらさっそく明日から修行の再開だ！勉強も始めなきゃな。

ダダマの目が俺を優しく見ている気がした。

真の勇者の音は一時ブレた。
だが、・・・

音は・・・染まらぬ。

・・・決して・・・。

第6話 染まらぬ音 ランディ編（後書き）

いがあったでしょうか。

なんだかひどいことを書いたような気がするようないような。

とりあえずお楽しみ？ いただけたら幸いです。

第7話 始まる音 ダンテ編（前書き）

今回からはダンテ主軸の過去編となります。

第7話 始まる音 ダンテ編

そして現在……

ダンテ視点

「……とまあ、こんな感じだ」

そこでランディとやらが話を終えた。

「ふむ……それは……」

なんとというか……。

「なんか……初めて俺達にとってまともな人間を見た気がするッス」

横でジエイドが言う。

確かに、我々にとっては本当にまともに見える。

「そして今、か」

「ああ。ちょうど半年前だ」

「……その半年間……今も含めて、後悔は本当にないのか？」

「……正直、ある」

「……聞いてもいいか？」

「かまわねえよ。一つは、俺の家族の事だ」

「故郷のか」

「ああ。変になってなけりゃいいんだが」

「変？」

「……ああ。俺は途中で勇者を辞めた。これ、歴史上俺が初めてなんだよ。だから、事情を知ってる……つつつても俺が勇者を自分で辞めたことなんだが、それを知ってる奴は俺を軽蔑したり、ヤバイ奴は憎んだりしている。だから、家族になんかあったらなあ、と思つて」

……それはありえるな。

人間というのはつくづく狂気にも似る感情をぶつけやすい種族だからな。

「して、もう一つは？」

「……エリーナ、のことだな……」

「あいつとは、ほんとに、長い付き合いだったからなあ……」
「……知己との別れ、か。」

「でもさっきでその付き合いも終わったようツスね」

「……こいつは、後で説教が必要だな。」

「ジェイド……お前は空気を読め」

「へ？」

「あははは……そうなんだよな」

「すまん。うちのバカが」

「いやいや、そいつの言うとおりだよ。その付き合いも……さ
つきで完全に終わった……」

「……」

「……だが、これが俺の決めた道だ。……俺の意思は曲げね
え」

「……まぶしいな、……ほんとに。」

なぜかそいつの後ろに光が見えた気がした。

「……気のせいだろう。」

「ほへへ」

「ふむ」

「ま、十七の俺が生意気言っつな、って感じだがな」

「十七？同じだな」

「お？まじで？」

「ああ。奇遇だ」

「へえ」

「ふむ。……それでは私の話もするか」

「ん、いいのか？嫌な事思ひ出すんじゃないかねえ？」

「お前が言えたことではないだろう。ま、要するに貸しを作りたくはない、ということ聞いてくれ」

「そっか。ま、魔王の身の上話なんて一生のうちに聞けるかどうか分からんねえし。ありがたく聞かせてもらうことにするぜ」

「ああ、そうしてくれ」

「あの、私は？」

「帰るか適当にそこら辺にいる」

「……………」

「さて、まずは……………」

二年前

……………いよいよか。

ギイ

後ろで扉の開かれる音がする。

「陛下、準備が整いました。」

肩から少し出る長さの茶色の髪に、水色の眼。きらびやかではないが実用的な鎧の節目から見える筋肉は一端の武人ではないことが伺える。そしてなにより、胸に縫いとめられている紋様から分かるその身分は……………」

「ご苦労、先に行っているバラモン」

「ハッ」

「私」を守る近衛兵団を束ねる將軍、バラモン・カン・レベス。私を幼少の頃から鍛えてくれた師であり、右腕でもある。

「ふう……………行くか」

そうして私は今しがた閉まったドアを開けた。

カツカツ……………」

石畳からの靴音を聞きながら私は柄にもなく回想に耽った。

・・・長かった・・・。

父を失い、その日からゼフェス国の魔王の座を継ぎ、今日まで必死になって何事にも取り組んできた。過信しているわけではないが上位クラスの勇者や傭兵達にも引けを取らないと思っている。

政治やその他の勉強についてももうこの国で吸収できる知識は全て吸収した。

これだけは日々を安穩と生きる愚王達と絶対の差を付けた。

そして、方々に散った仲間も新たな仲間も加え、遂に今日、・・・この時が来た！！

ゼフェス国復活の時だ！！！！

「お待ちしておりました陛下」

「ああ」

主だった将と参謀、政治家がいる。

バラモン、カザン、ブブラ・・・。

新たに加わったジエイド、ザザ、ホビア・・・。

「では、行くぞ」

「ハッ！！」「ハッ」

そうして私は城壁の上に立つ。

下を見る。

オオオオオオオオオオオ・・・

魔物と魔族の軍勢が一糸乱れぬ態勢でいた。

総勢五万。

後に元のゼフェス国領で囚われの身となっている者、ダンザン国が作った魔物・魔族用の監獄島ラウカイナに収監されている者達を合わせる軽く六十万は超えるだろう。

それ程かつてはゼフェス国は栄えていた。同時にダンザン国も栄えていたのだが・・・。

軽く見回して言う。

「聞け！ゼフェス国の勇士達よ！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・
大気が震える。

「今宵、我等は我等の国を取り戻す！皆、よくぞ今まで耐えた！その苦しみを！悲しみを！人間共にぶつけてやれ！！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！

「そして！祝おう！！ゼフェス国を！！！」

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！

この歓声を、また聞ける時が来るとは。

父上・・・あなたに・・・見せたかった。

そうして、感に堪えていると、

「ん？」

南の方から砂煙が上がっているのが見える。

「敵か！？」

カザンが叫んだ。

ふむ、これは・・・

「いや、違うな。敵が来れるはずがない」

なぜならここは「地下」に造られている迷宮、俗に「ダンジョン」と呼ばれている所だからだ。ここの名はマガダンジョン。ゼフェス国領土の南側に位置し、簡易な城が造られていて広大な砂漠と見間違うほど広い場所がいくつもある。よって、大部隊を生活させることもできるのだ。また、他のダンジョンと繋がっていないので、それ故に今日まで発見されなかった。それに、仮に発見されたとしても見張りや守備部隊によって耐え切れるはずだ。伝令が来る前に敵が来れるはずがない。・・・だとしたら何だというのだ？

「む。陛下、戦法にラウジの旗が見えます」

隣でバラモンが言う。

ラウジだと、守備部隊を束ねる将軍に就いているはずだが・・・
そうして考えている間に謎の部隊は城門まで近づいてきた。
どうやらラウジの旗により道を空けたらしい。

「陛下！ご無礼とは思いますがどうか話をする余地を下され！」
今年齡460（魔族は長生きをする）になる老体のラウジが叫んだ。
ラウジは先王からの将で年をとってからは守りに堅い戦法で味方を
守護する名将である。

ガタル族という種の魔族で、人型に近い体をしているが全長二mを
優に超え、腕は硬い鱗に覆われている。体毛はなく、背中から棘状
の突起物が五本突き出ている。

私が小さい頃はよくおやつをくれたものだ。

「なんだ！ラウジ！」

「ハ、実は私の横におります者は先代王の時の將軍で前線基地を担
当していた者です！」

そして私はラウジの横にいる黒い布を顔に巻きつけた者を見る。

「そうか！それはご苦労！だが一つ聞きたいのだが「陛下！」

「……なんだ！」

「実は……その……この者は人間なのでございます！」

「ッ！……なんだと」

「陛下！話を聞いてくだされさすれば「去れ！」」

「陛下！」

「ラウジ！なぜ人間などを連れてきた！そやつらは敵！何を考えて
いる！」

「陛下！ですから私の話を「黙れ！」」

「聞く耳など持たぬ！ラウジ！人間を連れて来たからには貴様敵に
まわったのか！」

「陛下！」

「去れ！「陛下」

「……なんだバラモン」

「とりあえずラウジの話をお聞きなさってください」

「！何！？貴様まで」「正直、このようなことになるとは思いも寄り
ませんでした。」

「……何を言っている……」

「とりあえず、話を」

「・・・分かった・・・。良からう！ラウジ！話せ！」

「陛下・・・では、話します！この横におる者は人間です！また、後ろにいる三万の兵も！」

ザワワ・・・ザワザワザワ・・・！！

三万も・・・何を考えているラウジ！

「それで！」

「ハ！この者の名はゼラトゥール！カルラ神を崇めるカルラ教の信者でございます！」

「それがなんだというのだ！」

「陛下！陛下の父君・・・先代は数いる魔王の中でただ一人人間を認め、我が領土で暮らせるようにした方でございます！！」

「・・・なん・・・だと！！」

ザワザワザワ・・・！！

辺りの喧騒が酷くなった気がするがまともに考えていられない。

「バラモン！これはどうということだ！！」

「ハ。事実でございます」

「何！？」

「先代は人を認めました。また、先代の臣下である我々も」

「バカな！王宮内ではそんな者みたことないぞ！」

「はい。実は、我々が認めた人間達は俗に言う「闇夜の眷属」の内に入るものであったり、邪教信徒と言われるものであったりします。要するに、「光」の人々から迫害を受けたり、やむを得ず人の世では生きられない者達のことなのです。もちろん、泥棒や人殺しなどは軽蔑しますが、彼等は違いました。心からの忠誠心はないとはよーうに見えましたが、ある者は恩を必死で返そうと、ある者は誰にでもいいから認められようと、ある者はただ役に立ちたいからと進んで難しい職務に励んだり、戦に出ていたりしたのです。故に、必然的に首都や王宮には稀に伝令として来るだけ、後は辺境に住む者がほとんどでした。ですので、陛下が御知りでないのも当然かと」

「・・・それをなぜ黙っていた」

「確かに、黙ってはいましたが隠していたわけではございません。十年前、我が国が「衰退」してからの仲間は散り散りになり、酷い有様でした。ご存知の通り、今の軍隊も決して悪いわけではございませんが、やはり前の軍隊にはどうやっても勝てませぬ。それ程我等は弱くなってしまった。当然、我が国にいた人間達も逃げると思いましたが、いくらなんでも命を懸けてまでこの・・・廃れゆく国を守りはすまい、と。ですからもうおそらく我々の前には当分現れないだろうと思つたのです。少なくとも、国が再興するまでは。なので私もブラも、その他の側近には陛下にこのようなことを言い、混乱させまいと思つていたのです。まだ、その・・・幼い陛下はその人間達に希望を、若しくは憎悪すらをも抱くと思つて皆で黙つておることにしました。・・・ですが・・・」

「・・・はっ、申し訳ございません。我等の手落ちでございます！」

「・・・かまわん。良い判断だと思つている」

「・・・は」

「・・・では、ラウジ！」

「ハ！」

「長く待たせたな！話は分かつた！」

「・・・ハ・・・ハハッ！！」

「よし！ならばその軍も我等の軍入れる！歓迎する！！その・・・代表者と共にお前は上に上がつて来い！」

「ハッ！」

そうして新たな黒づくめの軍が隊列の一角に加わる。

「さて・・・」

私はその場で「大地」を見上げながら二人を待つ。

カツカツカツ・・・

来たか。

「陛下！此度の失礼、申し訳ございませんでした！！」

「よい。お前は適切な判断をした。逆に私が恥ずかしい」

「そんな・・・」

「それより、だ」

「・・・八」

そうして、ラウジは後ろに控えていた「人物」に場所を空けた。

「・・・」スツ

ゼラトウール、と言うものは黙って頭を下げた。

「・・・さて、ゼラトウール、とやらよ。いくつか質問があるが良
いか？」

「・・・なんなりと」

「うむ、では聞こう。お前が何故私に来たかは大まかには分かった
が詳しくは分からん。・・・何故に援軍に来た？」

「・・・グラネル様は、行き場のなかった我々を受け入れてくれ、
あまつさえ仕事さえをも与えてくれました。これが理由です」

ほう。目元以外顔を布で巻いているので良く分らんが、なかなか
太く、透き通る声だった。

「？そんなことですか？」

「・・・そんなこと・・・ですか」

む、少し声に力が入ったな。

「なにか、不愉快な事を言っただろうか？」

「ああ・・・いえ、申し訳ございません。不愉快なのは不愉快で
したが、陛下が言った事ではなく少し昔に苛立っていたもので・・・

」

「ふむ。詳しく聞かせてもらえるか？」

「御意。我々、いや、おそらく全ての邪教に関連した話ですが、我
々は幼い頃から迫害を受けてきました。安息の地ではなく、ただ
流浪という旅とは似ても似つかない生活を送っていました。昼は人
から隠れるように影を伝って移動し、夜には魔物の領域が分からな

いにも関わらず、闇の中でもさらに闇に踏み入り、寝食をしました。泥を食べ、草をおかずにし、虫があればご馳走、そのような生活だったのです。・・・ですから、グラネル様が我々を受け入れてくれたとき、それだけでツ！我々は・・・涙を流しました。当時はまだ青二才でしたが、ようやくと安息の地が、帰る場所ができたのかと、嬉しかったのです。そしてその何日か後に、職を与えてくれるという話が出ました。我々は、・・・私は、呆然としました。・・・気が付けば、また涙が出ておりました。仕事とは、我々の存在を、生きた証を、示せる道だと考えていたからです。ゼフェス国に着くまでは、仕事いうものが何かは知っていても、実行したことはありませんでした。日々の虚無感とあまりの薄さに何度くじけそうになったことか・・・！一心不乱に、・・・カルラ神に祈りを捧げていました。そんな日々から・・・ダンザン様は解放してくれたのです！己の弱さを埋めるための祈りから、真に祈りを捧げることもできるようになりました。これを・・・感謝せずしてツ、何に感謝すれば良いのでしょうか！」

「・・・そうか。辛かったのは我々魔族だけではない、ということか。」

「故に！・・・我々は援軍に参りました！！」

「ああ。すまない。余計に詮索してしまったな」

「いえ」

「では次だ。・・・なぜ今更になって我が元へ来た？」

だが、こいつが間諜だという可能性も捨てきれん。

「それは・・・」

目が悲しみを帯びたようになった。

「言い訳のようになりませんが、十年前、ダンザン国に攻め入られたとき私や他のカルラ教信者は前線に近い場所にいました。それ故敵前線からの攻撃に耐えながら王宮に向かうこと五日、・・・その時は既にグラネル様は・・・」

バラモンに目で聞く。

今のは本当か？

コクリ。

本当のようだ。

「そして、すぐさまダンテ様に合流しようと思いましたがダンテ様もまた雲隠れになっていたので。もちろん、つてをたどって居場所は分かりました。ですが我々は追われている状態。いつどこで見られているのかも分からないので機が来るまで待つていたのです」「ふむ。それが何故今なのだ？」

「知つての通り、ダンザン国はこの大陸を制覇してからより強固になつています。そのことにより、魔王討伐十周年記念の大祭が数日のうちに開かれます。こうなれば、大祭の警護と準備にあらかた目が集中するので我々も動き易くなったのです。それに、ダンテ様もまたその日を狙っているでしょう。それも準備が終わる直前に」
ほう。良く考えている。

「そうだ。その通りだ。俺はその大祭の日の前日を狙う。大祭当日では各国から勇者や兵がほとんど総出動するようだな、逆に準備と疲労により一番気が大祭に向く時を狙おうとしている」

「ああ。やはり」

「しかしすごいな。俺はこのことを何度も積み重ねて考え、いろんな將軍達と相談したというのに。・・・お前は一人で考えたのか。」

「・・・おそれながら・・・。」

「・・・っはっは。すごいな。いや。最初は怒鳴つてすまなかつた。なかなか、いや、それ以上の奴だな」

「いえ」

「だが・・・」

そう、だが。

「私はお前を完璧に信用したわけではない」
声を落とす。

「・・・」

「私は人間というものが信じられぬ。まったくというわけではない

がな。だからといって魔物や魔族なら信用するというわけでもないが。ただ、心の奥にそうはまっているのだ。すまないな」

「いえ。もし我々が敵ならば、陛下はとんでもない痛手を被りますので、その判断は妥当かと」

「そうか」

「ですので……これから、陛下に信用されていきたいと思っております」

「……ほう」

「気に入らなければどうぞお捨てください。怪しければお斬りください。ですが、私は何をされようとも、私があなたを認めている時は永遠にあなたに着いて行きます！腕がなくなるのが、感覚が消えようが永遠に……!!」

「……」

「……よろしく、お願いします」

そうして、深々と頭を下げた。

「……ああ」

……とりあえずは、様子を見るか。

それに、まったく信用していない、というわけではないしな。そういうことは愚か者のする事だ。

……そうでしょう、あなたがそうしたように。

……父上……。

第7話 始まる音 ダンテ編（後書き）

次の話にも続きます。

第8話 動く音 ダンテ編(前書き)

今回で過去のダンテ編も終わりです。

第8話 動く音 ダンテ編

「では、出発!!」

オオオオオオオオオオオオ!!!

カルナ教軍団が入って二日、ついにこの時がやってきた。

新しく兵も入ってきたおかげで博打だが、当たれば我々は羽が生えたほど有利に事を進められる。

周りの兵もそれに呼応してか、目が爛々と輝いている。

次々と数万の魔族。魔物がダンジョンから地上へ出て行く様は圧巻だ。

「……さて、我々も行くか」

「……ハ」

私はセラトウールに話しかけた。

「すまないな。別にお前達を信用していないわけではないのだが……」

「分かっております。それに、単にそれだけで我々を親衛隊に振ったわけではないでしょう」

ほう。そこまで読むか。

「ああ。その通りだ。……頼むぞ。お前達だけなのだからな」
「ハ」

そう、今私を護衛、及び私直属の部隊は全てカルラ教の信者で占めている。

「勝利のためだ。……その命、私に預けられるか」

「……いくらでも……」

「うむ」

本心は分かんが、今回は預けてもらわなくては困る。

「それでは、……出陣!」

ザッザッザッザッザッ……

重厚な音を響かせ隊列が動いた。

ダンザン国領 アルテカ
アルテカ。かつてゼフェス国と対峙していたときのダンザン国最大の軍事基地。

ありとあらゆる武器から魔法具、食料も万端に揃っている。

迂闊に手を出しては痛い目、だけでは済まない。徹底的にやられてしまふ。

そんな基地の前に我々は陣を張った。

「・・・フフ。慌てているな」

三日前に到着したのだがそれでもやはり人間、いや、ダンザン国にとっては意外だったらしい。

事実、城壁の上の守備兵達も落ち着きがない。

「・・・どうしてやるうか・・・」

そうして思案をめぐらせていると・・・。

「・・・陛下」

「なんだ。ゼラトウル」

「畏れながら申し上げます。なにゆえこのような所に陣を？」

「我々は少数。ならば奇襲をするのが常識だがそれすらも戦力差を覆せん。であれば、わざと敵に気付かせる、というのも一計だろう？」

「ハ。ですが・・・ここは敵の真正面に位置する所です。さすがに魔法を危惧して距離をおいていますが、あまりにも正面過ぎます」

「・・・私の判断が気に喰わんのか？」

「いえ。ですがいくら命を投げ打っても結果が変わらなければ意味がございません。何故このような所に？」

「・・・ここは、試してみるか。」

そうして私は伝令に兵を集結させるように命じた。

私は今壇上にいる。

下の方には黒いマントに黒い布を顔に覆ったカルラ教信者兵が集まっていた。

それを見渡した後口を開く。

「……皆の者！聞け！」

視線が集中する。

「おそらく私が考えている、いやそれ以上にお前達は疑問と心配に埋もれていると思う！ここはかつての前線であり、今は敵のど真ん中に位置している！無理もない！！」

ゼラトウルを一瞥する。

「そして今ここには我々、私とお前達、カルラ教信者しかいないのも事実！！」

そう。今ここには魔物や魔族で構成された軍隊はいないのだ。

私の命により今は別働隊として動いている。

だが……。思わず笑みがこぼれる。

「五万の別働隊」と「三千の本陣」。これではどっちが主軍が分からないな。

「他の部隊は私の極秘の命により別の事をしている！はつきり言う！私はお前達を信頼していない！」

「……………」

「……む？不満はともかくざわめきはすると思ったが、……静まり返っているな……」。

「だが、此度の戦いより有利に運ぶためにこの布陣となった！今別行動している隊の動きも重要だが、ここにいるお前達にも作戦通りになってもらわなくては困る！だが、もう一度言う！私はお前達を信頼していない！故に今回の作戦を話していない！……それで私も私に命を預けるか！！」

「……………ハッ！……………」

な！！！？？

皆が皆一瞬の迷いもなく……。

「陛下」

ゼラトウールが言う。

「そんな事は既に承知のことです。今あなたが向こうの基地に突っ込めと言えばたとえ負けると分かっているとしても突っ込むでしょう。もしここで死ねと言われたらその通りにするでしょう。我々がどうかなど考える必要はございません。ただあなたはどうか効率的に「使うか」をお考え下さり、命じてくださればそれこそが我々の指名であり、喜びなのでございます。でなければ元より援軍に來たりなぞしませぬ」

啞然とした。そこまで……この国に尽くすのか……。

「……ならば、私を信じろ!」

「ハッ!」

トン トン トン

壇を降りながら考える。

父上。あなたは……心よりこの者達を信じていたのですか？

……私は……。

いままで味わったことのない感覚が胸の中をうごめいていた。

夜営五日目

そろそろ敵も怪しむことだろう。……動くか。

「ゼラトウール!」

「ハ」

「出陣の準備を」

「……ハ」

さあ、開幕だ。

アルテカ基地

「ん？あれは！？・・・くそっ！」　プオーーン！！
見張りの兵士が襲撃の合図を知らせる。

しばらくして・・・

ドタドタ・・・！！

「どうした！？」

「ゼム將軍！あれを！」

「・・・来たか・・・！！」

「うってでますか？」

「いや、様子を見る。とりあえず弓兵と歩兵に盾だけを持たせて城壁上に整列させる」

「ハ！」

「己・・・災厄の権化め・・・」

アルテカ基地東の正門より三キロ離れた所

「・・・さすが、準備も速いな」

「如何致しますか？」

「・・・縦と横に広がるように四角形に展開、前列は盾を前に構え、それより後ろの列からはその前を上からの攻撃から守るように盾を頭上に掲げる。最後列は弓を放つことだけを考えよ」

「ハ。そう伝えます」

すぐさま伝令が飛び出して行き、陣形が整えられる。

「・・・皆にはちゃんと伝えているだろうな」

「もちろんです」

「そうか。しつこいが・・・くれぐれも深く進もうと思うなよ」

「ハ」

そう、先程出陣前に全兵にこれからの戦についてを伝えておいた。此度の戦、全力をぶつけよ、さりとて深く敵に食いつくな。亀のようにのろく、しかし一撃一撃はドラゴンの牙の威力と見間違う程に力を出せ、と。

それも次の作戦のためだ。

だいが先のことになるがな。

「では、進むぞ」

「ハ。太鼓を鳴らせ！」

ドドーン！！

開戦の合図であった。

アルテカ基地

「くそつ、堅いな！」

城壁の一段と高い場所でゼム将軍が吐き捨てる。

「いかがいたしましたしょう？」

「いかがもくそもない、撃ち続ける！これでは討って出ることも難しい！とにかく撃て！」

「ハ！」

実際、場はゼム将軍の言うとおりであった。

基地からは先程から弓矢や魔法を使い相手に休まず攻撃を与えている。

対するゼフェス国軍は動きこそそのろいが盾でがっちり固めているのでまったく効いていない。徐々に進行してきている。

これでは下手に場外に兵を出したらろくに攻撃できずに被害が増えるだけだろう。

前線ではなくなり、平和になったから熟練の兵や将軍がいなくなっただとはいえ流石はダンザン国軍。

他の国より将軍や兵の質が圧倒的に違う。

それでもやはり前の兵達よりは劣るのだが……。

そうこうしている間にゼフェス国軍は城壁の直ぐ近くにまで進んできた。

「くっ！撃ち方やめー！」

一斉に射撃や魔法が止まる。

「どつたれます？」

傍らの部下が聞く。

(・・・く、投石器さえあれば・・・！)

そう、いくら堅い守りでもより重い一撃を与えれば確実に潰れる。

しかし、ここには・・・ない。

(海や海岸に近い沿岸付近や平原の城に分散させたのが仇になったか！)

本来ここアルテカは戦時とはかく投石器を置いておくメリットはまったくくない。前線だったからこそ必要だったのであって、別段超大群が展開するほどの幅を森などによってもてないので普通の白兵戦が好ましいのだ。

投石器では返つて的が絞り易いが、という事は相手にとっても避けれるパターンを与えてしまうことにも繋がる。前線のときはその超大群が上空から地中からとわんさかやってくるので対応が難しく、歩兵もかなりの数が出てくるので投石器を用いて手数を減らしただけのことだ。

故に戦がなくなった今、本来あるべき場所に移された、というわけである。

「・・・弓部隊はそのまま待機、城壁を登ってくる敵を射れ！他の部隊は石や煮え湯などを持って来い！ぶちまけると伝えるー！」

「ハー！」

急いで伝令が走り去ってゆく。

(・・・まだ大丈夫だ。見たところ我々の方が数も多い。武器の質は・・・分かんない。しかし奇妙だ、何故数に差があるとはいえ積極的に攻めてこない。魔族や魔物とは血の気が多いと聞いていたが・・・上の連中が強いのか？)

慣れていないとはいえ、ゼム將軍はいい指示を出した。

しかし、彼はここでとんでもない勘違いをしてしまったのだ。

この事が後になって大きく情勢に響くことになる。

そしてそのことに気付いても時は既に遅いのであった・・・。

初戦から二日、ゼフェス国軍は朝晩ちまちまと攻勢を繰り返し、か
とって本気で基地を手中にしようとは思っていない攻撃の仕方
であった。

その日は朝から霧が立ちこみ、攻守共に難しい気候なのでこのまま
一日が過ぎるかのよう思われた。

そんな矢先、ダンテの下に急報が届いた。

「報告！ここより二十キロ東のテルパ平原にダンザン国軍を確認！
数は多すぎて分かりません！さらに後方から湧いて出てきていま
す！！」

周囲の兵が驚いている。

ゼラトウルが前に進み出た。

「陛下。如何なさりますか？」

「ふむ。ダンザン国め、早期決戦に持ち込もうとしているな。東側
の軍勢をかき集めたとみえる。それに、我々の数が少なすぎるので
策があることを考慮し、大軍を一気に引き連れてきたな」

「おっしゃるとおりかと。いくら策があるとは言え、敵に埋め尽く
されれば敗北は必至です」

しかしその言葉を聞いてもなおダンテは表情を変えない。

「ふん、……だが、私も早期決戦を考えていたのでな。都合が
いい」

その尋常ではない考えにゼラトウルはこれまた尋常ではない答え
方をした。

「……左様ですか」

ただ平坦な声でそう告げた。

「……驚かんのか？つまん奴だな」

ダンテの片眉が少し持ち上がった。

「私は陛下を信じておりますので。それに、いざとなればここに
いる皆が身を捨てて守るでしょう」

「よいのか、犬死かもしれんぞ」

ニヤリと幾分たちの悪い顔つきでダンテは言った。

そんな言葉にゼラトゥールは、

「それでも良いのです。どんな死に方をしようが、犬死をしようが、陛下の為に、例え敵に一矢も報いれずとも陛下の身が削り取られないように生きるのが我々ですので」

平然と答えた。

その言葉にダンテは周囲の兵を見回す。

先程は数に驚嘆しただけだったのか、顔を覆う黒い布の合間のその目からは恐怖など一切感じられず、ただ来るべきものに信念を込めて備える目つきをしていた。

まるで己等は生きようと倒れようと構わないと。

その目を見てダンテは身震いした。

自分の為に死をも厭わない、という実情を初めて目の辺りにして感動に打ち震えているのではない。

その時ダンテは、「恐怖」していた。

自分という存在が、ここまでの数の人間を、いや、命を消すかもしれないということに。

幼い頃からバラモンやカザンに命を捨ててでも・・・という台詞は何度も聞いていた。

そして彼自身それが当然と考えていた。

しかし、今日に映るのはその台詞が実行に移される本当の瞬間。それに伴う覚悟。

背中を、汗が一筋、流れ落ちた・・・。

「・・・では、期待しよう」

幾分かすれた声でそれでも気丈に声を放つ。

「我々はこのまま北上する！また山中の強行軍になるだろうが、お前達の覚悟！・・・それしきで崩れるものではあるまいな！！」

オオオオオオオオオオオオ！！！！

・・・彼は、やはり少し恐怖した。

ダンザン国軍を回避し続け二週間が経った。
ただでさえ長い時は、時に小競り合いを起こし、逃げる軍にとって
は長いようで短いような時であった。
しかしそんな時間も終わりに近づいていた。

ダンテ視点

「陛下！もうすぐそこまで敵が近づいております！どうかご命令を
！！」

伝令が馬から飛びおりざまにそう伝えてきた。

「……陛下、どうかご命令を。これでは陛下を逃がせませぬ」
ゼラトウールが普段より少し低い声で話す。

「ならぬ」

当然だ。

「ですが！」

「私が言ったな。信じろ、と」

「……」

そうだ……信じろ。

「……承知しました。各隊！普段のように盾主用の防御陣形を
とれ！耐え抜くぞ！！」

ザッ！ザザッ！！

一瞬にして見慣れた陣形が変わる。

「……これでよろしいですか。」

「うむ。」

「……」

「……」

しばし、沈黙が落ちる。

「……どのみちすることもないので今のうちに言ってみるか。

「……すまないな」

「……は？」

「こんな苦境に立たせてしまった」

そう、今我々は敵の大軍を目の前にしている、かつ、後ろは山になっ
ているのだ。

これでは逃げてでも飛竜部隊ですぐに追いつかれるだろう。

対するこちらの数はなんとか用兵術を駆使して奇跡的に死んだ者は
おらず、出発時の三千人が丸々いるとはいえいかんせん数が少な
ざる。

そんな中でも私を信用してくれているのだ。……複雑な気分だ。
こいつ等は人間であるというのに……。

「……前にも申し上げたでしょう、陛下はそんなことは考えなさら
ずともよい、と」

「ああ」

「我々にとつては陛下に尽くすことが「分かっている」

「分かっているが……恐ろしくないか？私がお前達を騙している
としたら」

「……それにより敵が壊滅できれば本望です」

「ではお前達だけを屠ろうとこのような大芝居を作ったとしたらど
うだ」

「……ふむ。それは本望ではありませんが、もしそうお考えな
らば我々はそれに従いましょう。敵を陛下の下で一人も斬れないの
は口惜しいですがしか「何故だ」

「……は？」

「なぜそこまで尽くす！私は魔族で！お前は人間だ！さらにいえば、
私の命はお前等の命ではない！それなのに理不尽な命まで聞くのか
！？」

「……誰の命がどうこうはさておき、陛下は、人間とはなんだ
とお考えになりますか？」

「なんだと？決まっている……！」。

「決まっている！！己の私利私欲だけを考え！甘い仮面を被り笑い

ながら平然と裏切る種族だ！もちろん魔族にもそのようなものもいる！人間にも例外はあるだろう！、が！どうなっても本質は変わらない！！ゆえに「その通りです」

「・・・なに？」

「どういうことだ。」

「その通り、人間の本質は基本的に陛下のおっしゃる通りです」

「なら・・・」

「ですから。我々は、私はここで陛下に尽くしているのです」

「なんだと!？」

「私は陛下に仕え、陛下の望みを叶えたい！これは私の私利私欲！そのためには同じ人間とはいえ敵をもどんな手を使ってでも騙しましょう！これは私が甘い仮面を被り平然と裏切ること!!」

「な」

絶句した。

「・・・いかがですか？実に「人間らしい」でしょう？」

「・・・そういうものなのか」

と私が一人ごちると、

「そういうものです」

と、目じりを笑わせながら言った。

そういうもの・・・か。

と、少々思案をしていたりしていなかったりの時に兵が飛び込んできた。

「伝令！敵軍出陣！」

来たか。

「数は！」

「おそらく三万かと思われまます！」

三万か。出方を伺っているのだろうか。

「前衛に通達。決して攻勢に出ず、守りに重点を置き、と伝える」

「はっ」

そうして兵が出て行った幕舎の入り口から続いて私も出る。

後ろからゼラトウルがついて来る。

そうして私は一際高い壇上上がった。

戦闘体制に入った兵を眺める。

その誰もが光り輝くような目をしている。前方を向いている者達の顔は分かんが向こうも同じだろう。

・・・これが人間、か。

彼等は私を信じている。それもおかしな話だが、心の底からだ。

もちろん全てがそうではないのかもしれない。中には邪な心を持つ者がいるのかもしれない。

・・・だが、それこそ考えても詮無いことだろう。

そんなことを言えば、我が軍の兵とて全員がどうなってるか分からん。

まったく、私は今まで何を考えていたのだ。

口先だけで父上を殺した人間と他の人間とは違う、と言っても、考えても、結局は心の底から人間という者自体を憎悪し、嫌悪し、侮蔑していた。

人間について実際に見て、知ったものでもないのに、過去の記憶と「たかが文献」だけで判断してしまったのか、私は。

なんと・・・愚かで、小さい。

実際に人間を見てみたらどうだ。同じではないか。

結局私も己の私利私欲のために国を再興しようとし、甘い仮面を被り目の前の軍を死に追いやっている。

もちろんその仮面の奥には勝算があるのだが、敵方に漏れると一気に瓦解する作戦なので人間には教えていなかったのだ。だがどうだ。今日の前にいる奴等はどうだ。笑えるほど私を信頼している。怖いほど私を信頼している。この何も教えず、語らない私を・・・。

・・・ならば、私も・・・信頼してやる、いや、信頼するのが当然！というものだろう！！

「聞け！！皆！！」

兵は皆前を見たままだが、それでも耳に全神経を張り巡らせるのが

・・・もたないか!!

戦況はどんどんまずくなっている。このまま本陣が来ればっ!

・・・来たか!!!

「皆!そのまま良いから聞け!!」

ピタツと両軍の動きが止まる。

途端ダンザン国軍からはざわめきが漏れる。

「あれが。」 「魔王か!!」 「おいどうする!？」 「勇者様達は本陣だぞ!」

対する我が軍は微動だにしていないながらも聞くことに集中している。

「我が軍よ!誇りに思う!良く信じて!耐えてくれた!まことに勝手だが誇りに思う!!」
少し笑い声が聞こえる。

「対するダンザン国軍よ!ここまでの遠征ご苦労!もう帰ってよいぞ!!」

すると予想通り所々から声が聞こえる。

「なんだと!!」 「魔族が!!」 「我々には勇者様方がおるのだぞ!!」

ふん。

「ハハツ!勇者か!それはAランク級か!？」

「ふん!お前等になぞBランクで十分だと国王様は判断されたわ!!」

なるほど。Bランクぐらいならなんてでもなるか。

ダンザン国王も詰めが甘いな。いや、だからこそ卑怯な手段を使って父上を殺したのか。

「では、お前達を嫌でも帰らせてやろう!!」

「何!？」 「何!？」 「何だと!!」

「では後ろをしてみる!!」

私は敵軍の本陣より少し右後ろの方を見る。

そして両軍とも後ろを向きそこには・・・

「ハ！」

こちらは会釈だけで済んだ。

相変わらずこういう時だけは感情表現が少ない。

「・・・陛下」

こちらはゼラトウル。

「ゼラトウル・・・ご苦労だった」

「は。申し訳ございません。このような策があったならば出すぎた真似をしていなければと思っております」

「いや。こちらこそすまなかった」

「いえ。まさか監獄から元將軍や兵達を救出してくるとは・・・」
そう。私が考えていた作戦とは注意をこちら、つまり魔王にそらし、その間にバラモンの別働隊で監獄に投獄、封印されている者達を解放。バラモン側はそれを繰り返しかんりの数と質に膨れ上がると私の持っている魔力石の魔力をたどり合流、というかなり荒業だが一番その後の勝率が高くなる作戦だ。

・・・正直、もう少し遅れていたら危なかった。

この作戦で危険な所は三つもあった。

まず一つは、やはり時間の問題。遅すぎては困る。

第二に、投獄・封印されている将や兵の問題。先の戦で亡くなったり、処刑されたりした者の詳しい数が分からないのでどれくらい集められるかが分からない、という点だ。バラモンが連れて来た数を見れば、それ程捕らえられた奴等は殺されはしなかったらしい。ふん。余裕を気取る人間、いや、ダンザン国王らしい。愚かだな、徹底的にやれば良いものを。・・・まあ後味が悪いのはいなめんがな。いくら憎むものとして大勢を殺すことはためらわれるか。それとも単にダンザン国王が軟弱か。おそらく後者だろう。だが、今回はそれに助かった。おかげで兵の数、質、さらに士気まで劇的に上がった。これで体制は覆せまい。

最後の三つ目は魔力石の問題だ。

魔力石とは、その名の通り特殊な石、若しくは特殊な処置を施され

た石に己の魔力を与え、非常用を使う、一時的に使うなどするものだが、それだけが魔力石の特徴ではない。洗練された魔力の技術を持つものはこれを用いて遠方の相手と話したり、位置や方角を確認したりできるのだ。もちろんこれは本当に修練を積んだ者にしか使えない。魔力とは、ここによって微弱に違う。それをお互いが記憶し、使う、というわけだ。しかし、それを使って話す、となるともう相当の技術を積む、それこそ魔道士の高位の高位からしか使えない方法だ。

恥ずかしながら私はそれ程の技術は持たない。もちろんバラモンもだ。それ程に難しい。

故に方角を示すことしかできなかったのだ。これでは合流が難しい。それだけではない。魔力とは個々が違うといったが、裏を返せばその個々の魔力が分かれば、相が手魔力石を持っている場合、それを探知して見つけ出すことが可能なのだ。個々の魔力を見つけて出すことは実はそう難しいものではない。例えばある一区画の中で発されている魔力を見つけて出すことは中位の魔道士レベルだと簡単にできる。つまり、その一区画の中の人数が限定されれば限定されるほど誰のが見つけ易いことになる。今回の場合は普通より突出した魔力を持つ魔王である私にとつては非常に危ない。何しろ回りに魔力が大きく強い者がそれ程いなかったのだ。自然と一番大きい魔力が私の者だと分かる。せいぜいゼラトウルぐらいだろう。故に、探知されればまずかった。こちらの位置が丸分かりになる。

今は我が軍の魔法使いとも合流したのでその心配はないが、ま、気をつけるに越したことはない、ということだ。

結論から言うと、かなりの博打だった。

まあ、得られたものは大きいので良かったのだが、・・・いや、それ以上か。

なにしろ・・・

「陛下」

「ん。なんだ。ゼラトウル？」

「……私があなた様と初にお目見えしたとき、私はこう言いました。あなたを認める限り一生付いていくと」

「……それがどうした」

「真に失礼ですが、私は今、あなたを認めております」

「ああ」

「……ですが」

「……ああ」

「もし、あなたが何らかの事をし、そのことで私があなたを認めなくなれば……私は離反します」

「……」

「そして、もしあなたの所業が私の意にそぐわないものであれば……あなたを斬ります」

周りの者が息を呑む。

カザンに至っては剣の柄に手をかけている。

「……よろしいでしょうか……」

「……ああ。構わん。むしろそうしてくれ」

「な!」「陛下!!」

「当然だろう? 道を踏み外せばその責任が被さる」

「ですが……」

「くどいぞカザン。分かった、ゼラトウール。そのときはお前の好きにしる。その代わり」

「その代わり?」

「私をしつかり見張れ、言ったことは実行せんとな。私が道を外れるようならできれば助言しろ」

「……陛下」

「それと……最悪の場合は、本気で俺を斬りに来い。俺はそう弱くはない……」

「……八。当然全力で参ります」

「フ。ならいい」

「ありがとうございます」

「ああ」

そうして私は皆に改めて言う。

「さあ！戦いはまだまだこれからだ！皆よろしく頼む！！」

「ハッ！！！！」「」「」「」

「では！今日一日は遊び！休もう！！解散！！」

そうして皆が皆思い思いに散ってゆく。

皆がいなくなった自分の幕舎で私は少し思いに浸っていた。

ああ、悪くない。

信頼というものも・・・悪くない。

父上・・・いや、かつて偉大な王と呼ばれた者達は皆この思いを

胸に生き抜いてきたのだろうか。

結果的に父上は死んだが、今でも信頼されている。

・・・私もいづれは・・・。

今回は本当にゼラトウル達には助かった。正直、彼等がいなければ

決起自体が不可能だったろう。

たった三千でよく・・・耐えてくれた。

・・・人間か・・・。

案外、悪い者では・・・ない、かも知れんな。

・・・さて、私も外の風に当たりに行くか。

そうして席を立ち入り口から出た。

彼は気付いていなかっただろうが、彼の考えがまとまったとき、彼の運命はそれまでの運命から変わることになった。そしてこれも気付いたようで気付いていなかったが、その時彼の心はこの十年間で一番明瞭で済んだ心地に酔った。

彼は変わったのか、いや、彼が言ったとおり本質とは変わらないものである。

ゆえに彼がその考えに至ったのも、彼の本質があつてこそ。

彼は変わっていない。

ようちやく

音が

動き出したのである

盛大に、高らかに、まるで今までは余興であったかのように。

……音は、ついに「動き」だした。

第8話 動く音 ダンテ編（後書き）

やっと過去編が終わりました。

といてもまた後にもっと遠い過去に話がいくかもしれませんが、とりあえず過去編 part 1 終了！・・・みたいな感じで（笑）

次からまた現在に移っていく予定ですが、サブタイトルが今までは「の音」で統一（8話までですが）していましたが、少し変わる予定です。

理由は・・・話にあうようにしたいし・・・趣深くしたいし・・・

・・・嘘です・・・根本的に作者の語彙力？では到底うまいタイトルが制限つきでは出ないことが分かりました。（・・・ただでさえへたっぱいのに・・・。）

なんとも変な感じですが、許してください・・・。

第9話 それぞれの道（前書き）

やっと物語の序盤が終わった……。

いや……もしかすると序盤の中盤かもしれない……。
（笑）

第9話 それぞれの道

そしてまた現在・・・

「へえ。すげえなお前」

「そうか？」

「だってそれが二年前だろ？十五じゃん」

「ふむ。ま、努力が実ったというわけだ」

横からジエイドが口を出す。

「そうです！陛下の頑張りは遂に「まだ達成されたわけではない」
・・・ですよねえ・・・」

こいつはうるさいな。

「その夢つてのは、人間に復讐することか？」

「・・・いや、そんなものではない」

「違うのか？」

「ああ。もうそんなものはどうでもよくなってきた。俺が今目指しているのは、父が見据えた未来を見てみたい事だ」

「あんたの親・・・まいいか・・・親父が見据えた未来？」

「ああ。話したとおり、私の父は魔王としては稀有な事に人間を許容し、認めた。これはほとんど、というより私が知る限り前例がまったくなかったらしい」

「理由はお互いがいがみ合っているから・・・か」

「ああ。だからこそ私は知りたい。何故父のような魔王が誕生したのか。いや、言い方が変だな。何故父はそのような考えと心を持ったのか、をだ」

「ふん。・・・とりあず、あんたは今のところ戦争なんざ起さそうと思っちゃあいねえのな」

「無論だ。まず、力が整ったとはいえ所詮は焼け石に水。こちらが未だに圧倒的に不利だ」

「・・・やっぱ名のある奴等は殺されてたか？」

「ああ」

「・・・そら厳しいな」

「うむ。まあ、目下の目標は有能な者達の確保だな。今回の偵察が終われば情報網に力を入れ、抜きん出た者を登用しようと思っている。」

「

「そんなこと思っていたんですか!？」

「ああ。お前やバラモンなどはよくやってくれているが、・・・分かるだろ。人間が本腰をあげれば終わりだ」

「ま、そりゃそうだ。知ったかぶりのようだが上位の野郎どもは『ヤバイ』らしいからな。いろんな意味で」

「ああ。ということだ、ランディ」

「あん」

「私の所に来ないか」

「ダンテが当然のように言う。」

「当然言われた本人は驚いている。」

「・・・まあ、まず、何で？」

「お前がかなり『できそう』だからだ。お前に話しかけたのも酒場での一件を見たからであつてただの世間話のためではない」

「・・・」

「もう一度言う、俺の下に来い。お前は、『当たり前』だ。それもかなりのな」

「言葉に力を込めて強く言った。」

「・・・せつかくの話だが、断る」

「しかしランディの方もまた声に力がこもっている。」

「何故だ、家族か？身の危険か？名声か？」

「いんや、別にんなことは気にしてねえ。だがよ、俺が勇者を辞めたのは『みんな』を守れないからだ」

「・・・」

「あんたのところに入っちゃあ・・・守れねえだろ」

「……そうだな。だが、まさか本当にその目標は達成できると思っているのか？それは……不可能だ」

「………」

「分かっているだろう？一方が一方を、それが枝分かれしさらに複雑にこの世は因果の網で組まれている。それが慈愛に満ちた関係であつても、必ず憎悪にまみれた関係もある。その全てを守るということは、……矛盾という言葉では表現できない程だ」

「……ああ。確かに」

「では何故だ」

「……確かに実質的な守ること、つていうのは不可能かも知れねえ。つか、無理だな。だから俺は、『幸せ』を守る」

ダンテとジェイドが驚いた顔をする。

「『幸せ』……だと」

「ああ。矛盾してるんじゃないぜ。例えば、ある奴がいたとする。

そいつはりんごを貰えればうれしい、が、みかんを貰ってももううれしい、そんな感じだ」

「……どんな意味っすか？」

「……なるほど。要するにお前は種族間のいがみあいなどを解決することにより起きる幸せではなく、その他の願望を叶え、それが壊されそうだと何らかの手段で『幸せ』を守る、ということか」

「ああ」

「だが、それでは解決にならない。例えば、賊などが原因ならばどうする。お前はそいつ等を斬るのか？となれば、そいつらの『幸せ』は壊れるぞ」

「だから、修行してる。殺さねえようにな」

「だから、それでは意味がない。いづれは死人が出る」

「おいおい、人の話はちゃんと聞けよ。俺は「殺さない」」

「……なに……！」

「なるべく、じゃねえ。できる限り、じゃねえ。殺さないんだ。誰も、何も」

「……魔物もか……」

「当然」

「馬鹿な！死ぬ気か！？」

「そいつはヤバイっすよ！」

「言つたろ。修行しているって」

「だがそんなことでは「それで死んだらそこまでさ」……何！？」

「当たり前だろ。俺は自分の夢に向かって突き進む。けどその夢が叶えられないんだったらしょうがねえ。悔やみはするけど俺はそこまでの人間だったってことだ。そこで終了」

「……馬鹿な。……お前は……狂っている！」

「ああ、そうかもな。でも、それでいいよ。誰にも迷惑が掛からないような狂い方だろ」

「……そんな……」

「俺は、死の恐怖より、自分が自分で無くなる方がこええ。そういうこつた」

「……はあ、そんな考えもあるのか」

呆れたように言う。

「ああ。ある」

対してこちらは気楽に言った。

「……一つだけ聞く。もし、どうしても治らんような馬鹿がいたらどうする。己の考えは曲がらず、それでも俗に悪事というものを働こうとしていたら、……どうする」

「……そんなときゃあ、かなり手酷く痛めつける。最悪の場合もう通常の生活しかできない体にする」

「もしそれができなかつたら？相手がとんでもなく強く、自分が修行しても叶わん相手だと認め、倒す機会はこれきりだとすれば。または殺さない限り永遠に生き続けられるものだとしたら、……どうする……」

「……殺す……かもしれねえ」

それを聞くとダンテはなぜか安堵したような顔になった。

「それでいい。成る程幸せを守るとはいい目標だ。だがそれによる殺生は起こる可能性が大きい。この先お前の前に必ず今言ったような「化け物」が現れるだろう。それでいいんだ。お前が死ぬのはいとしよう。だがそれにより相手を止められなかったらそれこそ大惨事だ。いままでの夢をまる投げし、逃げるようなものだ。それでいい。そんな相手が来たら迷わず殺せ。おそらくお前の性格上そう思う奴は少ないだろう。だが逆に考える。もしお前がヤバイと思うということは他の奴にとってはさらにヤバイのだ。とにかく……生きる」

「……魔王である私が言うか……」

「……んあ。そうするよ。それは考えてみた。心配すんな、あんがとよ」

「ああ」

「分かってる。ほんとにヤバイ奴が来たら……」
目がスツと細まる。

「俺が消す」

冷たく言い放った。

「……ふむ。それがいい」

「……それと一応もう一つ目標がある」

「……まだあるのか」

「ああ。世界平和だ」

「……！……なんとというか……それも……あれだな。」

「矛盾だらけって言いたいんだろ。分かってる。だが、地道にやってくよ。魔物なんかに対する意識を変えたり、逆に人間に対する意識を変えたり。いろいろやるつもりだ」

「はあ、応援しておこう」

「ぼくもとききます」

「あんがとな」

そうしてランディは笑う。

そしてしばらくして・・・

「・・・もうそろそろ行かねばならんな」

「ん、そうか」

「やっつとですか!？」

「ああ。情勢が情勢なのでな」

「そうだよな」

「・・・本当に来る気はないのか？」

ダンテが名残惜しそうに言った。

「・・・わりいな」

「そうか。なら仕方あるまい。行くぞジェイド」

「ハイッ!!」

・・・そんな嬉しそうな声を上げるな。

そうしてダンテ達が立ち去ろうとしたとき、

「あ、ちよつと待ってくれ。お前、大体どこら辺に住んでるんだ？」

ランデイが声をかけた。

その声に応えダンテが後ろを振り向く。

「ん？何故だ？」

「いや、いい奴がいれば紹介したいなあ、と思って・・・流石にま

ずいか？」

「ふむ、そうだな・・・」

しばし思案する。

「ほら、俺旅するつもりだろ。だから道先々で誰かいたらさ」

「・・・そうだな、お願いしよう」

「陛下!？」

「いいではないか、仮にばれたとしたら逃げればよい。流石に教会

も大規模な行動は分かるだろう」

「しかし!」

「それに、」

ランデに目をやる。

「俺はあいつを信じている」

「……」
「……不思議か。経った四時間ほどしか話していないというのに」
「……いや、……まあ、そうですね、うん」
「そうか。では」
「決まったか？」
「ああ、俺はゼフェス国、サクナ領にいる」
「おう。あんがとよ」
「それを言うならこちらだ。……いい奴を頼むぞ」
「ああ、任しとけ!!」
「はは……では、……また」
「おう、また」

そうして「勇者」と「魔王」は別れた。
それぞれの道を創り、歩き始めたのだ。

第9話 それぞれの道（後書き）

やっと現在地点でも分岐ができそうです。

次からも現在（今回よりは少し未来）の話です。

が、過去編のときランディ編やダンテ編などに分けましたが現在編ではそのようなものはサブタイトルに付けないと思います。

これは過去編のときなど、特殊な場合のみに用いる場合ですのでご了承ください。

・・・別にそんな大差ないか・・・な？

第10話 一人目の選抜者、来たる（前書き）

舞台は変わってゼフェス国。

しかしそこは今とんでもない窮地に!?

第10話 一人目の選抜者、来たる

ゼフェス国サクナ領

肌寒い季節が多いこの北の大陸にしては比較的温かい場所でありかつては商業が振興されていた。

田舎のようだが土地には味がなく作物の栽培には適していなかったが、当時のゼフェス国では多くの都市と連結する場所にあり、それが影響したのだ。

しかしそんなことも人間が入ってくるまで。

人間は主要な交易ルートを既に持っていたので、内陸部の、それも今の状態ではなんのメリットも生まない土地など見捨てられて当然であった。

そんな状態が続いたので、土地はさらにマズくなり樹木も生来の遺伝からではなく外的な要因でおれているのが見て取れた。

そんな場所に現ゼフェス国国王ダンは着目したようであった。

サクナ領領主の館

「……それで状況は？」

青い髪を持つ青年が言う。その青年の他にもこの部屋には十『ぐらい』いる。

『頭に大きな所々で曲がりくねっている角を付けた』筋骨隆々の大柄なモノが言った。

「ドゥーン伯爵が直々に兵を率い国境付近に接近。その数およそ四十万」

辺りがざわめく。しかしそれは今の声が『女の声』であったことは無関係のようであった。

「四十万!?」 「……バカな……」 ザワザワザワ!

ダン!!!

最初に口を開いた青年の横にいた中年の『人型』が床に己の剣の柄

を思い切り当てた。

.....

そして敵かに口を開く。

「.....ここは驚く場所ではないぞ。静まれ」

場の空気が一斉に変わった。

「.....ありがとうバラモン。.....さて、今聞いた所敵は四十万、対してこちらの兵は？」

「現状三万、かき集めて五万でございます」

再び角を生やした筋骨隆々の『女』が言った。

「.....きついな.....」

「まあ、しょうがないでしょう。向こうもこれを狙ってる感はありません」

と、こちらは中年の『人型』だが先程の人物とは違って少し軽い雰囲気の声がした。

「カザン、言葉をもう少し直せ」

バラモンが呆れたように言う。

「構わん、続ける」

「陛下.....」

どうやらこの青年が現ゼフェス国国王ダンテらしい。

「続ける」

「ハ。海からの二十万にこちらが兵を送った途端に西から敵が来た。これは策以外の何でもないでしょう」

「まあな。一応それも警戒していたからこそこの兵は残していたのだが」

「まさか、こんなに早く団結するとは思いませんでしたねえ。まったくもって恐ろしい」

「ああ、だが現状、我が軍の総兵力は五十万。これは大国である我々にとっては非常に少ない」

「なにぶん、薄く防衛線を張るだけでごっそり持っていけませんからな」

「ああ。まったく困りものだ。かといってこれほど取り戻さなければ狭い領土で挟まれる危険があるからな」

「まったくです」

と、軽いやり取りが続き今度は先程よりは真剣な目でダンテは問う。

「それで、なにか案は？」

.....

「.....ないか.....バラモン、流石のお前も今回は？」

「.....ダメですな、申し訳ございません」

とため息を吐きながら言った。

「そうか.....ま、仕様があるまい。敵の数が多すぎる」

「では、ここでは逃亡で？」

「ああ、そうなるな」

「そうですね.....では、直ぐに格隊に連絡を.....しばし待たれよ.....」

バラモンの声に太く深い音色をたたえた声が被さる。

「.....なんだブレノム？」

ブレノム、と呼ばれたものは大きな曲がりくねった角を持つ頭を、体を少し揺らして答える。

その姿は先程の『女』の姿と同一であった。違うのは体が巨大で身長は四メートル程それに見合っただけで、体自体もでかく、筋肉も『女』より遙かに分厚く硬そうである。

だが、その体格に反して寡黙な男でも有名だ。

「.....それでは.....時間がかかってしまうであろう.....」

「そうだ。だがそれしか方法は.....わしがやろう」

「何？」

「わしがやると.....言ったのだ.....」

「だから何をだ？」

「殿.....じゃ.....」

「！ブレノム！」お父様！」

カザンと『女』が声を上げる。

「ラマナ……うるさいぞ」

どうやら『女』はラマナという名前でブレノムとは親子関係のようだ。

「しかし！」

「どのみち……必要であるうて……」

「……」

「……陛下……わしはバカじゃからのう……こういう力が主な時しか使い物にならないのじゃ……」

「……ブレノム……」

ダンテが寂しげに言う。

「……なんと……娘より……陣頭指揮が執れん……」

「……」

「そんな……お父様」

「……決まりで……よいな……」

「……頼む」

「！陛下！お父様なりませぬ！行くなら私も「愚か者！……め」

「ッ！」

「お前は……わしより弱い！……じゃが……バカではない……陛下に……付いて行け」

「お父様……」

「……陛下……すみません……また、このようなことになって……」

「……何がだ……」

「……お父君の……ことです……今もまた……このような……」

「……ああ……そうだな……」

「……力を……お溜めください……さすれば……」

「ああ……分かっている……」

「……………では……………」

そうしてブレノムがその巨体の一步を踏み出そうとした時。

ボタン！

「急報です！」

「なんだ！ここは一介の兵が来れる場所ではないぞ！」

どうやら地位の低い兵が訪れたようだ。

肌は暗い緑色で服はヨレヨレの古着を着ている。

「ハア…………ハア…………いえ…………ハア…………その、急報です！」

全力で走ってきたらしいゴブリンは言った。

「…………なんだ？…………まさか…………敵襲か！？」

バラモンが思わずといった風に席を立ち声をあげる。

その声に応じて周りの者達も緊張感にじみでてる。

「いえ！違います！…………いや、ちがうのかな…………」

「…………ええい！なんなんだ！」

「いや、あの、わわわ私の部隊がここから三十キロ離れた南方の一部を警邏していたところ、武器を所持した人間が現れたのです！」

「何！？」

バラモンとカザンの声が被さる。

「くそ！全軍に命令を！直ちに陣と撤退の準備を！」

「あの！それと…………何だ！」

「…………その者は…………一人でした…………」

「……………何？」

「……………間者か？」

「あの、それは分かりませんが私達を見て「逃がしたのか！」

「いえ！近づいてきました！！」

「……………なんだと！戦ったのか！」

「いえ！話しかけてきました！」

「ふん！命乞いか！」

「いえ……魔王ダンテ陛下はどこに、と……聞いて……きました……」

「……暗殺者か？にしては何かずれてるな」

「それで！」

「フム、それで？」

「会ってどうするのかと、我々が聞きました」

「……それで」

「仲間に……なりたいたい……言っていました」

「……何！？」「……何！？」「……何！？」「……何！？」

皆が一斉に驚きの声を上げる。

「なんだ！？」 「やはり暗殺か！！」 「いやいや、それはもう

暗殺ではないだろう」

「……どうなってるんですか……」「……」「……」

口々に声を上げる。

そんな中ダンテは驚いていながらもこう言った。

「……それで、理由などは聞いたのか？」

「陛下！何を？」

「理由があるだろう。なぜ我々の軍に入りたいのかな。……流

石にそこまでは「はい聞きました」

「ほう。用意がいいな」

それを聞きバラモンが顔をこわばらせる。

「……貴様等……どういう訓練を受けているのだ……」

「

へ？ひ！」

「人間を見れば即殺すか、捕らえるか！どちらかだろう！！」

「いや、あの！」

「仲間かどうか位見分けはつくだろう！秘密裏に紋様を描いている

のだから！」

「そ……そそそですが！」

「そ……そそそですが！なんだ！」

「ささささ殺気が……なかつたもんで……」

「なあああああにいいいいいい！！！！」

「ひいいいい！！！！」

哀れなゴブリンは震え始めた。

「貴様等のような実力が低いものが殺気だと！馬鹿者め！そんなもの高位の暗殺者や勇者であれば熟練した者でないと何も感じられんは！！！！」

「いや……、いや、そのおおお！！！！」

「そこに直れ！その未熟な精神を叩き直してくれる！」

「いいいいいい！！！！??」

と、バラモンが今にも掴みかかりそうな勢いするとき。

「……うるさいぞ、バラモン」

「ですが！」

「とにかく！話を聞こう。それに、仲間になりたい人間もこれから出てくるかもしれない。特に邪教からな。そんな考え方では情報戦も押し切られるぞ。人間の協力者がいてこそ、だからな」

「……は……」

「……よし。話せ」

「その、こう言いました！自分はランディ・ケルトの推薦により来た、と！」

「！！！！！！」

途端、顔の表情を変えたものが二人でた。

一人は席の片隅にいたトカゲを十倍大きくしたような魔物と、

魔王ダンテだった。

「誰だ？そいつは？」

怪訝そうにカザンが聞く。

「……ランディか……」

「お知りで!?」

「もう二週間ですね……」

トカゲのようなものがしゃべる。

「？知っているのか、ジエダ？」

「ええ、まあ」

「何だ、そいつは？」

「……人間だ」

カザンの問いかけに反対側のダンテが答えた。

「！！人間ですと！？」

「ああ。前にシャイアに行ったときがあつたらう？その時会つた奴だ」

「敵ですか！」

「いいや、味方だ。ま、演技かどうかも分からんがな。そうは見えなかつた」

「僕も見えなかつたです」

「では、……その彼が送ってきたというのは……」

「奴が言ったのだ。もし旅中でいい奴がいたら紹介すると。無論許諾した」

「そんな……」

「今の我々の現状ではより多くの『才』がいる。当然だろう？」

「そうですね……」

「ですが、推薦されたと言っているものが偽者であれば」

「それはどうでしょう？僕も辺りにちゃんと気を張っていましたし、なによりフルネーム当てるなんてできなく……は、ないか」

「……」

「な……なんですか！その目は！？」

「ジエイドの言うとおりだ。それに、仮に敵であれば……やれるだろう？」

「ふん。見くびってもらつては困りますな」

「ならば……今その者はどこにいる」

「は、屋敷の前で監視させております」

それを聞きましたもやバラモンが叫ぶ。

「屋敷の前だと！？近くに移動させてどうする……この「バラモン」

「・・・」

「・・・八」

「・・・ん。来させる」

「ハッ！」

しばらくして・・・

コンコン

「入れ」

「失礼します」

先程のゴブリンと奇妙な紋様が付いている鎧をつけた人間が入ってきた。

ダンテ視点

ほう・・・あれが・・・。

パツと見る限り悪い感じはしない。むしろ良い方だ。

鎧の下に見える均整の取れた体。淀みのない青色の目に金色の肩口までだが整えられた髪。

身長は大体私と同じ・・・いや、向こうが少し高いか。

身に付けている鎧は・・・ふむ・・・見たことのない紋様だな。

家門か・・・魔法紋か・・・。

武器は・・・持っていない・・・？

「お前がランディが紹介したものか？」

「はい」

ふむ。なかなかいい声だな。透き通るようで、それでいて芯がしっかりしているような声だ。

「だが、私達はお前が本当に紹介されたものかどうか、味方かどうかも分からぬ。それを証明する方法は？」

さて、どう答える。

「はい。ここにあります」

「……何!？」

「そう言つてそやつは何かを取りだした。」

「……玉？」

「それは……なんだ？」

「見たことがない。灰色がかつてくすんだ色をしている。」

「ほう……それは……」

「む。知っているのかヴィダル」

我が国最高の魔術師に聞く。黒いローブを着ていて頭巾のようなものは頭につけていないのでその顔が良く見て取れる。しわが所々に見られる顔で首の根元まで来る白い髪の毛と髭をもっている。『いかにも!』というような風貌だ。御歳百七歳だが偉大な魔術師と比べるとまだまだ若い方らしい。

「はい。メモリーストーンですか?それもよく造られていらつしやる」

「はい。その通りです」

「なんだ、そのメモリーストーンとは」

「本来、遠く離れた者に連絡するためには古来より伝書鳩、魔法が発達してからは念意で行われておりました」

「しかし、これはどれも不完全。伝書鳩は問題が起きるのが多く、念意は逆探知、盗視される危険があります。もちろん手紙などを人や魔物に使つて送るときも、盗み、裏切りなど数々の問題がございます」

「ああ。そうだな。だがそれはそのメモリーストーンとやらも同じではないのか?球体でどちらかという大きい。見つかる可能性は高いだろう」

「確かに、『そのまま』ではそうでしょうか」

「なに?」

「メモリーストーンのは原石は元から魔法浸透度、魔力含有量が高いクロム石で造られております。このクロム石というものは一般に価値が高い宝石などよりは見つかる方ですがそれでも価値が高く、一

般市民が買うにはかなりの決断が必要でしょう。ま、その者達には使い道はありませんが例えとして話しておきました。さて、このクロム石。先程も申し上げましたが魔法浸透度、魔力含有量が非常に高く、下位の魔術師でも楽に加工ができます。しかしここからが問題です。先に結論を申しますが、メモリーストーンとは『映像』を記録し、他の者に見せることができるのです」

「なんだと!? ブブマ! そんなものは知らなかったぞ!」

口が飛び出て目が一つの人型のクジユ族をにらみつける。

「も、申し訳ございません! まだそこまでお教えすることができませんでした! 何分! 原理が難しいので!」

「む。そうだな。詳しく本質まで分かる説明をしると言ったのは私か。そうか。すまない」

「いえ! 私の考えが足りないばかりに!」

「いや、十分実戦での知識は溜められた。それもこの国を奪還する時ギリギリにだ。確かに時間が無かった。以後教えていってくれ」

「ハ!」

「……すまないな、ヴィダル。続きを……」

「承知しました。問題は映像を記録する性質、それを放出する性質を石に与えるところなのです。クロム石は魔法で簡単に形を変えます。しかし、いくら魔法に馴染み易いからと物に性質を与えるのは難しいのです。これは高位の魔術師でさえも難しい技術なのです。それ故にメモリーストーンは非常に、ひじょ〜うに高価なのです。おそれながら、今の我々の財力では手は出せはしますが半分以上が吹き飛ぶでしょう」

「……そんなにするのか……」

「また、全ての物に優劣があるようにメモリーストーンもまた然り。悪いものは映像がブレたり、音が聞きづらい。良い物はその逆です。質がいい。より言えばこれは私も聞いたことしかございませんがなんと映像を消したりまた保存できたりするのです。質はどうか分かりませんがおそらくそのような芸当ができる魔術師ならば問題はな

いでしよう。あ、言い忘れておりました。メモリーストーン普通は一回しか使えませぬ」

「何！？それである価値なのか!?!」

「左様。ですが陛下、お考えなさってみてください。本当に重要な案件をほとんど問題なく届けられるのですよ。それなりの価値は必要でしょう」

「……確かに……では、その使い終わったメモリーストーンはどうなる。映像を消し、そのまま美術品として売るなり捨てるなりします」

「ん？映像を消せるのだったらもう一回使えるのではないのか？」

「いえ、魔法による事物の、それも自分がかけたならともかく見知らぬ他人がかけた性質を書き換えることは困難を極めます。おそらく何百通りもの解析を必要とするでしょう」

「そうか。……ん……ん……そういえば何故これが重宝されるのかまだよく分からんな」

「はい？ですが、これは持ち運びに便利で見つかることなく「いや、見つかるだろう。球状でそれも大きかったらな」

「あ……あああ！申し訳ございません！重要な所を説明するのを忘れておりました！先程クロム石は形を変えるのが容易いと申し上げました。その性質もそのままメモリーストーンに活用できるのです!」

「……なるほど……どんな形にもできるのか」

「左様！羽や胴、革などにも変えられます！洗練された術を持つている魔術師ほどより実物に近い匂い、触感、微細な形を表現することができのです！故に、伝達用とは気付かぬものになります。」

「……成る程。よく分かった、ありがとう、ヴィダル」

「いえ」

「……おっと、忘れていた。」

「それでは……ああ、失礼、名前はなんと云う」

「メヌスといます。メヌス・アルバンテ。」

微笑みながら言うのか、この『化け物溜り』状況で……。

「それでは、……。」

メヌスが魔力を送り込んでいく。

すると、映像が浮かび上がった。

「よう！ダンテ元気か！？俺はこの通りピンピンしてるぜ。さて、いきなりだが本題だ。前にいい奴がいたら紹介するって言ってたよな。そいつが俺が最初に紹介する奴だ。名前はメヌス・アルダンテ。きつと心強いはずだぜ。そいつのチカラはま、本人に聞いてみる。若しくはいきなり実戦で試すか。たぶん大体につこり笑って了承するはずだぜ。それじゃ俺はこれで。あ！そうそうお前の夢はどうなってるんだ？ちなみに俺の夢はまだ壊れてないぜ！そんじゃ。あ、これ使い回しオツケーなようだから捨てんなよー」

「そこまで言ってフツと映像が消えた。」

「……。」

沈黙の中、ジエイドがポツリという。

「あれ？今最後になんか物凄いこと言わなかった？」

その通りだ。使い回し可能だと！？

今それは普通のもので手が出せるかどうかだというのに、いきなり最高ランクが目前に出現するとは……いや、さっきからあつて気付かなかっただけか……。

当然ヴィダルは驚い……陶酔の表情をして玉を眺めている。……気持ち悪いものを見たな。

「あの……。」

そんな空気を打ち消すかのように控えめな声が出た。

「それで、私はどうなるのでしょうか？」

「……特技は？」

「そうですね……指揮、ですかね」

「指揮……か」

「はい。なにか、部隊の指揮でお困りな事があればどうぞなんでも

お申し付けください」

「ふむ。．．．今の私達の現状は知っているか？」

「？、いえ？」

「今我が軍は三万、集めて五万。対する敵軍は四十万。これをどうする」

「なるほど．．．それで、それを打ち破れと」

「ああ、退きや．．．なんだと？」

「？打ち破るのではないのですか？」

「．．．ツ．．．できるのか？」

「地形と敵指揮官によりますが．．．その情報はありますか？」

「ああ、ある」

「な！．．．陛下！この者の話に耳を傾けるのですか？！」

「バラモン．．．」

「私も．．．今回は難しいと思いますがねえ」

「カザンもか．．．」

「．．．フフフフ．．．」

「何が可笑的い．．．小僧．．．！！」

笑ったメヌスに対し怒気を孕んだ声でバラモンが威嚇する。

「いえ。このような状況でもし敵を払いのけたならば私の実力も認められるかな、と思ひまして」

「何．．．。貴様我が軍を犬死させるつもりか．．．」

「面白いことをおっしゃいますね。もとよりこの戦、犬死など不可能でしょう。どんな状況であれ、ね」

「．．．．．」

ダン！！！！

いい加減私もイラつくというもんだ。思わず机を叩いてしまった。

「バラモン．．．下がれ．．．」

「で「下がれ．．．」

「．．．ハ」 スッ

「．．．．．ではメヌス．．．できるのか．．．」

「よっぽどの指揮官で無い限り大丈夫かと」

「……今敵は我々を殲滅しようとしている。当然有能な指揮官を送ってくるだろう」

「しかし最高の指揮官ではない、でしょう？」

「……最高でなければ貴様は勝てるのか？」

「ええ。……たとえ『一流』でもね……」

そのとき得体の知れない威圧感が部屋を襲った。

これは……こいつの……だということか……!?

横でバラモンやカザンも汗を浮かべている。ゼフェス国を代表する歴戦の戦士が……。

メヌスが口を開いた。

「私は……集団戦では引き分けこそすれど、決して負けませんよ。・

……決して……ね」

「……では、いけるな」

「……はい!!」

「……バラモン!準備を!」

「ハ」

ふむ。今のことによりバラモンのメヌスに対する見解が変わったようだ。

「……いや、それはこの場の皆……私もそうか……」

「兵はどれぐらい必要だ？」

「一応五万集めていただけですか？それと、陛下。敵を撤退、殲滅、どちらをお望みですか？」

「……殲滅もできるのか？」

「士気にもよります。それと何百か犠牲になる可能性があります。そうか、なら当然……」

「では、撤退させる」

「……フフ」

「?何が可笑しい？」

「いえ、ランディによればあなたは特殊な魔王だとか……。成る

程、仕え甲斐があります」

「……褒めてるのか？」

「当然ですよ。何百の犠牲と四十万の殲滅より、敵の撤退を選ぶのですから」

「……王だからな」

「はい、そうですね」

「……では、行こうか」

そうしていつのまにか二人だけになった部屋から出て行く。

そういえば、ランディとはどういう仲なのだろうか。後で聞いてみよう。

第10話 一人目の選抜者、来たる（後書き）

やってきました一人目。

っていうか話の内容が急すぎですかね？

とりあえず二週間という長いような短いような時が経っていますが、とりあえず長い目で見てできるだけ主人公達の年はとらせないようになりたいと思います。

ま、後でズバツ！と一気に老けるかもしれないが……。

それはあくまでも予定。

楽しみにしててください。

第11話 一人目の選抜者、魅せる（前書き）

やっとできました。

あゝ疲れた。

その理由は読んで頂ければ分かると思います。

少し工夫してみたんです。

まあ二度としないと幸いですけど。

調整に時間がかかる・・・。

第11話 一人目の選抜者、魅せる

サクナ領

一般に見られる平原・・・それは魔族領、痩せこけた大地でとはいえ草が繁茂し景色はさして『私達』が知るものと変わらない。

その平原が広がる場所で、殺伐とした・・・いや、どちらかという
と偏りがある空気が充満している。

一方は太陽に反射してこれでもかと鎧から銀色の光を出している集
団。

一方は統率されている服を着ている集団もいるが、ほとんどがバラ
バラの服装、異常な体格差、さらには地上に立っている、這ってい
る、『飛んでいる』など異質かつ異常な集団。

ダンザン国軍 と ゼフェス国軍

両者の力は端から見ても明らかに差がある。いや、ありすぎる。

40万 VS 5万

恐ろしい差だ。

一般に人と魔物がぶつかりと、同数では勇者でもない限り魔物の
方に分があるといわれるが、この場合ダンザン国軍に分がある。

決定的なのはここが平原であるということ。

森や谷、海などの水場であれば単純に力ではなく知恵で上回ること
ができるがその分平野では工夫を凝らしようがない。さらに今から
では撤退したとしても遅すぎる。まさにゼフェス国軍は綱渡りの位
置にいるのだ。

とはいってもダンザン国軍の方も余裕でいるわけではない。

相手は少数とはいえ魔物、魔族及び邪教徒。

こちらは無傷ではすまないのだ。骨の髄まで入り込んでいる恐怖は
そう簡単に消せるものではない。

両者の間で異様な緊迫感が広がる中・・・

ゼフェス国陣

「……ふむふむ。敵総大将はドゥーン伯爵ですか……成る程」

緊迫感の中、まったく動じていない者がいた。

「……それで、どうするのだ？メヌス」

魔王ダンテが新米も新米、つい先程軍職に就き、かつ今回の総指揮官に抜擢されたメヌスに聞く。

「そうですねえ。あ、僕の端は出してもらえましたか？」

「ああ……しかしよくあんなものを持っていたな。」

「ああ……腹巻にしてたんです。」

「……。。位置は、敵に見え易い所だ。これでいいか？」

「はい、ありがとうございます。」

陣を見渡すと見慣れた將軍達の旗の他に黄色い生地には麦畑が描かれている旗が、敵地に見えるようになびいている。

これがアルバンテ家の家門である。

「うっ……セルンさんに……それぐらいか」

「ん？何がだ？」

「いえ、向こうの名のある将ですよ。これはもしかすると少し楽になるかもしれませんね」

メヌス目を向けている所には草のツルが3本の木の棒に巻きついて
いる絵柄の旗であった。

「……厳しくなるの間違いじゃないのか？」

「うっん、いえ。あの人々に限ってそんな事はしないでしょう」

「あの人、と言っているが……知り合いか？」

「ええ。セルン・ヴァン・コリディアム。名将ですよ。ドゥーン伯爵と比べると……うっん、セルンさんに軍配があがるかな？そう思いますね。私の場合は」

「……それ程の名将ならば何故今回の総指揮官ではないのだ？」

「あくまでも私の場合、ですよ。要するに他人が名将かどうか知る

なんて実際に将を観るか、知名度で知れるか、どちらかですからね」「そのセルン、という奴は・・・知名度が？」

「あるにはあるんですけど、あまり出世欲がありませんからね。他の貴族の手柄にされてしまいます」

「成る程。ましな貴族、というわけか」

「まあ、領内も安泰しているようですし」

「・・・？ですし？お前はセルンとやらと親しい間柄ではなかったのか？」

「アツハツハツハ。親しい間柄って、それはないですよ。向こうは47歳、私は21ですよ。そんなに釣り合うとは思いませんね。それに、私は中央大陸、クセア大陸のソドン領出身ですからね。セルンさんはダンザン国。出生地からして違います。まあそれが必ずしも会ったことない、という理由にはなりません」

「では何故？」

「まあ会ったことはあるんですよ。私の父と知り合いでしてね。私が16の時です。そこで初めて会って、父との会話とその後の私との会話で、この人は・・・できる！と確信しましたね。いろいろ考え方が柔軟な人でしたし」

ダンテの目が光った。

「ほう。『父との会話で』・・・つまり、お前の父は有能だった、ということか？」

「・・・アハハハ、流石ですね。ええ。有能でしたよ。少なくとも私と・・・セルンさんはそう思っています」

「ふむ・・・軍人か？」

「・・・いえ、貴族です」

「！！・・・何故貴族が・・・」

「その話は後でするつもりです。今はほら、敵に動きがでてきたんで」

見れば、敵の軍がひしめき合いながら動いている最中であった。

メヌスとダンテが会話をしていた頃・・・

ダンザン国陣

「ふむ。どういうつもりだ・・・」

立派な口髭を蓄えた身なりが整っている人物がゼフェス国陣を眺めている。

余談だがその髭は上にカールしていて、ある意味整えにくい、立派な髭である。

体格は普通だが、細身ではなくむしろ筋肉質に近い。目は迷い無い水色に透き通っており、着ている鎧はもう自分の体の一部の様に着こなしている。手柄をかすめるなどする愚人ではなく、戦乱を駆け巡った人物だと伺える。

この人こそが此度の遠征の指揮官、ドゥーン・フォグナスその人である。

「なぜここで打って出る・・・いや、見せ掛け・・・いや、それもないな。では急いで方向転換をして・・・」

ブツブツとしゃべっているドゥーンの横では数多くの貴族の家系や、軍人家系の将軍達が待機しているが誰も口を挟もうとはしない。それ程ドゥーンの実力を認めているのだ。

「うん・・・むう・・・」

そうして総指揮官が悩んでいる頃

そこから少し離れた場所にひっそりと佇む人影がいた。

名をセルン・ヴァン・コリディアム。こちらも下方に濃く、満遍なく豊かな髭で覆われている。

鎧もドゥーン伯爵同様着こなしている感がある。違うのはより肉体が磨かれている、というところか。

そんな低名高実の貴族将軍はひたと敵陣を見据えていた。

しばらくそうしたまま動かない時が続く、と思われたが、少し顔を右に傾けた瞬間その目が驚きに開かれた。

「・・・!?!?・・・馬鹿な・・・!!」

驚きに満ちた声が響く。

「……………そうか……お前か、メヌス！……………流石というべきか……それとも……………何故……何故こんな時に……………」
そうして驚きの顔が苦渋に彩られたものへと変化していく。

「……………退却だ」

側に控えていた部下に言う。

「は？」

「退却するぞ。私は総指揮官にその旨を伝えに行く。準備をしておけ」

「……………ですが、何故！？今我々は敵を殲滅しようとしているのですぞ！ここで退けばいくら將軍が有能とはいえいよいよ無能の名を告げられることになります！！」

「だからどうした！！……………お前達の命に関わるかも知れん！」

「そんな……………何故……………」

「理由は……………あの旗だ」

アルバンテの家門の旗を指差す。

「……………あれが……………」

「そうだ……………奇跡というのは、可能だからこそ引き起こされると言ったことがあるだろ」

「は。起こるべくして起こるのではなく、あくまでもそうなる要因、可能性があると」

「そうだ、その要因を最大限に引き出すことができるのが……………もう一度あの旗を見る。

「……………あれだ」

「……………そんな……………しかし、アルバンテという名は聞いたことがございません」

「他国、いや、遠方の我が国の領で私の名前を出してみる……………」

誰も知らぬぞ」

「……………」

「分かったなら、私を信じるなら……………準備をしろ……………」

「そんな！そんなことを申さないでください！私、いや、我々はあなた様だからこそ付いて行くのです！！そんな・・・信じるならだなんて・・・！！」

「分かった！・・・すまないな・・・」

「いえ！それでは！！」

と言い、部下は身をひるがえして自陣に駆け戻った。

「・・・ラクス・・・」

彼もそうつぶやいた後総指揮官の幕舎に向かった。

ドゥーン総指揮官の幕舎

「何！？退却だと！！」

「ハ」

そこでは先程の空気とは一変して怒号の修羅場へと変わっていた。

「馬鹿な！なぜこんなときに退く！」 「そうだ！」 「貴公、ま

さかおくしたのではあるまいな！」

「まあまあ、いちど理由をお聞きに・・・」 「聞く耳なぞもつな！

！！」 「裏切りだ！！」

さまざま罵詈雑言、疑問の声が渦巻く。

スッ

ドゥーンが手を上げた。

するとどうか、声がピタツと止んだのである。改めてドゥーンの力とその影響力は高いことが分かる。

「理由を聞こう」

「ハ、おそらく諸侯方、將軍方もお気づきかと思えますが敵陣には見慣れぬ旗が立っている」

「ああ、我々も確認した。それが？」

「それが原因です」

「・・・ふむ」

「あれは、アルバンテ家の家紋でございます」

「アルバンテ？・・・聞いたことがな「アルバンテ！！」」

一人の将軍が頓狂な声を上げる。

「知っているのか？」

「ハイ。それはもう、愚かな奴と言いだありませぬ……」
クツクツと笑う。

「何故笑う？」

「ハ。セルン殿はそのアルバンテ家が恐ろしいとおっしゃった、そうですな」

「まだ言っではないが、そうだ」

ザワザワと声上がる。

再びドゥーンが場を静める。

「もし私の予想が間違っていたらとすると、申し訳ございませんが・
・貴公が言っているのはラクス・アルバンテの事ですか？」

「左様」

ドゥー！！

一部で先程とは比べ物にならない声が響く。

それは笑い声であったり、あるいは侮蔑の声であったり、あるいは怒りの声が混じっている。

二度ドゥーンが静める。

「それで、そ奴は何者だ？」

「ハ。ラクス・アルバンテ。通称『逃げ将軍』」

「『逃げ将軍』？」

「その通りでございます」

「どのような意味だ？」

「文字通り、逃げるのでございます。敵に背を向けて」
「ん？」

「ラクス・アルバンテは貴族でございます。クセア大陸エグザンドル皇国のテム領を任されていました。その生涯戦のときはずっと全軍の後方に位置していて毎回、それも一番に敵に背を向けるのでそう呼ばれておりました。さらに、武勳も立てたことがないとか。部隊の人数も驚くほど減っていません。大方逃げに徹して

いたのでしょうか」

所々で失笑が漏れ聞こえる。

「『おりました』？今は違うのか？」

「ハ。なにせ、今は『死んで』おりますので」

「死んだ？」

「ハ。どうやら国政に関わる重要な資金や案件を自分のものにして、他国に漏らしたりしていたようでして、最後は自害をしたと聞いております」

「ふむ。だが、なぜその旗が？」

「エグザンドル皇国の先代の皇帝ウイゼル皇帝陛下の時代にはアルバンテ家は義理のためか皇帝の寄贈により栄えていましたが、死後レンゲン皇太子が皇位につき、要らぬ人員を削減した折から衰退を始め、その事件によりほとんどお取り潰しと同じ状態になりました。周囲の土地は他の領に流れ、その息子が多数の民と共に細々と暮らしていたようですが・・・こちらにきた模様ですな。やはり、親子揃って愚かです。」

フフ・・・ 「いやいや、まったく・・・」

「ふむ。・・・それで、セルン殿。何故あなたはそのような者を恐れるのだ？仮にそのラクスとやらが恐ろしかったとしても既に故人前にいるのはその息子だ」

「・・・一つ、諸侯方にお聞きしたい。今の話を聞いて何も感じられなかったか。」

その言葉に応じて何人かが反応する。

「今さら何を」 「ハハ・・・」 「せいぜい哀れとしか思えんわ」

「何を・・・とは？」

それを黙って聞いていたセルンは

「・・・成る程。貴殿らは今一度痛い思いをしなければいけないようだ」

そういうとそのままを翻し、外を目指して歩く。

「何!?!」 「なんだと!?!」

「……どういう意味だ」

騒乱の最中、ドゥーンが問う。

「なに、今のダンザン国のレベルが分かったということですよ」

「……なんだと……」

「これから、いや、今も世は乱れる。そんな中、貴公らのようにたいたした実力もつけていない者が上に立つというのは真の実力者に対して無礼と言うもの。……ならばここで消えた方が良いと思っただけ」

「……」

「ふざけるな!」 「何だ!その言い草は!」 「武勲も口々に立てていないものが何を言う!?!」

「セルン!……それ以上言えば侮辱罪と問うぞ……!」

「……ドゥーン……青二才の貴様に一つ忠告しよう……」

「な……」

一瞬、場の空気が凍りついた。

「当然だろう?私は齡47。貴様はまだ31だ。まだまだ小童だよ」

「……なん「よく聞け」

「戦場において一番重要なものは何だと思っ?」

「……」

「それがヒントだ。後は勝手にしろ。それも分からんような奴を助ける義理はこちらもない。……まあ、貴様等の部下が一番哀れなのだな。」

「な……それでは!……さらばだ!……願わくは全員が生き残らんことを……」

そう言い放ちセルンは出て行った。

当然数多の將軍達が抜剣しおいかげしようとしたが、

「捨て置け!……それより今は目の前の敵だ……」

だがその言葉に反応して逆に出て行くこうとする者達が何人かだ。老いている者がほとんどだが、若い者も一人混じっていた。

「貴公ら！どこに行く！！」

「我々は・・・セルン殿の忠告を聞きます。」

「何！？」

「貴公らは存ぜぬと思いますが、彼の者は戦事において間違った判断をしたことが私が知る限りありません。」

「右に同じ。故に我等はセルン殿についていきます。」

「貴殿も今回は退いた方がいい。あの者があそこまで軍律を違反するの滅多にないことじゃ」

そういつて次々と出て行った。

「・・・お前もか？シユプリム」

「あつ・・・は・・・っはい・・・」

呼ばれた者はまだ青年といっても過言ではない顔立ちの人間である。この場にいるということはそれなりに実力も家柄もなかなかのものとと思われるがいささか迫力が足りない青年であった。

「何故だ・・・」

「その・・・父上から・・・老いた者は、尊敬・・・せよと、言われているので・・・」

「・・・そうか・・・。分かっているな。ここで退くということ
は、レイザー家に泥を塗ることになるんだぞ。褒美も、名声も貰
えず・・・落ちる」

「・・・はい」ゴクッ

思わず唾を飲み込む。

「それでも行くのか・・・」

「・・・はい・・・父上の、兵ですし・・・」

そう言つて礼をした後、そそくさと出て行った。

・
・
・

5人程が退出した後、あたりは静けさを取り戻した。

「・・・とりあえず、あの6人は放つておく事にしよう」

「ええ！それがよいかと！」 「まったく！貴族の風上にも置けんやつらめ！」 「まあまあ」

「・・・では！これより、作戦を検討する！」
流石は將軍、すぐさま空気が変わった。

しかしそれは今回動員された『47人』の將軍のうち6人が消えただけ、それも名も無いもの達なので何の痛みもないからかもしれない。

何はともあれ、いよいよ開戦の火蓋が切られようとしていた。

ダンザン国陣セルンの幕舎

6人の人影が見える。

1人はセルン。後は先程退出した5人である。
先にセルンが口を開いた。

「この場にいる者たちには深く感謝をせねばならないな」

「いえいえ」 「何をおっしゃる」

高齢の方が多いのだが、口調は穏やかだ。

「しかし、何に感謝しているのですかな？」

「大切な我が国の民であり兵を死地に向かわせないからですよ」

「ふむ・・・そこまで分が悪い、と」

「ええ」

「あの・・・」

おずおずと青年が手を挙げた。

「何かな？ シュプリム？」

「いえ・・・その・・・なぜアルバンテス家が恐いのか良く分からないのですが」

「ふむ・・・それは他の方々も同じですか？」

「ああそうだな」 「自害の件は疑問だが、そこはわからん」

「そうですね。では、私を信じてきてくださった皆様方にだけお話ししましょう。・・・ラスク・アルバンテスのことを」

場が静寂に包まれてゆく。誰もがその一言一句を聞き逃すまいとし

ているのが見て取れる。

「さて、まずは、彼は『逃げ將軍』と呼ばれていましたがこれは本当のことです。しかし、この名の意味は本当に使われて呼ばれるときにこそ初めて恐ろしいものになる。」

「どついう意味ですか？」

「・・・戦争における様々な部隊の構成の中で、どこが一番重要かお分かりですか？」

「？」 「それは・・・先鋒ではないのか？」 「いや、補給部隊だろう」

それらしい部隊の名がだが、セルンは頷かなかった。

「それは、殿です」

「殿・・・ム。成る程」

「いくら先鋒が強くても崩れればそこでおしまい。補給が円滑にできて負ければおしまい。これは他の部隊でもいえます。ですが、殿だけは違う。ここがどうであるかによってその後の戦況が驚くほど変わる。負けて敵に後ろを噛み付かれると士気は格段に下がります。そうになると再戦時に影響が出る。ですが、殿が食い止める、もしくは撃退することによってその心配は無くなる。また、その活躍により逆に敵の士気を下げたり、自軍の補給路を確保したりして事実上は敗戦でもそれ程痛手を被らずにいることができる。もうお気づきでしょう。ラクス・アルバンテは生涯、この殿を受け持っていたのです」

「なんと・・・」

あちこちで声がでる。

「しかしまだここは驚くところではない。いえ、もちろん驚くところではありません。なにしろあるときは戦闘の鍵、あるときは国命の命綱となるべき所に一生涯就いていたのですから。余程信頼されていたのが分かるでしょう。では何故信頼されたか。答えは、敵に一番多く背を向けたからですよ」

「ああ」「・・・むづ」

「故に彼は『逃げ將軍』と呼ばれた。これを考え付いたものの心境がどうか分かりませんな。皮肉でできたものならばそ奴はただの馬鹿。ですが的確に見抜いて付けたのならば良将でしょう。さて、ルクスのすごいところはここからです。彼が生きている間、彼の部隊の人数はそれ程減らなかつた。つまり、死者がそれ程出なかつたと言ふことです。．．．しかし、よおくお考えください。果たしてこれはできることでしょうか。エグザンドル皇国が彼が將軍に就いた後敗戦した回数は16回。この16回の戦闘でそれらしい死者を出さなかつたのですぞ。それも殿という敗戦時は一番危険な部隊が！」

「む！」 「なんだと．．．」 「馬鹿な．．．！」

「．．．理由は簡単。それは彼がたくいまれなる才を、もしくは非常に努力して得た力を持つていたということです。特に、指揮が！」

「そうか、それで」

「はい。故に彼は先代の皇帝に重用されましたし領土も栄えました。ですが．．．」

「現皇帝はその素質を見抜けなかつた．．．というわけか」

「ハイ。ちょうどその折皇帝の主催する世界各国を集めたパーティーがあつたではないですか」

「うむうむ、あつたな」 「あれは素晴らしかつた」

「そこで彼に会つてきたのです。既に領土はかなり削られていました。そこで彼は自分の息子に己の全てを叩き込んでおつたのです」

「．．．」

「お分かりになりますか？それがあそこにいるのです。おそらく、父と同格、あるいは超えた者が」

「それは．．．」

「どうか分からないではありません。分が悪い。一度ルクスの演習を見ましたが見事なものだつた。まるで彼の部隊のみに羽が生えているようだつた。あれは．．．純粋な武力やただの策ではまったく歯が立たない」

「でも．．．それは特別にその部隊が強いだつたんじゃない

でしょうか？」

「いや・・・ほとんど新兵といってもよさそうな部隊だった。剣の斬撃や槍の突きなどをみれば分かる。あれは特別な兵だ。つまり、新兵も動き易くなる程の指揮だったというわけだ」

「……………」

「ご理解いただけましたかな？」

「あ・・・ああ。もちろん」

「だが、それを何故あの場で言わなかったのだ？」

「ここにいる方々は私の言葉を聞き、かつ真摯に受け止めてくださった方達だ。あなた方だからこそこの話を信頼したのですよ。先の場で今の話を言って御覧なさい。ほとんど信じぬでしょう。ただ友を庇うためのホラだとしか思われませんよ。・・・それに、そのような者達は一度痛い目に合わねばならない。あの者達は、ドゥーン伯爵はともかく皆が絶対に勝利するという眼をしていた。だが、戦に完全なる勝利なぞありえないように、絶対なる勝利の確率なんてものはありません。そのことを分かってないようでは…………この先にはいらない！」

「……………ふむう、確かに……………」

「……………では、そろそろ準備を始めましょう。万が一の為に少しだけ離れた場所にいきましょう。壊滅状態に追い込まれたときに直ぐに救援に行けますので」

その言葉にだれも異を唱えることはなかった。

ゼフェス国陣作戦会議

ダンザ

ン国陣作戦会議

「では、これより作戦を言います。今回の指揮は……………では、これより作戦を言っ！」

僭越ながら私、メヌスが執らせていただきます」

誰もが自信の

目に満ち溢れている。そんな

今は誰もが魔族にしても人間にしても若い青年

中、ドゥーン

は朗々と響き渡る声を出した。
を注目していた。

「おお！」

「まず、相手はドゥーン伯爵。おそらく彼は今回
！」

「ついに！」

策という策は使わないでしょう。理由はここが平
！まずは考えている陣は3つ

「では始める

原であるため故に、陣形を崩すことが主点になり
有利を生かして1つの陣に絞った」

あるが、数の

ます。この場合彼がとると思われる陣形は3つ。
しかし今回は十中八九この陣で来ると思われま
す」

「それは？」

そう言つてメヌスは卓上の駒を動かし、陣を形成
見直し、言つ。
していく。

一度將軍達を

「いわく・・・両翼の陣」

「両翼の陣だ！」

そうして現れたのは天使の翼が広がるような陣。
まさしく背中から生えたような翼の形をしている。
「待て！何故お前にそれが分かる！」

「私は仮にも貴族でした。弱小とは言え、昔は栄
えていたので各国の主要な將軍の情報は入つて
きます。そこに私の考察をいれ、判断しました」

「む！・・・だが考察などで「でなければ！」

「私は元からここに来ていません。見ず知らずの
者に命を預けるなんてありえない！・・・とお思い
の方がほとんどと思われませんが、・・・どうか私を
信じてください」

納得が言つたかどうかはともかく、場は一旦納ま
りを見せた。

「続けます。この陣と考えた理由は2つ。まずはここが平原であること。こうなれば、敵も小細工を使えませんし、まともな策も展開できない。故に、厚く、そして必要箇所を広がるこの陣は正にこの場合の『理想的』すぎる陣。2つ目は、敵が大軍であること、この陣は手駒が多ければ多いほど圧倒的な威力を発揮します。後ろに回りこむ確立がグンと増えるのです。そしてその間に何の準備もしていない軍は翼に挟まれ、さらに後ろからも迫られる。・・・ご理解いただけただけでしょうか？」

見渡せば、誰もが感心していた。

「そして、2つと言いましたが実はもう1つ理由陣！」

「両翼の

があります。ただ、現実から確実に見て取れる、

「成る程・

・
というものではないので補足説明としてお聞きく
とはいえ魔族、及び魔物。万全

「敵は寡兵

ださい。ドゥーン伯爵は戦に出れば必ず勝つと言
て挑まねばならぬ！故に、平野
われているほどですが、私はいしたものではありません
地形で数を存分に活かす陣にし

の準備をし

いと確信しています。まず、その戦自体が小競り
合いのようなものですし、相手は魔物や山賊。そ
の分、本当に戦術を理解している敵とは出くわさ
なかったはず。故に彼は定石の崩し方が分からな
い」

た！」

「・・・どういう意味だ？」
バラモンがいぶかしげに聞く。

「確かに、陣を立て、その弱点、長所、特性、そ

これらの知識は十分に持っているでしょう。しかし陣や策には必ずとは言いませんが、その弱点を凌駕するいわゆる破壊箇所があります。そこが分からない。なぜなら強い者と戦ったことが無いから

「ふむ。成る程な」

「……さて、では、この陣の崩し方の策を言

「敵

はおそらく兵をどちらかに一点集中させます。全軍の中から足の一番速い者や乗り物の方を回り込んで迎撃するはず

せるか、片

300程かき集めてください。ちょうど……」

だ。

だが、先鋒は気にせず後ろに回りこ

そういつてメヌスは両翼が開かれた真ん中の位置

め、速やか

にだ！敵は空や地中からの攻撃がある
手前を指し示す。

が今我々の飛竜部隊は南に遠征して

「ここです。」

いるのだ！よいか！」

「！真ん中を突っ切るつもりか！？」

思わずカザンが立ち上がり叫ぶ。

「はい」

「馬鹿な！！それでは挟撃されるぞ！やられ方のお手本ではないか！」

「……そう思うでしょう？ですが意外とそうでもないんですよ」

「なに……」

「この真ん中は確かに危険ですが、その分大きな穴ともなる。ご心配なら實際例を挙げましょう。東の大陸の国々、および遊牧民族にこの陣を仕掛けるのは自殺行為と噂されています。理由は単純。ヤタ大

陸の馬は非常に頑強かつ足が速いからです。故に敵が挟撃する前にすり抜けて、その先の総大将を狙う」

「……なんと……」

「この陣の崩し方の定石は、あくまでも人間を主点としてなっています。陣を考案したのは人間が先といわれていますからね。ですから、定石外のことをする。これぞある意味定石です」

「……」

「そして、可能であればその先の將軍達を消していく。すると面白いほどに士気が下がる。敵がどれくらい後ろにいるか分かりませんからね。そうして道を空けておけば後は逃げるのを見ればいいだけです」

「……決まりだな」

「はい。ちなみにお披露目として私も真ん中に行きたいと思いますが、……宜しいでしょうか？」

しばしバラモンが目をつぶった後……

「良いだろう」

了承した。

「有難うございます。ちなみに他の陣が来た場合もご心配なさらず。この真ん中に速度重視の部隊はあとの陣にも応用が効きますから。あ、地中を移動できるもの達も敵の後ろより少し手前に出現するようにしてください。合流して当たりたいので」

作戦会議も終わり、いざ出陣！と勢い

そうしてい

よいよ話が終わり皆が位置に付きに行こう

込んだ空気が散乱

する場で、

とすると、

「聞け！！皆の者！！」

「皆さん……」

一時騒然となった場が再び静まる。

メヌスが静かに卓上に手を置きながら言った。

「この

戦！我等の勝ちだ！！」

「……この戦、何が起きようと我々が勝ちます」

絶対

の自信と不屈の精神をその目に湛

え断言したのであった。

ドゥーンは高らかに声を上げた。

ドーン！

開戦の火蓋が切って落とされた。

ワアアアアアアアアアア！！！！

グウオオオオオオオオ

オ！！！！

ダンザン国軍の方は素早く陣を構成し前進してくる。

それに比べゼフェス国軍は横に広がって陣形も何も無い。

ダンザン国軍本陣

（いける・・・いけるぞ！！）

後方の本陣からドゥーンはやや興奮気味にそう思っていた。

（我が軍の士気は高く、陣に不備は無い！！・・・敵の陣が少しきになるが、だが！もう既に両翼の陣を崩せる動きはできない！不可能！不可能だ！！）

徐々に総指揮官でありながら顔が紅潮してくる。

（この戦・・・勝った！！）

ゼフェス国軍奇策部隊

（・・・そろそろか・・・）

メヌスは片手を挙げる。

するとどうか、前の魔物の群れが2つに分かれ、敵の陣が見えるよ

うになった。

中央がこれ見よがしに空いている両翼の陣。

(・・・行くか)

「・・・それでは、カザンさん、・・・お願いします」

「うむ。・・・行くぞおおおおお!!」

オオオオオオオオオオオオ!!

ドドドドド

ドドド!!!!

そしてゼフェス軍最速の部隊が駆けて行った。

ダンザン国軍先鋒部隊

「お・・・おい、なんだあれ!？」

「向かってき・・・え?真ん中に向かうぞ!」

「どうする?どうする!？」

どよめく中、部隊の隊長が叫ぶ。

「うるたえるな!むしろ通せ!左右から挟撃するようにするのだ!

!けして手を出すな!」

「そ・・・そうか」

「よし、少し空ける!」

先鋒部隊は道を少し空けた。

皮肉かな。この判断がゼフェス国軍の勝利の確信をさらに高めることとなる。

ゼフェス国軍奇策部隊

カザンは愛用の狼に乗りながら左右を見回す。

(ほう・・・本当に避けていくぞ・・・これは愉快)

心の中でほくそ笑む。

そんな中敵の中陣にさしかかろうとしていた。

(・・・ここからだ。・・・ここからが本番)

「さああ!皆!ここからが戦だ!走れえええええ!!!!」

オオオオオオオオオオオオ!!!!

さらに部隊は加速する。

ダンザン国軍本陣

(ん・・・な・・・なああ・・・)

ドゥーンは自分が見ている光景が信じられなかった。

敵の少数の部隊が陣の真ん中を信じられない速度で突っ切ってくる。その速度に味方は追いつけない。視認すればもうすでに遠ざかっているのだ。

両翼の陣が真ん中から塞がっていく。

(こ・・・これでは・・・もはや陣などではない！！いや！それよりも！！)

敵は既に本陣の目の前まできている。

(もう弓は使えん！)

「盾だ！！盾部隊！前へ！！後ろに槍！迎撃準備だ！！」

しかし急な敵の出現によりうまく統率がとれない。

(ツク！もう・・・間に合わん！)

敵が防御か攻撃かに迷っている本陣に食らい付くのを見ているとき、彼はただ先程のことを回顧していた。

「これから、いや、今も世は乱れる。そんな中、貴公らのようにたいたした実力もつけていない者が上に立つというのは真の実力者に対して無礼と言うもの。・・・ならばここで消えた方が良くも思っただまです」

(セルン・・・)

そして後は何も考えず剣を握り、敵に備えた。

ダンザン国軍奇策部隊

ズジャツ！

5人目の敵を剣で切り裂く。

ジャン！

右からの敵の顔をを爪で切り裂いた。

(・・・ここまで・・・ここまで効果がでるのか・・・)

彼は目の前に広がる状態が信じられなかった。

「グオオオオ」 バグン!

ぎゃああああああ!

「□□□□□□!」

ピュピュン パン

パン!

「纏まれ!まとま・・・ザン! バツダンガダン

少数ながら明らかにゼフェス国軍が押していた。

もちろん魔物が人より強いということにも理由はあるが・・・

(これは・・・恐れている・・・やはり陣を崩したことが効いたか!)

今敵のかつて両翼の陣であったものは奇策部隊とゼフェス国軍本陣により進軍するか救援するか迷っている状態だ。

(ここで一気に決着をつければ!!)

ちよとど視界に辺りの兵とは違う鎧の人間が入った。

「もらった!!」

一気に間合いを詰め、敵の首を刎ねる。

「なっ・・・ザシュ! ドタツ・・・

(・・・弱いな・・・)

と思った矢先。

ブン!

(又ツ!)

慌てて飛び退る。

「食らえい!」

素早く剣を退き再度斬りかかるうとしてくる。

(ほう・・・なかなか・・・!)

一瞬、時間が止まった感覚がした。

(・・・狙われている!?どこだ!)

自分が今できるだけの視界を確保する。

目を見開き、0・01度の単位で左右に動かす。

(今見てるだけで3人狙っている!なんと!私だけか!)

彼が瞬時に思ったとおり3人が彼を狙っていた。

1人は少し土地が高くなっているところから矢をつがえている。

1人は今まさに先程剣を振り上げてきたものと連携するように右から槍を繰り出そうとしている。

（これは・・・捌ききれぬか！）

ならば右腕をと多少の犠牲覚悟で動こうとするが・・・

スバン！

槍を握っている將軍風の動きがグラついた。

同時にその後ろにいた影が動きさらに剣を振りかぶっている者ののどを狙い持っている剣を投げた。

その後さらに槍が落ちる前に掴み取り、投げる。

カザンはその一連の動きを見つめ、そして槍の行く先を見た。

己を狙って弓矢を放とうとしていた者がくず折れた。腹には長槍が突き刺さっている。

「いや、危なかつたですね」

そこには少しの緊張は見てとれるものの軽く笑っているメヌスの姿があつた。

「・・・ああ、助かつた」

「こう言つとあれですが、気をつけてください。貴族とはいえ手強い人達が集まっていますので」

「ああ」

實際命の危険を感じるほどではなかつたが・・・、

（あの連携は見事だつた）

そしてもう既に遠くで乱戦に身を投じている金髪の青年に目を向ける。

（だが・・・本当に見事なのはあいつ・・・。この混戦の最中私の危機を救い、そして今回の策を立てた・・・）

後ろから近づくと人影を振り返りもせず軽く後ろに爪を振って撃退する。

（・・・この戦・・・）

彼の口には知らず笑みが広がっていた。

(・・・勝ちだ・・・！)

そうして雄叫びをあげながら自信もまた戦鬪に身を投じた。

メヌスはカザンを助け出したあと辺りをくまなく探索していた。

もちろん近くの危機には駆けつけ、向かってくる敵には武を振るう。

そんな中彼が探しているのは・・・

(・・・いた)

目の先に見据えるのは・・・將軍。

近くの落ちていた槍を拾い、投げる。

それだけで遠くの敵の將軍は真の敵を見据えず息絶えた。

彼は今將軍を狩っていた。

そうすれば敵の士気は下がり、実力者は消えていく。

陣は崩れたとはいえ、それはあくまでも数の有利を最大限に活かす

方法を封じただけ。

押し込まれれば負けるのは必至だ。

それまで・・・『恐怖』を植えつけなければ。

そうこうしている間に彼はいよいよこの戦に大詰めが訪れたと感じた。

ようやく敵の総指揮官、ドゥーン伯爵を見つけたからだ。

ドゥーン伯爵

彼は焦っていた。

一時本陣の退却か、それとも現状維持か。

たとえ奇襲は受けたとはいえその数は不明。

だがだからこそ勝機がある。

(敵はそう多くない。あの陣を突破するほどの速さを全てが持っているわけではない)

落ち着いて対処する。

(それが勝利への道だ)

そう、それが普通の戦ならば、

「……ドゥーン伯爵とお見受けする……」

唐突に声がした。

右斜めを向く。

金髪の青年がいた。

「……私の名はメヌス・アルバンテ。……いざ」

「……」

(こやつが……)

ドゥーンは思わず身震いする。

それは恐怖か、それとも武者震いか。

「……まずは、素直に感嘆せねばならないな」

「恐れ入ります」

「……一応聞こう。我が軍に下るつもりは？」

「……毛頭」

「そうか」

(予想していた)

「なら」 ザッ

(ここが大詰め)

「ええ」 スッ

お互いがお互いを見極める。

(ここが……分かれ道!!)

「ぬああああああ!!」 「……せえええい!!」

ガゲン!

ギイン!!

・
・
・

「……」

ワアアアア

アアアア

△それが原因です。△

キン! ガ

シャン!!

喧騒が聞こえる。

「・・・・・・・・・・」 グラッ

「まだそうは言っていないが、そうだ」

「・・・・・・・・・・」 トン

「貴公らのようにたいした実力もつけていない者が上に立つというのは真の実力者に対して無礼と言うもの。・・・ならばここで消えた方が良かったまで」

（ああ・・・）

「貴様はまだ31だ。まだまだ小童だよ」

（私は・・・小童・・・か・・・） ドサッ！

そこで、ドウーンの意志は途切れた。

メヌス・アルバンテ

（・・・中々・・・太刀筋は手強かった。惜しむらくは経験・・・そして知識・・・）

メヌスは経験が乏しい代わりに親譲りの莫大な知識と審美眼がある。それにより経験を補っているのだ。

（だが・・・）

ドウーンは経験も知識も中途半端であった。

（・・・・・・・・さて）

深呼吸をする。

「敵将！ドウーンを討ち取ったぞおおおおおおお！！！！」

「高らかに戦場に響いた。」

「なあああ・・・・・・・・ドウーン殿おおおお！！」

「そんな・・・伯爵様が・・・」

周りの騎士や将軍は目の前の光景を信じられずにいた。それが各地に伝染し、少しずつ恐怖へと変わっていく。血を流す総指揮官。

一瞬、辺りを静寂が包んだ。

.....

「た」

誰かが声を上げる。

「退却うつうつうつうつうつ！！」

ワアアアアアアアアアアアアアアア！！

次々と前線から離脱していく。

前の陣もじりじりと後ろに下がり始めた。

「さて、我々はどうする」

いつの間にかメヌスの横に来ていたカザンが問いかける。

「そうですね、このまま横に退いてもよし。若しくは敵を引き付けながら国境から出して我々は脱出するという方法」

「ふむ。そうだな.....」

「まずはその前に.....やはりケリは付けておきますか」

そう言つてメヌスはドゥーンに再度剣を振り下ろした。

ギイイイン！！

剣が弾かれる。

弾かれる前にメヌスもカザンもどこから、そして誰が槍を飛ばしたのか視認した。

「.....久しぶりだな.....小僧」

「.....お久しぶりです、セルン様」

そして十年来の知己の様に微笑み合った。

「.....流石ですね。気付いておられましたか」

「フン！筋肉や目を見れば分かる。まだそいつは生きているんだろ
う」

そう、メヌスはドゥーンを殺してはいなかったのだ。

「いやいや、ばれましたか.....。情報を取ろうと思っていたのですが、あなたの気配を感じましたね」

「……ま、良い判断かどうかは分らんな」

「そうですね。……私もまだまだ甘いかな？」

「……さあ……な」

そして双方共に押し黙ったところ。

「その方がセルンか？」

カザンが口を開いた。

「おお、その通り」

「お初にお目にかかる。カザンという」

「これはご丁寧に。セルン・ヴァン・コリディアムと申す」

両者は互いに意味深な視線を交わした後

「……こう話した後では……あとで戦いづらいですな」

「そうですねあ。……ところで、その青二才を引き取っても構いませんかな？あ、その前に」

そうして、もう奇策部隊の直ぐ後ろまで来ているダンザン国軍に体を向ける。

「止まれえええええええええええ！！！！」

ピタッ

全ての動きが止まった。

「これ以上の戦は無用！これより総指揮官引き取りの交渉をする！残るものは残ってよいが……」

そこで目をギラつかせる。

「もし何かした場合……迷わず腕を斬りおとすぞ」

そこには老練な武将の迫力が溜まっていた。

一時停止していた軍は奇策部隊を大きく迂回し、その中から幾人かの将軍が近づいてくる。

「セルン殿！これは一体……！」

彼もこの状況を見て取って自体を把握したようだ。

後からついて来た者達も同様のようである。

「……では、始めよう。貴殿らは何を望む」

「……誠に勝手ながらカザン様、時間が無いので私が申ししても

よいでしょうか？」

「・・・ああ、構わん」

「ありがとうございます。では言いましょう。ダンザン国との永久不干渉」

將軍達がざわめく。

「そ・・・それは・・・」 「しかし・・・それでは伯爵が・・・！」

「・・・却下だ」

「な・・・」 「セルン殿！」

「黙れ！！」

しん、となる。

「今更なんだ！貴様等は！戦争に出たからには利害で考えろ！！何を習ってきた、このひよっこ共め！」

「し・・・しかし・・・」

「2年の不干渉。これでどうだ」

「・・・そ・・・それ「ならどうすれば良い！？黙ってみている！事態は備微妙なのだ！」

黙り込む者が続出する。

「・・・いいでしょう。それで手を打ちましょう。カザン様もそれです？」

「ああ、いいだろう。」

「・・・感謝する」

そして血を少しではあるが流し続けているドゥーンを担ぎ上げる。

「・・・無駄だと思うが訊くぞ。こちらに来ないか？」

メヌスは何も言わずただ首を横に振る。

「そうか・・・。それではな」

そうして後は互いに何も言わずに立ち去った。

ダンザン国軍

ガタガタ カポカポ

馬のくつわの音や歩兵の歩く音が響く。

この戦い、振り返れば意外と戦死者は少ない。

その分将が多く散ったのだが。

そんな中静かな声が聞こえる。

「なぜ・・・置いて行かなかったのですか・・・」

少し苦痛の響きが聞き取れる。

「・・・だからお前はまだ青二才なのだ。ドゥーン」

馬上にいるセルンと肩に担がれているドゥーンであった。

「私なぞ・・・小童なぞ放っておけば・・・」

「お前はだから青二才なのだ。戦には利害がある。お前を取れば利の方が勝ると私は考えた」

「そんな・・・こんな・・・小童なん・・・ん？・・・セルン殿私のことを・・・青二才・・・？」

「やっと気付いたか。そうだ、もうお前を小童とは呼ばん。お前は今回の戦で一皮向けた。それで十分よ」

「・・・」
「よく覚えておけ。基本は大事だが、それを打ち砕く術が先の人々の類稀なる才によって生み出されたことを忘れるな。ならばさらに基本を磨き、その術を打ち砕け！いいか！基本に勝るものはない！基本が敗れるのはそれが基本ではないからだ！その基本を見つけれ！！」

「・・・は・・・！」

「上出来だ・・・少し重い経験だったかな。」

そうして後はすすり泣く音が聞こえてくるだけだった。

ゼフェス国軍

「・・・メヌス・アルバンテ！以上の功により貴殿をゼフェス国参謀長とする！」

広い館の一部屋にゼフェス国の主要な者達が集まっていた。

「ありがたき幸せ！」

そうしてメヌスはダンテから参謀長の勲章を貰う。

「・・・うむ。この国に・・・尽くしてくれ」

「この命に代えましても!!」

パチパチパチパチ!!　　パチャパチャ!　タダンタダンタダン!
あちこちで拍手や『何かを打ち付ける』音がする。

ひとしきり喝采が続き、それが静かになった後

ダンテがおもむろに立ち上がった。

「皆!此度は良くやってくれた!今日は存分に進め!」

一言区切る。

「次からだが、しばらくダンザン国とは戦時下にならないだろう。

彼等は武の国。口約束とは言え守るだろう。よって、国内の再編にかかることができる。もちろん敵はあとからあとから来るだろう。

だが、我々はそれを乗り越える!皆、私に力を貸してくれ!!」

オオオオオオオオオオ!!　　ギユゴオオオオオオ!!

その晩、宴が夜通し行われたのは言うまでも無い。

第11話 一人目の選抜者、魅せる（後書き）

いかがでしたか？

ちよつと中間が読みにくいと思つた方。

すいません。もうしません。

たぶんやる気力がもうでないと思つ……。

臨場感を出そうと思つたのですが……それどころじゃありませんね。はい。

それではまた。

第12話 重い才（前書き）

いやあ、長かった。

あまりにも普通の内容だからどう美化しようかと悩んでいたらいつの間にかこんな時期に……。

第12話 重い才

見渡す限りの草原が続く中、開拓された道をただ1人、青年が歩いてきた。

彼が歩いている大地はクセア大陸に属している。

つい二日前に『魔王』と会ったばかりのランディの心境はというと・

別段どうも感じていなかった。

(ま、世の中そういうこともあるさ)

そんな精神状態である。

器が大きいのか、のほほんとしているのか、・・・おおらかなのか・

そうしてもう5時間も同じ所をグルグルと歩いているような錯覚に見舞われるような道が続く中、

(・・・そろそろソドン領だな～・・・)

遙か向こうに民家らしきものが見えてきた。

(しっかしホントに寂れてるな・・・)

セイブ領から離れ、およそ5時間。

通常、領が違うとしても民家がこれ程離れることは無い。

つまり、こんなに離れているのは・・・異常、ということである。

(没落した貴族・・・か)

正確にはまだ没落してはいない。

しかし全盛期の先代と比べると土地も、これはおまけです、というほどのものしか残っていない。

領民がわずか18人しかいないということもあるいみ驚異である。

(・・・不憫だよな～)

そんなことを思いながら少し歩調を速くして歩いて行く。

ソドン領ソドン村

(・・・)

村が始まる道の端にそんな看板が立て掛けられている。

(・・・なんつうんだ、これ。・・・どうすんだ、これ・・・)
領だというのに同名の小さな村があるだけ。

そのくせ看板はつい今しがた磨き、洗ったようにピカピカと(木材
なのだが)している。

(寂れてる、って聞いたんだがなあ・・・)

そうして一步を踏み出した。

地を踏むごとに革の靴から足裏に固い、しっかりとした感触がする。
よくならされているようだ。

建物は目に入る範囲でだが、どれも奇麗だ。この分だと中の小物ま
で輝いているのだろう。

家々を取り巻くように畑が広がり、意図的に植えられたと分かる果
樹に実が実っている。大衆的なサグアだ。そのくせ光に当たる薄緑
色の淡い光沢は無性にかじりたい衝動を与える。

見た感じ、寂れているような感じはしない。むしろ地方の都市より
清潔だ。そのくせ生活感があちらこちらに漂っている。

(この領主は若い、って聞いたけど・・・大分実力があるのか
なあ・・・)

真つ先に領主に訪問するのもなんだか失礼なような、奇妙だがこの
村に馴染んでいないゆえの疎外感からか、まずは領民に話を聞いて
いこうと思ひ、近くの酒屋に入った。

カラン・・・

「ッ、いらつしゃーい！」

一瞬、店内の喧騒が止まった。

そして、新たに入った客を見ると、

「いらつしゃい！旅人さん！」

「ようこそ！」

「ひさしぶりだなあ〜」 「ああ」 「何週間ぶりだ？」 「いや、

3ヶ月ぶりじゃね？」

先程より大きな喧騒となる。

「はいはい、皆静かにしてくれよ〜」

店の主人らしき人物が場を治めようとする。

いささか奇妙な間延びをする声だ。

「おいおい、そりやねえだろ！久しぶりの旅人なんだぜ！」

ランディから見ても、カウンターの前から2番目の右のテーブルに座っている一人の客が声を上げた。

「ああ、そうだな〜。でもそのダミ声で叫ばれるとそのお客さんが他に取られちゃうから、そんな時は賠償金な〜」

「な！賠償金！？おいおい・・・俺とお前の仲だろ〜」

「20万セムな〜」

「なっ！20万って・・・ぼったくりすぎだろ！！！」

店内に小さい笑いの渦が起こる。

どうやらふざけ合っていたらしい。

「さて・・・と、いいかげん客が逃げそうだからこれくらいにして・・・。改めまして旅人さん、ようこそ」

その言葉に応じてランディはカウンターに座った。

「こんにちは。良く俺が旅人だと分かりましたね」

「そりやあそうさ〜、もう商人も寄らないからね〜。ここら辺で見ない人は旅人になるのさ〜」

「なるほど。そんなにまずいんですか？」

「まずいね〜。といつても暮らしがじゃないよ、昔と比べて、ってことさ」

「へえ。昔は良かったんですか」

「ああ、良かったね〜。なにせ今の20倍は領地もあつたし、しっかり稼げたからね〜」

「・・・善政、てことかな」

「そうだね。そうだったよ・・・」

「だった・・・ということは今は・・・」

「ああ、いやいや！別に今が悪いわけじゃないよ。立派にやっつく

れてるさ〜」

「そうとも！でなきゃあ皆こっから出てるよ！」

2席横の客が合いの手を打つ。

「生産高やもろもろのことを考えりゃあ、比率的には昔とそう変わらねえのさ。こんな領地でも他に援助ができるんだぜ」

「へええ〜。そいつはすごい」

「自慢の領地と領主様さ！」

「まあね〜。ウチの自慢さ〜」

「・・・聞いちゃあ悪いと思うんだけど、どうしてこの領はこんなに？」

「先代が何かやらかしたらしいんだよな。まあここに住んでた奴等はそんなん信じちやいねえけどよ」

「詳しくは・・・どういう・・・」

「いやまあ、元々先代は外からいろいろ言われてる御方だったんだ。逃げ將軍！、とかなんやかや。だが、俺達商人や農民、・・・まあ誰にとつても言える事だがそんな事は別にどうでもいいんだよ。そうだろう？領内は安定。治安もいいし、そこらの領より肥えている。自然、生活も良くなるし、経済も高まる。いい事尽くめだ。そんなことをしてくれる人になんの文句がある？むしろ恩の字さ」

そこでビンの酒を一口飲み、

「それも当時の皇帝から好かれていたようでよお。いろいろ珍しい品物も貰ったのさ。領主の館、・・・つっても今は単に家だが・・・まとにかく、そこに一回寄ってみな。庭にハダバの花がうえられてるからよお」

「・・・。ハダバの花が・・・」

軽い驚きが身を駆け抜ける。

通常、ハダバの花は手入れは困難ではないが入手が限られている。というより、クセア大陸唯一の国、エグザンドル皇国建国時に始祖が最初に決めた土地に咲いていた花がハダバだったので国花となり、今はエグザンドル皇家の親愛の証として送られなければ世に出てこ

ない王室管理の花である。もちろんもらった人間はその信頼に応え市場などに一切出さず、家門の誇りとして家の近くだけで栽培するようにする。むろん警備は厳重。

そういうことなので、ハダバの花はとんでもない栄誉の証なのである。ちなみに今までに送られたのは王家直属の者達と数人の外部の騎士、領主達だけらしい。

「そうとも、だからおれらも誇りに思っていたのさ。周りからなんと言われようと、見ろ！おれらの領主様はこんなにも信頼されている！、ってな。．．．だがよお、どうも先代が亡くなってから雲行きが怪しくなってきた。現皇帝からはお呼び出しもそんなにくらわないようになってきたし、やっと呼び出されたときたら国政の利益を一部横取りしたってことで審問だ。あれよあれよの間に処刑まで決まって．．．また領地に戻ってきたらあの人なんて言ったと思う？」
「すまない、もうこの領地を育むことは無理なようだ。本当に申し訳ない」、だぜ！泣いたよ．．．俺はああ．．．。今までどんなにこの地を良くしてくれたか．．．なのに処刑だぜ．．．！」
気付けば店内は静かな、しかし啜り泣きが聞こえるようになっていた。

しゃべっている客も酒の飲みっぷりが哀れを誘うような感じになっている。

「嘆願書も出したよおお．．．けど、どうなったかすら俺等には分からなかった！結局領主様は死んで、フグツ！、．．．殺されて．．．その息子が今じゃあこんな頼りない俺等の領主さ。それでも俺等に良くしてくれてる．．．。そんな人から．．．離れられるかよおおおお．．．。」
ガダン

遂には机に突っ伏して寝てるんだか泣いてるんだか良く分からない声をあげる。

その後を引き継ぐように店主が語る。

「今じゃあ人も少ないが、ここを出て行った人達はほとんど全員が

くじで決めたのさ。誰もが残りたいと言っていてね。でもしよ
うがないさ、土地が足りないからね」

「・・・悪いね、嫌な、っていうか・・・その、思い出せちゃって
「いいさ。・・・もし良かったら、領主様に会って言ってくれよ。
あ、前のじゃないよ、今のね。やっぱり、同い年の若者もそんなに
いないからさ。まともな話し相手がいらないんだよ」

「ああ。そのつもりだ」

「・・・フフ」

「ん？」

「いや、面白いね、旅人さん。さっきまでは丁寧な口調だったの
に今はタメ言葉だよ」

「ああ、そのこと。礼つてものは必要だろ。誰にだって親しげな口
調で話すのはいいが、まずは丁寧な口調から、っていうのをモット
ーにしている」

「成る程ね。いいことだよ。最近は友達口調だとなんでもかんで
も感じいい、って思うようだけど、やっぱり初めは礼儀からだよね
え」

「ああ。俺もそう思う。ま、慣れてきたらこういつ口調にするよう
にしてるよ。堅苦しくなくなるし。」「おや、素ではないのかい」
「どっちも俺だよ。口調が違っただけさ」

「ふん」

「・・・それじゃおいとまするよ。あ、酒を小瓶に詰めてくれるか
？一番安い奴」

「おお。毎度あり！」

そうして安いが酔える酒には違いのないものを貰い、店を出た。

・
・
・

「成る程、確かにハダバだ」

目の前には凶鑑やシャイアで見た花が咲いている。

ここは場所を移して領主の・・・家だ。
それは家としか表現できなかった。壁は木、窓も上質なガラスではなく、鉱物の結晶を薄く切ったものだ。必要最低限の明り取りにしか使えないだろう。
どちらかといえば粗末な『民家』だった。
戸口の前に立ち、軽くノックする。

「はい、どなたですか？」

ドアが開き、青年と呼ぶには少し成熟している若者が見えた。
金色の髪は肩口で自然にそろえられ、淀みの無い青色の目をしている。

(背は俺より高いな)

「・・・？どちらさまでしょうか？」

声は澄んでいる。

「・・・あなたが、この領主様ですか？」

「はあ・・・そうですが・・・」

対する相手はキョトンとしている。

「旅の者ですが、せっかくなのでお話をしよう。構いませんか？」

「・・・ええ、構いませんよ」

そうニッコリ笑い体を横にズラした。

「どうぞ」

「では、お言葉に甘えて」

家に入ってまず思った感想は、民家。

特別な家具など一切なく、無駄が無い。しかしそれは冷たい、というより本当に必要の無いものだけをばぶいている感じだ。
そんないえに住んでいる相手は茶を淹れようとしている。

「紅茶で構いませんか？」

「？紅茶・・・あ、ああ、成る程。はい、構いません」

「おや？『紅茶』、という単語を知っているということは他の茶も知っているのですか？」

本来どこの大陸でも、茶、といえは紅茶なのだが、東のヤタ大陸では他に緑茶などがあるようでそのことを言っているのだろう。ただし、普通はそんなものは知らない。紅茶と違い、なぜかヤタ大陸の茶は非常に高いのだ。限りある、というといささか小さいが選ばれた人間しか知らないという品だ。

「まあ、知識としては」

「ほほう。流石ですね。それでは」

容器から薄茶色の液体が注がれる。

「紅茶といってもそこらで摘んできたものです。市販のものより香りが少々濃いだけの粗末なものです、どうぞ」

「これは、どうも」

一口飲むと確かに一般のものより香りが濃い。

「おいしいです」

「ありがとうございます」

そうしてしばらくお互い茶を啜っていたが。

「では、自己紹介を。メヌス・アルバンテ」

「ランディ・ケルト」

「それで、話とは？」

「いえ、そんな大層なものではなく、ただ世間話でも、と」

「父のことでしょうか？」

「・・・まあ、それもありますね」

「理由をお聞かせ願っても？」

「・・・大変身勝手且つ分別のないことですが、・・・興味、その一言に尽きます」

「ふむ」

「領内から信奉厚いが、戦場では侮蔑され、でもなぜか部下からの信頼は厚い。・・・どんな人が興味がわきます」

「・・・立派な人でしたよ。家族の目という観点から除いて見てもただその言葉が似合っていた」

「聞いています」

「まあ、その分だと領内でいろいろ聞いたようですから、政治の詳しい所は省きましょう。私がいとおもっている点は、主に戦場でのことです」

「へえ」

「父は逃げ將軍だと言われていましたが、それは「そのことなら知っています」

「・・・おや・・・」

「実はシャイアでも話を聞きましたね。まあ、向こうもこっちが信じてくれようとは思っていないさそうな話し方でしたけど」

「・・・そうですか・・・父の部下が・・・」

「ええ・・・話を聞く限り、すごいと思いましたね」

「それをあなたは信じるのですか？」

「まず、称号がそれを物語っているでしょう？」

「ですが、それが真実とは限りません」

「・・・俺は、いろいろな文献を見してきました。言っちゃあなんですが、これでも・・・勇者なんです」

「!・・・なんと・・・」

「ま、どう思われてるかは分かりませんが。だから、シャイアにいる間いろいろな文献を読み漁りました」

「・・・それで、裏事情、といえは変ですが、真実は分かると・・・」

「少なくとも俺はそう思っています」

「・・・成る程。まずは答えですが・・・真実です」

「・・・」

「・・・見せてあげたかった。あの指揮を・・・」

「ええ・・・見たいと思っています・・・」

「・・・それでは、処刑の真の理由も？」

「・・・反吐が出ますよね。周りの領主が自分達の罪をまだ政治の世界を良く分かっていない皇帝を利用してなすりつけるなんて」

「ですが、あれは明確な証拠は・・・」

「各領の内情などを見れば分かります。．．．反吐がでる」

「．．．」

「．．．そんなことにも気付かない勇者にも．．．反吐が出る．．．」

「」

「．．．ですが、あなたは気付いた」

「．．．まあ、運が良くて．．．決してそう思っではいけないんですが」

「．．．」

「詳しいことはお聞きにならないんですか？」

「．．．あなたは、私を信じますか？．．．もし信じられれば、お話にならずに結構です」

「．．．信じます」

そうして長い身の上話が始まった。

．
．
．

「．．．すごい経験ですね。魔族や邪教を助けるなんて」

「だが、俺は罪を犯した。ま、罪なんてこの世で玉子焼きを作ったら皆被るんだがな。．．命を消すつてのはそんなもんだよ．．．」
いつの間にか打ち解けてランディはすっかり自分の友達口調に変わっている。

だが、メヌスは変わっていない。おそらく生来からこの口調なのだろう。

時間は既に夜に達していた。

「おお、もうこんな時間ですか。どうですか？泊まっていかれては？といつても床かベッドになりますか？」

「そいつはありがたい。床だろうが地べただろうが泊めてくれるだけで感謝感謝だ」

そうして席を立ち上がったその時、
ガダン！

「メ・・・メ又ス様！」

農民の格好をした中年の男が慌しく入ってきた。

「どうしました！」

「夜盗です！東の穀倉地帯で発見しました！作物を奪いながら民家に近づいてきているとの事です！！」

「分かりました！向かいます！！」

「俺も行くぞ」

「・・・協力してくれますか？」

「当然だ」

そう言っただちにもなく飛び出した。

東の民家に近づいてきた。

領自体が非常に小さいのでさほどの距離もない。

「あつ！領主様！」

既に武具に身を固めている兵が見える。

「状況は？」

「まずいです。何よりも数が多すぎます。詳しく確認できていませんが、私の勘だと2千はいるかと」

「2千・・・確かにまずいですね。・・・おそらく近隣の領内から団結したのでしょうか。今現在弱小な領は子供でも分かれますからね」

「この兵力はどれぐらいなんだ？」

「87人」

「・・・そいつあ詳細なことって」

「領主様！民全員が力を合わせれば2百にはなります！」

（それでも2百か・・・）

ランディは苦虫を噛み潰す。

「ダメだ！非戦闘員には退避を！」

「しかし！」

「・・・私に策がある。今すぐ全領民をここに集めよ！」

「・・・はっ！」
そうして兵が駆け抜けていく。

眼下には二百数人の人達が見て取れる。

今メヌスは他より一段高い急ごしらえの台の上に立っている。

「皆さん！突然ですが皆さんを策の一部とさせてもらいます！もし私を信頼できなかつたり、不安な方は遠慮なく辞退してもらって構いません」

が、誰も動くものはいない。

「・・・感謝します。それでは作戦を言います！まず、非戦闘員は夜盗が見えたら東に近い方角に逃げてください！これは夜盗の目を要するにあなた方、『品物』に目を向けさせその隙に各所撃破していくことです！後ろから笛の音が聞こえたらすぐに身を地面に投げてください！後ろから矢を射ます！これですは相手の出鼻を挫き、後は少ない兵力を利用して敵を少しずつ削りながら領内に引き寄せます！そこであらかじめ用意しておいた罠を使い敵を殲滅します！・・・分かりましたか！」

「「「はい！」「」「「分かりましたー！」「「任せてください！」「」」」

各所で声が上がる。

「この作戦は兵ではなくあなた方が要です。非常に重い仕事ですが、宜しく願います！」

ワアアアアアアアアアアアアアアアアア！

戦いの雄叫びが上がった。

そんな中ランディはメヌスに話しかける。

「俺は先に相手の後ろに回っておく・・・一応村には入らせた方がいいんだよね？」

「・・・ええ、そうですね。その方が楽になります」「分かった」

そうしてランディは身を翻して村から出ていった。

(よゝし、いいぜ)
バンドウはほくそ笑む。

(もう少して、落とせる！)
それはどんなに歓喜に震える事か。夜盗が、大きく言えば山賊が領を落とすのだ。

(へへ・・・俺等の夢が叶えられるつつこった。そうすりゃあ・・・)

チラと自分が乗っている馬に目を向ける。痩せこけて、衰えた馬だ。そうして自分の服や武器に目を向ける。どれも三流だ。

最後に畑を荒らしている仲間にも目を向けた。

(・・・こんな生活ともおさらばだ！)

わざわざ近隣の山賊やゴロツキを吸収しただけであったということだ。

「頭あああ！！」

「どうした！」

「あれを見てくだせえ！」

「あん？」

部下が指差す先を見る。

「・・・逃げてんじゃあねえか・・・」

「へい！」

「・・・馬鹿共め！おいお前等！そんなもん後でいい！あいつら全員捕まえる！」

辺りにいた賊が何事かと目を向ける。そしてジワジワと理解の顔が増えていき。

「おおおおおっしやああああああ！！」 「ひいはああああ！」
喚声をあげて走り出した。

「おらおらあ、野郎共！集まれええ！」
次々と部下が走り出す。

あくまでも自分の位置を見定めるバンドウ。めんどくさいことは他に任せたいのだ。

(へっ、楽勝だな！)

そう思った直後、一斉に逃げていた人々が地に伏せた。

(あん？)

少し距離が離れていた彼には知る由も無いが進んでいた賊には甲高い笛の音が聞こえていた。

とその時、

ドサッ

(・・・ああ？)

1人、一番前を進んでいたものが倒れた。

(なん・・・)

ドサッ

考えが纏まる間もなくもう1人倒れた。

それが起爆剤だったかのように次々と仲間が倒れていく。

この時にはバンドウも気付いていた。矢が放たれているということ
を・・・。

(んあ・・・ちっ！計略か！)

夜盗でそこまでの考えに移行できたのは逆に驚くべきことかもしれない。

が、移行できても何もすることはできない。

「か・・・頭！」

横にいた部下が声を上げる。

「退けえええ！！一旦退くんだああ！敵は少数！纏まれば絶対に勝てる！」

その声が届いたかどうか、前方から後退を始めた。

(よおおおし、焦るなよおお！)

しかし急に横手から兵が現れた。

(んお！)

他の出口から出ていた兵であった。辺りは森もなく背の低い草だけ
なのが見えなかったのだ。

いや、気付けなかったというのが正しいか。前方にだけ気を配りす

ぎていたのである。

(ちくしょお！あの馬鹿野郎共！引き付けられやがって！！)
バンドウが行ったとおり、相手が少ないと分かった賊が兵と対峙している。

(・・・おいおい・・・これも策略か？！気のせいか・・・いや、気のせいじゃねえ！徐々に引き込まれてやがる！！)

「お前らああああああ！退却しろおおおおお！！」

実質上誰も倒していないのだが、相手が後退していくという事は自分が優勢だという気が湧き上がってくる。いま前方の部隊はそのような興奮状態なのだ。当然『聞く』ということができない。

「ちっ！」

舌打ちして三流とはいえ愛用の斧を握る手に力を込め、馬に手綱を振るった。

駆け出すと同時に、振り返らずに後ろの部下に叫ぶ。

「お前らはここで待ってる！隊列をみだすなよ！」
パカッパカッ

なんとも弱々しい音をたてながら駆けて行った。

と、後続から少し離れたとき、

(・・・ん？)

妙な、本当に奇妙な感覚がして振り返った。

すると・・・

「ウオッ！」

ガキン！

武器と武器が響きあう。

「な・・・なにもんだ！てめえ！」

一撃目をかろうじて受けたバンドウは剣にしては後ろに沿った武器を手に横手に立つ人物を見る。

「へえ・・・なかなかやるな。第六感が鍛えられてるようだなあ」
平然としている。

(くそっ！なにもん・・・待て・・・こいつがここにいてってこと

は)
相手を牽制して武器を構えながら素早く今相手が来た方向を盗み見る。

そこには様々な形で倒れている部下達がいた。

(こいつ……馬鹿な……この短時間であんな数を……) 後続とはいえ念のため4百はおいてきた。それが……全滅。それも自分が出発して数秒後に……。

(……いや、ちげえ、そんな速さだったらもつとつくに俺はやられてる。つーことは……)

「ハッ！後ろから少しずつ音をたてずにやったってかあ!？」

「おお……よく分かったなあ……」

「……どちらにしろ化けもんにはちげえねえか……くそつ!」

「ふん、お前も単なる賊と比べりゃあ化けもんだな。見てたぜ、すぐに退却を命じれるなんておいそれと気付いてできることじゃない」

「……そいつぁーありがとよ……」

「……そんじゃ、わりいがアンタを倒さなきゃダメなんだ。若しくは……ここで退くか」

(……ざけんなよお……ここまで……ここまで来て……) チラツとまた倒れている部下の方を見る。

(それに……こんなところで……)

「そいつぁ、無理だなあ……」

「……お前なら、もう分かかってんだろ。後ろ向いてみる。民家の集合地帯に入っついで奴等も終わってたぜ」

(分かっつてらあ、んなんは……)

分かっている、分かっているがそれではだめなのだ。

「……ここまであいつらを巻き込んだんだ……ここで退いちゃあ……示しがつかねえええ!!」

叫ぶと同時に斧を振りあげる。

だが、振り下ろすのを妨げるようにランディは素早く敵の懐に潜り、拳で腹を打った。

「グオツ！」

音はしないが体にくる衝撃は凄まじい。一気に力が抜ける。

(ちくしょおおおおお・・・)

霞む意識に部下の姿が映る。

(そうだよなああ・・・倒れちゃあ示しが・・・なあああああ)
グツ

なんとか足に力を入れ、倒れる体を固定する。

「おおう？」

ランディはただ純粹にこう思った。

(なんだこいつ・・・)

体に衝撃が響くように打ち込んだ。普通この程度の相手ならばそこで悶絶するか、意識はあっても倒れたままのはずだ。それがまだ立っていられる。

(・・・ふむ・・・)

自分の目が間違っていたとは思えない。となるとそこまでして立つ理由があるということ。

(ただの賊じゃあねえのか?)

目の前の相手は今度は斧を突くように構える。だがその動きは鈍い。必要最低限の動きだけですむ動きが鈍いということはその分ダメージはある、ということだ。

(ま、どのみち最初っから殺すつもりも無かつたし、まずは終わらせるか)

元々ランディに相手を殺すという選択肢はない。後ろの賊達も全て気絶させてきた。最初のバンドウへの一撃も敵の力量を測ったに過ぎない。反応できたらもう少し力を出して、出来なければ峰打ちで終わらせようとしたのだ。たとえその後領民に殺されても、少なくとも自分が相手をしている相手は殺さないを絶対信条としているのである。

そう考えると瞬時にまた拳をつくり、今度は相手の横に回り、横腹を打った。

(・・・)

バンドウは何が起こったかさえも分からず今度こそ気絶した。

・
・
・

「ご協力、ありがとうございました」

「いやいや、別段大したことはねえよ」

戦は終わり、今は村の広場。捕らえた賊を寝転がしている。牢屋では足りないのだ。

「・・・この人が賊の？」

「ああ、頭だ」

「・・・」

すでにバンドウは起きている。だがその褐色の目は辺りの篝火に反応してかキラついていた。

改めてみると正に山賊風体だ。頭は禿げ上がり、目は右目に縦に裂かれた傷跡が残っている。

体は屈強。筋肉達磨とは言わないが中々の体つきをしている。

「・・・一応仲間から名前を聞いたが・・・名前は？」

「バンドウだ」

「出身は？」

「セント領ナンク村の農民出身だ」

「ふん、こつから北の所だな」

「・・・聞きますが、なぜ山賊、もとい夜盗家業を？」

「それしか稼ぐ手段が無かったからだ」

「ですが、農民だったのでは？」

「・・・なんでもかんでも乞食じゃなかったら将来どうにか食っていけると思うと大間違いだぜ」

「・・・そうですか」

「あんだ、ここの領主か？」

「ええ」

「・・・そうか、ふん、まあてめえが悪いわけじゃねえがやっぱり口惜しいぜ」

「・・・？どういう意味ですか？」

「お前の親父さんの所業だよ。俺とここに集まっているほとんどはそのせいで落ちぶれたんだ」

「・・・。どういうことですか？」

「・・・ま、普通は知らねえよな。あんだの親父は帝都に移送される途中でいろんなモンを少しづつ横領していたんだよ。だが規定値は変わらねえ。しっかり徴収されていく。農民つつうのはよお、普通に暮らすのじゃあ問題はねえが何か起きたらすぐにやばくなる職業だ。たった一度の何割何分の不利益でさえ散るんだよ。それでこの有様さ」

「それで復讐しようとしたのか？」

「ま、一番の理由はそれだ。聞けば俺等が苦しんでる間ここはどんな栄えてたようじゃねえか、え？そりゃあ復讐したくもなるだろうだからここの山賊、ついたらそんな時に落ちぶれた野郎がほとんどだよ。面白いほど一致団結して集めたらこんな数になった」

「それが2千・・・」

「まあ、十数人は違う奴もいるがな。捜しやあもつといるぜ」

「確かに、それは理由になりますね」

その言葉を聞き、バンドウやその周辺にいた夜盗達が声をあげる。

「だろ？」

「そうでさあ」「こっから出してくれ」「そうだそうだ」

「お前等ずりいんだよ！楽しやつて！」「当然の権利だ！」
様々な罵声が飛ぶ。

そんな中、メヌスは困った顔をしていたが、横のランディが静かだがやや怒気を孕んだ声で一喝した。

「うるさい。しゃべるな。黙れ」

ピタツと喧騒が止まる。

「なんなん理由になると思うか？あ？我慢しろようんなん」

「なんだと・・・」

バンドウの声にも怒気が含み始めた。

「そうだろうが。そんな人間この世にや腐るほどいるぜ。皆我慢してんだ、割り切ってたんだよ。自分達はここまでの奴なんだって。どうせ人様に使われる人なんだって。それがどうだよ、お前等は。そんな気さえもねえのか？」

「なんだと！俺等は人間だ！誰に使われるでもねえ！」

「はあ？何を勘違いしてやがんだ？せいじゃあ聞くがお前等なんてこんなところにいんだ？お前等が誰に使われるでもねえんだったら今頃普通に暮らしてるはずじゃあねえのか？使われてんだから他の奴から切られるんだろ。お前も自分で言ったじゃねえか、危ない生活だつて。そうだろう？」

「だけど！「だけどじえねえ！」

「ん！そんなの詭弁だ！」

「確かにそうだな！詭弁だよ！人を使う使わない以前に協力つてい言葉がある！だがよお、今お前等がこうなってるのは協力からくるものか？体よく領から追い出されてんじゃねえか！追い出されるつて事は上に従ってたってこつたる！どうだ！？え！？」

「おい・・・追い出されては・・・同じだろ！自分の意志で出てきたと、こうなつたと思つてんのか！？」

「・・・く・・・う・・・」

「・・・百歩譲つてだ。百歩譲つてまあお前等の復讐の理由が世間様に出せるもんだとしよう。だがそれでどうした？おい、まず普通は復讐なんざ考えねえよ！」

「そ・・・それは力が無いからだ！それに、恐れるからだ！」

「違あああああうー！！」

辺りの空気が乱れる。

「どっかで間違つてると止めてくれる奴や、自分自身がいるからに決まってるだろうがああ！恐れるとかそんな関係ねえ！やる奴はやるんだよ！だが普通はしねえ！そんなん考えりゃあお前等がどんなにふざけたことをしたか分かるだろ！？ああ！？」

「それにだ、お前等の理由がそれだったら今回のことを良い経験にしる。いいか、お前等がどんなことを起こそうがああ、結局元がダメだったら何もかもダメなんだよ」

「・・・何がだ・・・」

「いいか、よく聞け。ここの先代領主は横領なんてそんな後ろめたいこと一つつも！やってねえんだよ！」

「・・・そんな」

「うるせえ！何がそんなだ！」

「だけど、俺は聞いたんだ・・・」

「お前アホか！第一、農民階級にんなもんがちゃんと伝わるとでも思ってるのか？そんなわけねえだろ！悪いことしてる奴等はな、絶対にバレないようにやってんだ！それこそ低所得生活者の耳になんて入るわけねえんだよ！」

「・・・じゃあ・・・あいつらかああ・・・」

バンドウはすすり泣き始めた。

「・・・それぐらいの知恵はあるのな」

「・・・ハアアアア・・・」

辺りの部下達はまだ状況が理解できていないらしい。お互いに顔を見合わせている。

「か・・・頭、どういことですか？」

「・・・騙されてたんだよ・・・いや、騙すとかそんなもんじゃねえ、・・・もつと馬鹿らしい・・・勘違いだ・・・」

「へ・・・そ・・・それ・・・」

「一応今の話は聞いてたろ・・・繋げたら分かるだろ・・・」
ようやく理解の色が浮いてきた。

「あいつらだ・・・俺等と・・・近隣の領の領主達だったんだ・・・」

「そんな・・・」

「・・・考えてみりゃあ・・・分かったんだ・・・。なんで俺等が切られたか・・・」

「そつだ。気付くのが遅かったな」

「な・・・なんでですかい！」

「俺等は！・・・その年、さらには月々の作物の正確な量を知っている。たとえその照会用の紙が領主の手に渡っていてもだ。誰かが覚えている。だから、やられたんだ・・・」

「・・・ち・ちくしょう・・・それじゃ！なんですか！？今のこれは！！！」

「だから言ってるんだろ！、馬鹿なんだよ！！！」

「う・う・う・う・う・う」 「そんなあああああ・・・」

あちこちで涙を堪えきれない音が噴出した。どうやら思いの他声が大きかったらしく広場全体に声が行き届いたらしい。

その間ソドン領の人達はただ哀れむように捕虜達を見て立っていた。そうしてひとしきり時間が経つと・・・

「・・・領主様、頼みが・・・あります」

バンドウが口を開いた。

「・・・どうしたんですか？」

「俺のこたあ何をしてもいい、ですけど・・・ですけど、こいつらのことはどうか大目に見てやってくださいいい・・・」

「・・・」

「こいつ等は、俺が引き入れたんです！中には足を洗おうとしていた奴等もいやがった！なのに・・・元はといやあ！俺なんです、ですから！！！」

「何言ってるんですかあ！」

捕虜の1人が叫んだ。

「俺等があんたを頭の位置にあげたんじゃないですかああ！そうし

なけりやああなたが動くことはなかった！俺等は！あなたが学をかじっていたから！」

「うるせえぞ！俺が頭だ！」

「やめるよおお！」 「頭ああああ！」

お互いがお互いに変に罪を擦り付け合う。

そんな中少し見当はずれのことを言い、水を差す人間が一人。

「いやあしかし、おまえやっぱ勉強してたんだなあ」

「あん？」

「そつかそつか。なんか妙にかしこいとおもつたんだよなあ」

「ああ、そうですね。私もそれは思っていました」

メヌスがその話に加わる。

「いやあ、正直民家の間から隠れ見えていて冷や汗をかきましたよ。なにしろ突っ込むんじゃなくて直ぐに退却を命じますからね。

普通もう少し硬直時間が長いもんです。その後も引き込みの時は部下には待機を命じて自分だけ出てくるんですから。ランデイさんがいなければ少し酷い状況になっていたかもしれません」

「なんだ、武将にでもなるつもりだったのか？」

「いや・・・ただ、学を修めて、食い扶持を稼ぐために手当たり次第に文字を習って、本を読んで、先生に当たった・・・だから、そんな夢を求めるのを許してくれた親父が・・・過労で倒れた時・・・どんなに・・・。けど、・・・そんな学も・・・真実は見抜けなかった・・・」

「・・・そつか・・・」

辺りに静けさが満ちる。

「・・・それでは、少し早急ですがあなた方を罰します。今までの言葉が審問として考えます。構いませんか？」

「・・・ああ・・・」

「・・・それでは、・・・此度の夜盗達に罰を与える。今後私の命に従い、領外の近郊に田畑などを耕すように！また、有事の際はその体を武器とし、盾とせよ！・・・以上！要するに私の言うこ

とに無条件聞いてください、という意味です」

「・・・そんな・・・んで良いのか？」

「信じられませんか？」

「・・・いや・・・信じ・・・信じたい・・・」

「・・・償ってくれますか？といっても、実質私達が被った被害は寝る時間を削られただけです。対してあなた方は仲間を何人が殺された」

「・・・そんなもん・・・つていやあだめだがよお・・・償うさあ。被害がどうこうじゃねえ。俺達の心が悪かったんだ・・・」

その言葉を聞いてメヌスは黙って辺りを見渡す。

「あなた方も・・・できますか？」

「するとも!」「おうよ!」「俺等でもいいんなら・・・」

口々に声上がる。

「領民も・・・いいですか・・・?」

「構いませんよ」「それが領主様の御意志ならば」「問題ないでしょう」

それを聞いて一礼する。

「ありがとうございます。それでは捕虜の皆さんの拘束を解いて、今夜は各自の家に泊まらせてもらっても構いませんか？明日から家を建てていこうと思つので。」

行動で応じ始めた。

これがメヌスの初の戦闘である。

夜が明けた。

何の連絡もいっていないのに既に捕虜達は広場に集まっている。それはとまどいによる居心地悪さのためか、それともこれからの己の使命のためか・・・。
広場に向かう間にランディとメヌスの二人は意志を確認しあっていた。

「それじゃあ、行ってみるのか？」

「あなたが勧めたんでしょう?」

「ああ、・・・まあな」

お互い徹夜で話し合った。内容はこうだ。ランディがメヌスに北の魔王ダンテの下へ行く気はないかと勧めたのだ。最初は領のことがある、民を裏切ることになるのでは、と渋っていたが、ランディが今のお前の力はこの世界に必要なだ、それも腐った野郎どもに使ってあげるんじゃないだめだ、一生ここで何の足しにもならず生きるのもいいが先代のように羽ばたくべきだ、少なくとも皇帝からは信頼されていたんだろう?、などと説得をするうちに気持ちが変わった。とりあえず今の現状を変えてから行くことにするらしい。

「心変わりはありませんからあなたは旅を続けてもらって構いませんよ」

「いや、別に変わろうが変わるまいが良いんだがよ。ま、手伝いぐらいしていくさ。時間が腐るほどあんのが旅だからな」

「それはまたおもしろい見方ですね」

「ええ〜そうか?」

そんなこんなで広場に辿り着いた時は領民も全員集まっていて、広場はギツシリと詰まっていた。

メヌスは昨日の台に乗り、発表する。

「皆さん、突然ですが・・・私は領主の座を降りようと思います」
.....

元盗賊達は皆啞然としているが、領民は別段平静の顔をしている。それはこんなことがいつかは来るだろうと、中には期待していたものが遂に来たという目をしている者もいる。

「・・・行き先は・・・ゼフェス国」

今度は全員に驚きが伝わった。

一番の古老が手を挙げ、話す。

「魔族という者の国のようですが・・・大丈夫なのですか?」

「ええ、問題ありません」

「そうですね。なら問題ないでしょう」

その発言を潮に皆また平静の顔へと移る。

「……いいんですか？」

「メヌス様……ワシらは、ずっとこのときを待っております。

先代の……ラクス様の後を立派に継ぐと……。あ、この場合の継ぐは、領のことではございませんよ。その、あなたの持つ才です」

「……」

「ワシは……長いことあなた様を見てきました。見守っていたというのではございませんよ。それは恐れ多すぎるので……。やっとなあなたが道を歩くと聞いて、今……。私は……。うれしゅうて……」

老人の目から涙がポロポロと零れ落ちる。

気付けば領民のほとんどが泣いていた。

「ラクス様も……きつと……。お喜びになっている事でしょう……。何の取り得もないただのじいの言葉ですが、このことだけは……。胸にお刻みください……」

「……こちらこそ……。何一つ恩を返せずに……」

「いいえ……。十分過ぎるほどでした……」

「……ありがとう……」

それはメヌスが初めて敬語でない言葉を使った瞬間だった。

「ありがとう」

もう一度言う。

そうしてその後の会議は滞りなく進んで……

五日後

ソドン領外には今新たな家々が所狭しと並んでいる。

そして東の出口の先にメヌスとそれを見送る姿人達の姿があった。

「それでは皆さん、お元気で」

領民達は笑顔で手を振る。その中にはかつての夜盗達の姿もあった。いや、今は元の元の農民か。兵でもあったか。

「メヌス様！」

バンドウが叫ぶ。

「俺は、あんたに恩がある！借りもある！いつでも力になりますよ
！！」

その目には涙が浮かんでいる。

対するメヌスは微笑んで

「・・・ああ、そうさせてもらうよ。・・・それじゃ」

もう後ろを振り返ることなく歩き始めた。

それは破滅への一歩か、希望の未来への一歩か。だがこれだけは言える。

これが、メヌス・アルバンテの正しい道なのだ。

朝日がその体を受け入れるように祝福する。

その背に父と、領民から引き継がれた才を背負って歩いていく。

少し離れた高台から去る人を見送る人影がいた。

ランデイ・ケルト。

(行ったか・・・)

既に早朝に挨拶は済ませてある。

(あいつの、力になってくれよ)

そうして彼も歩き出した。

朝日を背にして歩き出す。

第12話 重い才（後書き）

いかがでしたか？

できれば楽しんでいただければ幸いです。
なにしろ動きがありませんから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9142p/>

神の道化師

2011年10月8日12時29分発行